

ニシテ一時ノ過誤ニ依リテ犯シタル罪ノミカ記載セラレテ是等ノ者ノ爲メニハ終身ノ累ヲ爲シ却テ過ヲ改ムルノ心ヲ磨滅セシメ、而モ一方大逆無道ノ重罪犯人ハ往々ニシテ之ヲ逸シ去ルノ弊ヲ生シタリシヲ以テ、洪武十五年禮部ニ諭告シテ爾來十惡、姦盜、詐僞等其犯ストコロノモノカ天下ノ良風美俗ヲ害スルモノ其他罪案重クシテ徒刑以上ノ刑ニ該ルモノノミヲ亭ニ揭示セシメ、其餘ノ雜犯又ハ公私ノ過誤ニシテ風化ニ關係ナキモノハ悉ク之ヲ除斥シテ良民自新ノ路ヲ開クヘク、若シ亭ヲ破壊シ又ハ揭クルトコロノ法令ヲ除キ、若クハ罪人ノ姓名ヲ塗抹シタル者アルトキハ法ニ照シテ處罪スヘキヲ令達シ以テ此制度ヲ維持スルコトトセリ。

其他明代三百年間ニ亘レル刑制上特別法トシテ制定セラレタルモノ許多アリト雖モ茲ニ述フヘキ違アラス。

尙ホ明代ニ於ケル鴻儒碩學中法制ニ關シテ一代ノ卓見ヲ有セシ者少カラスシテ方孝孺、王船山、顧炎武ノ如キハ最モ傑出セルモノトスヘク、殊ニ王船山ハ宋ノ曾布カ誅心說ヲ提唱シテ「以賊論罪主義」ヲ排シタルト同シク法ノ罰スヘキハ之ヲ枉クルノ大小ニ着眼スヘキモノニシテ、枉クルノ大ナルハ重罰スヘク、枉クルノ小ナルハ輕罰スヘク必スシモ賊ノ多少ヲ以テ論スヘキニ非ストシ、論理例證甚タ至

レルモノアリテ當時國法ヲ誹議セハ其咎輕カラサリシ時代ニ在リテ吾ヲ罪セントセハ乞フ我ヲ坑ニセヨト叫ヒツツ明律ノ時世ニ適セサルヲ指摘シテ其改正ヲ叫ヒタルカ如キハ眞ニ多トスヘカリシナリ。

第十五節 清代ノ刑制

第一項 大清律集解附例

清祖愛親覺羅氏カ今ノ吉林省敦化縣地方ニ女真民族ヲ以テ興リ、明朝ノ萬歷年代ニ至リテハ後ノ太祖武皇帝ハ既ニ其地方ニ相當ノ勢力ヲ張リテ事實上明室ヨリ獨立シ、萬歷四十四年ニハ其年號ヲ天命元年ト呼ヒ、明ノ天啓六年ニハ太宗文皇帝位ヲ繼キテ年號ヲ天聰ト改メ、天聰十年ニハ遂ニ國號ヲ稱シテ大清トイヒ、其聲威ハ滿州蒙古及ヒ朝鮮ニ及ヒシカ繼テ世祖順治帝ノ世ニ入ルヤ偶々明ハ李自成ノ内亂ニ依リテ亡ヒシニ依リ清朝ノ兵ハ之ヲ好機トシテ山海關内ニ入り、更ニ順治元年（明ノ崇禎十七年）五月ニ至リテ北京ニ入ルヲ得タルヲ以テ、同年十月一日遂ニ天下ニ君臨スルノ令ヲ發布シテ茲

ニ清朝天下ノ開基ヲ見ルニ至リタルナリ。

右ノ如ク愛親覺羅氏滿州ニ在リシ間ニ於ケル刑制ニ付テハ今言フヲ須ヒサルトコロナルカ、一朝明ニ代リテ天下ニ君臨スルヤ其新制令ヲ發布スルヨリ急ナルハナク、而モ早急ノ間ニ唐宋ノ後ヲ承ケテ熟成シタル明律ヲ改刪セントスルカ如キハ不能ナルノミナラス、文化ノ進ミタル漢民族ニ臨ムニ北滿女真民族ニ固有ナル制法ヲ以テセントスルカ如キハ新天下統制ノ途ニ非サルハ極メテ明白ナリシカ故ニ、當時單ニ支配階級ニ屬スル滿州官吏及ヒ滿州八旗兵ニ關スル制令其他一二ノ特別ナル理由アルモノノ外ハ一切ヲ舉ゲテ明代ノ制令ヲ維持スルノ方針ヲ定メタリ。

斯クテ順治元年ヨリ刑部ニ勅シテ大明律並ニ從來ノ條規成例ニシテ律ニ關係アルモノヲ一括シテ一新法典ヲ制定スルコトトシ、順治三年其成ヲ告クルヤ同帝之ヲ裁可シテ天下ニ頒布シタリ、コレ清朝第一次ノ成文法典ニシテ「大清律集解附例」ト稱スルモノ之ナリ、蓋シ律ノ條規ノミナラス多クノ關係條例ヲモ便宜上附則トシテ一括シ其他之カ解釋ニ關スルモノヲモ併セタリシカ故ナリ、今順治帝カ此法典ニ附シタル自製ノ序文タル大清律原序ヲ一見セハ其制定ノ沿革ノ概要ヲ知ルヲ得ヘキカ故ニ茲ニ之ヲ紹介セン。

朕惟フニ太祖太宗業ヲ東方ニ創メ、民ハ淳、法モ亦簡ニシテ死刑ノ外ハ唯鞭笞アリシノミ、朕今天祐ニ依リテ中華ニ君臨ス、人民既ニ衆ク情僞多端ニシテ奏議ニ遇フ毎ニ法刑ノ輕重出入頗ル擬議ニ煩シ、而モ律例ノ未タ新ニ制定セルモノナキカ故ニ有司ハ稟請承訓スヘキナシ、コレ嚮ニ法司ノ官ニ勅シテ廣ク廷議ヲ集メテ明律ヲ詳譯セシメテ之ヲ増損劑量シテ平允ナランコトヲ期セシメタル所以ニシテ、今ヤ書成リテ奏進シタルカ故ニ朕再三之ヲ覆閱シタルノ外尙ホ内院ノ諸臣ニ命シ其妥確ヲ期センカ爲メニ更ニ之ヲ校訂セシメテ今茲ニ刊布スルニ至リタルモノトス、之ヲ名ケテ大清律集解附例トイフ、汝内外有司ノ官吏敬ンテ之ニ憲リ敢テ任意ニ之ヲ低昂スルナク務メテ百官萬民ヲシテ名義ノ畏ルヘクシテ、犯法ノ重キヲ知ラシメハ冀クハ刑ヲ措キテ問ハサルノ美風アルニ庶幾カラシム、コレ我祖宗ノ生ヲ好ムノ德ヲ昭カニスル所以ナリ子孫臣民ソレ世々之ヲ守レ。

今古今圖書集成ノ載セタル此法典ノ内容ヲ見ルニ、其全律七篇即チ名例律、吏律、戶律、禮律、兵律、刑律及ヒ工律ノ諸篇ヨリ成ルコト、並ニ各篇ニ於ケル項目ノ分類亦前節ニ掲ケタル洪武更定大明律ト全然其構成ヲ同シタスルモノトス、但前述ノ如ク附則トシテ、(イ)「附六賊」即チ各種ノ盜罪ニ於ケル

贓品量ノ多少ニ從テ刑種刑量ノ按排率ヲ定メタルモノ、(ロ)附納贖例即チ老疾幼弱其他犯人ノ身的事
情ト犯罪ノ種別ニ依リ、若クハ犯罪ノ發生カ京内ナルト京外ナルトノ差別等種々ノ見解ニ依リ、贖罪
ノ料額ニ關スル等級ヲ定メタルモノ、(ハ)獄具及ヒ、(ニ)親族關係ヲ定ムル喪服總則、本宗九族、五
服正服制等ヲ一括セルモノトス。

第二項 刑部現行則例ノ制定

以上略述スルカ如クニシテ清國開基ノ最初期ニ於ケル國家統治ノ基本的制法ハ之ヲ定ムルヲ得タル
モ、世態ノ變遷ト異民族間ニ於ケル統制上ノ復雜ハ到底前代明朝ノ律令ニ滿譯ヲ附シタルニ過キサレ
程度ノモノヲ固執スルヲ許ササルモノアリテ、前項ニ述ヘタル大清律集解附例ノ頒布アリタル後二十
有余年ヲ經タル康熙九年ニ至リテ之カ校正ヲ爲スヘキノ議アリテ漸次其步武ヲ進メツツアリシカ、更
ニ康熙十八年ニ至ルヤ是等ノ基本的制法ノ改修ハ大事業ニシテ容易ニ行ヒ難キカ故ニ、其事業ノ進行
ヲ圖ルト同時ニ一面ニ於テハ別ニ應急ノ手段トシテ、臨時必要ノ事項ニ付テハ大清律集解附則ニ定ム
ル原則ニ對シテ隨時特例ヲ設ケ、以テ世運ノ變遷ニ對スル融通方法ヲ講セサルヲ得サルニ至リシハ自

然ノ勢トイフヘク、蓋シ祖宗制定ノ大法ハ之ヲ捨ツルニ忍ヒサリシモ而モ法制ノ固定ハ一日ト雖モ此
世運ノ變遷ト民情ノ推移ニ伴ハサルヲ如何トモシ難カリシナリ、殊ニ右ノ大清律集解附例ノ漢文ト滿
文トノ間ニハ譯文ノ齟齬セルモノ若クハ意義ノ明確ヲ欠クモノ等アリテ種々ノ支障ヲ生スルニ至リタ
リ、コレ同年九月十四日附ノ上諭ヲ見ルニ至リタル所以ナリトス、曰ク

國家カ法制ヲ設クルハ暴ヲ禁シ姦ヲ止メテ良善ノ民ヲ安全ナラシメンカ爲メナリ、故ニ律
令ノ繁簡ハ時ニ因リテ宜シキヲ制スヘク、總テ古帝王カ民命ヲ欽恤スルノ意ニ合センコト
ヲ期スヘキナリ、サレハ從來人心漸ク滋僞ニ傾キテ法網ヲ輕視シ、強暴ノ徒ハ小民ヲ凌虐
スルニ至ルヤ、當初ノ定律ノ外ニ別ニ條例ヲ設ケテ是等ノ徒輩ヲシテ其畏レテ而シテ警シ
ムヘク、以テ刑辟ニ罹ルヲ免カレシメントシタリ、然ルニ近來法ヲ犯ス者愈々多クシテ姦
僞ノ止ムコトナク人命ノ係ハルトコロ重大ニシテ朕カ心惻然タリ、サレハ從來ノ律ニ依レ
ハ死ニ該ラス又ハ罪情輕シト認ムヘキモノニシテ、條例ニ依レハ死ニ處スヘク又ハ嚴ニ從
テ其刑ヲ論スヘキモノトセルアリテ、前後支吾スルモノアルトキハ其去ルヘキハ之ヲ去リ
存スヘキハ之ヲ存シ、以テ律ト例トノ調和ヲ計ラサルヘカラサルナリ、依テ此際九卿及ヒ

當該ノ有司ハ其宜シキニ從テ酌定確議シ案ヲ具シテ上奏スヘシ。云々
 右上論ノ結果刑部ヲ中心トシテ其業ニ當リ遂ニ翌康熙十九年四月二十四日ニ至リ刑部現行則例ナル
 モノヲ得テ社會ノ新事態ニ應スルコトトシタリ。

古今圖書集成祥刑典第五十九卷律令部彙考ニ於テハ其内容ヲ逐一紹介セルモ今之ヲ略ス。

第三項 大清律例集解ノ制定

右ノ如ク刑部現行則例ノ名ニ於テ基本律ニ對スル特例ヲ定ムルノ途ヲ開キタルカ、爾後年ト共ニ則
 例ハ其量ヲ増シ其質ヲ變シ遂ニ根本ノ律ハ遠ケラレテ其存在ノ意義ヲ失ヒ、執法司直ノ職ニ在ル者ハ
 祖宗遺制ノ大本ニ立脚シツツ世態ノ變遷ト民情ノ推移ニ處シテ其運用ノ宜シキヲ制スヘキノ態度ヲ持
 スルコトナク、徒ニ律ニ對シテ例外的ノモノタル則例ノ末ニノミ趨リ、新ハ新ヲ生ミ變ハ變ヲ作リテ
 其止マルトコロヲ知ラサルニ至ルヘキ趨勢ヲ生シ、而モ康熙大帝在朝ノ六十餘年間ハ清朝文化ノ高潮
 期ニ入り、世態ノ複雑ト人事ノ巧曲ハ遂ニ法制ノ全般ニ亘レル一大整調ヲ行フニ非サレハ之ヲ收拾ス
 ルコト能ハサルニ至リタリ、茲ニ於テカ律例合體ノ制書ヲ作り律ノ根本ヲ立テテ之ニ排スルニ例ノ應

用ヲ以テシ、一面ニ在リテハ律ノ根本義ヲ無視セサランコトヲ期シツツ一面ニ在リテハ世態ノ推移ニ
 處シテ其運用ノ變通ヲ滑カナラシメンコトヲ企テタルナリ、斯クテ此事業ハ前述ノ如ク康熙九年以來
 企劃セラレツツアリシモ愈々同二十八年ニ到リ、新ニ律例館ナル特設ノ機關ニ依リテ其實行ヲ期スル
 コトトナリ其後三十有餘年ヲ費シタルモ康熙年間ニ在リテハ遂ニ其成ヲ見ルコトナク、次世雍正二年
 ニ至リテ漸ク其功ヲ上ケ大清律例集解三十卷ヲ得タリシナリ、此康熙雍正兩時代五十餘年間ニ亘リテ
 其心血ヲ注キタル清朝ノ立法事業ノ一斑ハ右例律館ノ總裁タリシ三泰カ乾隆帝ニ上リタル奏文ノ前半
 ニ於テ之ヲ略記セルカ故ニ今之ヲ紹介スルコトトセン。

律例館總裁臣三泰等謹テ查スルニ、大清律ハ世祖順治皇帝登極ノ初ニ當リ刑部尙書吳達海等

ニ命シテ明律ヲ詳譯セシメ、之ニ參スルニ我國制ヲ以テシ、其書ノ成ルヤ奏進シテ中外ニ刊

布シタルモノナルカ、次テ康熙九年ニ至リテ刑部尙書對喀納等ニ其校正ヲ命セラレ、又十八

年ニ至リテ特ニ刑部ニ諭シテ其以前ニ於ケル定律以外條例全部ヲ調査シ、其去ルヘキヲ去リ

存スヘキヲ存シ詳カニ酌定ヲ加フヘキヲ命セラレ、是等ヲ刊刻シテ天下ニ適用スヘキコトト

シ名付ケテ現行則例ト爲シタルカ、次テ康熙二十八年ニ至リ、臺臣盛符升ノ奏請ニ從ヒ此現

行則例ヲ大清律條例ノ内ニ載入スヘキコトナリ、尙書圖納張玉書等總裁ト爲リ、康熙四十六年ニ至リテ全部之ヲ繕寫シテ奏呈シタリシモ遂ニ裁定ヲ經ルニ至ラザリシカ、(次世)雍正元年其遺業ヲ繼キ大學士朱軾及ヒ尙書查郎阿等總裁ト爲リ再ヒ詳細ニ調査分析シテ増減スヘキヲ増減シテ漸クニシテ其完キヲ得タリシカ故ニ雍正五年ニ至リテ奏准ヲ經テ天下ニ頒行スルコトナリタリ。云々(下略)

此上奏文ニ所謂雍正五年ノ頒布ニ係ルモノ即チ大清律例集解之ナリ、此事業ニ付テハ雍正帝ハ其完美ヲ期センカ爲メニ是ヨリ先雍正三年五月諭告ヲ下シテ曰ク。

朕臨御シテ以來刑獄ヲ欽恤シ法司ノ奏議ニ遇フ毎ニ必スヤ再三熟慮シテ苟モ其正義ニ協ハサルモノアラシカカ恐ル、又常ニ律例ノ一書ヲ得ンコトヲ念トス、蓋シ用刑ノ本ハ中ニ在リ、而ルニ今ヤ條例繁多ナルヲ以テ之ヲ校訂畫一セサルニ於テハ有司ハ之ヲ援引シテ斷獄スルニ當リ其意ニ任カセテ輕重スルヲ得テ誤ヲ貽スコト少カラス、故ニ特ニ纂修館ニ命シテ期ヲ定メテ告竣セシメタルカ、今其編纂ニ係ハル全稿ヲ進呈シタルヲ以テ逐一之ヲ詳覽シタルニ、尙ホ駁正ヲ行フヘキ點少カラスシテ既ニ一々批示シ置キタリ、但刑ハ教ヲ弼クル所以ニシテ

關係スルトコロ甚大ナルカ故ニ、更ニ九卿ヲシテ會同細看シ日ヲ限リテ斟酌盡善セシメ以テ朕カ刑名ヲ慎重ニスルノ意ニ副ハンコトヲ期セシム。云々

斯クテ雍正五年ニ至リテ大清律例集解ノ成ルヤ帝自ラ之ニ序セリ、其概意ニ曰ク「周禮ニ於ケル司寇ノ職掌、五刑ノ聽獄、制法ノ周布等皆先聖カ息爭化俗ニ心ヲ用ヒテ刑ハ刑無キヲ期セシ所以ナリ、康熙皇帝在位六十一年間常ニ群生ノ涵育ト罪刑ニ對スル寬典ニ心ヲ用ヒタル結果前後無類ノ至治ヲ致セリ、朕其餘ヲ繼キタルカ故ニ亦心ヲ刑政ニ注キ、即位ノ後直チニ諸臣ニ命シテ當時既ニ律例館ニ於テ纂修シツツアリシモノヲ基本トシテ更ニ資料ヲ蒐輯精査セシメ、其稿本ノ成ルヤ朕一字一句必スヤ自ラ省覽ヲ加ヘ、毎ニ諸臣ト辯論商確折中裁定シ、或ハ異ヲ折リテ同ニ歸シ成ハ繁ヲ刪リテ約ニ就キ、務メテ當初造律ノ本義ニ副ヒ、輕重ヲ權リテ訟獄ノ情ヲ盡シ以テ寬嚴其體ヲ得ンコトヲ期シ今其編校ノ成ルヲ告ケタルヲ以テ之ヲ偏ク内外ニ刊布シ、以テ周禮ニ於ケル憲ヲ衙門ニ掲ケ法ヲ民ニ讀ムノ古制ニ倣ヒテ億兆ニ對シテ制法ノ徹底スヘキヲ期スルト共ニ永ク之ヲ遵守スヘキヲ命ス云々」

大清律例集解三十卷ハ皇朝文獻通考卷百九十七、刑考、三、刑制、ノ項ニ於ケル説明ニ依レハ全律三十卷四百三十六條ヨリ成リテ各篇及ヒ各節ニハ夫々總註又ハ分疏ヲ添ヘ、更ニ各本條ニハ一々其義

解ヲ加ヘ異説アルモノハ之ヲモ紹介シ、又所謂「例」ニ至リテハ共計八百二十四條アリテ、之ヲ三種ニ區別シ康熙以前ニ係ル累代ノ舊例ハ之ヲ原例ト稱シテ三百二十一條ヲ掲ケ、康熙年間ノモノハ増例ト稱シテ二百九十條ヲ掲ケ、雍正年間ノモノハ欽定例トシテ二百四條ヲ掲ケタルモノトス、但此三種ノ例ニ屬スル條文總數ハ八百十五條ニシテ右八百二十四條ニ照シテ少キコト九條ナルカ、コレ或ハ文獻通考ニ誤印アルニ因ルモノナランカ。

雍正帝ハ此律例ヲ頒布スルト同時ニ甚タ重要ニシテ勇氣アル論旨ヲ公ニシタルコトハ茲ニ之ヲ記載セサルヘカラサルナリ即チ八議ノ制度ヲ事實上ニ撤廢スヘキモノトシタルコト之ナリ、其論旨ニ曰ク。

朕律例ノ舊文ヲ覽ルニ八議ノ條アリ、曰ク議親、議故、議功、議賢、議能、議勤、議貴、議實之ナリ、其歷代相沿フヤ既ニ久シ、我朝律例仍ホ其文ヲ載スト雖モ而モ未タ嘗テ之ニ照シテ實行セス、蓋シ深意アルヲ察セサルヘカラサルナリ、夫レ刑罰ヲ設クルヤ天下ノ至公至平ニ出テ妄リニ輕重スヘカラサルナリ、若シ親、故、功、賢等ノ列ニ入ルヘキ人タルノ故ヲ以テ法ヲ屈シテ以テ優容ヲ示サハ、コレ意ノママニ之ヲ昂低スルモノニシテ律ハ一定セルニ非

サルナリ何ソ之ヲ公平トイフヲ得ンヤ、且親故功賢等ノ列ニ在ル者ハ其效績ト力勞ニ因リテ朝廷ノ倚信スルトコロ、若クハ勳門戚親ニ因リテ國家ノ尊敬スルトコロナルカ故ニ、常ニ禮ヲ秉リ義ヲ守リテ以テ士民ヲ率ユルノ風ナカルヘカラサルナリ、而ルニ却テ自ラ愛セスシテ法ニ罹ルカ如キハ愚民ノ法ヲ知ラスシテ之ヲ犯ス者ニ比シテ咎更ニ大ナリトス、若シ執法者タル者曲ケテ之ヲ宥メントスルカ如キアラハ勸善懲惡ノ意義果シテ何レニ在リヤ、犯ストコロ實ハ無心ニ出ツルハ情ニ於テ恕スヘキカ故ニ隨時酌量シテ恩典ヲ加フルハ決シテ不可ナリトセス、サレトモ親故功賢等ノ理由ヲ以テ未タ過ナキ以前ニ於テ、豫メ之ヲ待ツニ法例ノ外ニ在ル者トスルカ如キハ其名ハ厚遇ニ在リテ其實ハ至薄ナリ、蓋シ自ラ八議ノ條規アルヲ特ミテ或ハ任意無忌ノ行ヲ爲シ、遂ニ必スヤ國家ノ大法（謀反、大逆其他八議ノ者ト雖モ其特典ヲ得ルコト能ハサル大罪惡）ヲ犯スモ尙ホ自ラ之ヲ止ムルコト能ハサルニ到ラン、斯ノ如キハ寬恤ノ虛文ヲ以テ轉シテ之ヲ罪戾ニ陷ルルモノトイフヘク姑息ノ愛ハ優恤ト爲スニ足ラサルナリ、今律例ヲ輯修スルニ當リテ詳カニ其各條ヲ斟酌シテ以テ事理ニ至當ノモノト爲サントトヲ期スルニ當リテ忽チニシテ此八議ノ條ヲ刪去センカ、恐ノクハ人ハ本來八議ノ制自

體カ非理ナルモノタルコトヲ知ラスシテ却テ從來久シキニ亘レル遺法ヲ害スルモノタルヲ恐ルルナラン、故ニ仍ホ之ヲ律中ニ載セタリト雖モ、特ニ茲ニ此諭旨ヲ發シ天下ヲシテ八議ニ關スル規定ハ以テ法ト爲スヘカラサルモノタルコトヲ曉ラシム、サレハ親故功賢其他八議ノ列ニ在ル者モ亦常ニ謹慎シテ犯法ノ重キヲ知リテ朕カ刑ヲ欽恤スルノ意ヲ知ルヘキナリ。

コレ實ニ周禮ノ制定以來歷朝刑律ノ原則トセル八議宥恕ノ制度ヲ廢絶セントスルモノニシテ、其意氣甚タ壯ナリトイフヘキモ、或ハ少數ニシテ文化ノ程度低キ滿洲民族カ一朝ニシテ漢朝タル明室ニ代リテ中國ニ君臨スルコトト爲リタルカ故ニ、一ハ其同族タル王侯、貴族、故舊其他在朝文武百官ノ自制自疆止マサルノ決意ヲ爲スヘキヲ責成スルト同時ニ、一ハ多數ノ漢民族ニ對シ客來皇家ノ自制スルトコロアルヲ知ラシメントスル政策ニ出テタルモノト知ルヘキナリ。

第四項 大清律例ノ制定

雍正五年大清律例集解ノ頒布アリタル後約十年、乾隆元年ニ至リテ又々尙書傅爾丹建言シテ曰ク、「大清律例集解ニ掲載セラルル原例、増例及ヒ欽定例三項ノ規定ハ、今ヤ悉ク現行ノモノニ非スシテ實

際上是等ノ條例ヲ定メタル後漸次酌改セラレタルトコロアルカ故ニ、此際特ニ大臣ヲ特任シテ律例館ヲ主宰セシメ、新舊ノ條例ヲ調査シ、律文律註ニシテ舊ニ依ルヘキモノヲ除クノ外ハ其採擇スヘキモノナリヤ否ヤヲ定ムルト同時ニ、若シ採擇スヘキモノナルニ於テハ之ヲ各關係律條ノ下ニ載録スルコトトシ、以テ律ト例トノ從屬關係ヲ確切ニシテ敢テ之ヲ他ノ部分ニ移動セサルコトトスヘク、斯ノ如クニシテ纂輯ヲ終リタルトキハ欽定ヲ經タル上之ヲ刊刻頒示シテ實施スヘク、但其前豫メ各省ノ總督撫其他司法ノ職ニ在ル者ニ對シテハ從來ニ於ケル實際上ノ經驗ニ本キテ其新定律例ニ對スル見解ヲ上奏セシメ、之ヲ同館ニ移付シテ採擇ニ資スヘシ云々、斯クテ此議容レラレ前項ニ記載セシカ如ク、三秦カ律例館ノ總裁ニ任セラレテ乾隆元年以來新律例ノ編纂ニ從事スルコトトナリタル結果、乾隆五年ニ至リテ大清律例ノ一書成ルヲ告ケタルモノトス。

此書ハ全部四十七卷全律四百二十六條ヨリ成ルモノニシテ、舊本タル大清律例集解ニ於ケル總註ハ之ヲ刪リタルモ其註内ノ記載ニシテ律議ノ解釋上發明スルトコロアリ、若クハ律ノ規定ノ及ハサルヲ補フニ足ルヘキモノハ別ニ例中ニ特條ヲ立テテ以テ成例トシタル結果、附例ノ總數ハ千四十九條ニ達シタルカ、是等ノ内原例及ヒ増例ノ各目ニ屬スルモノ(前項參照)及ヒ乾隆四年十二月以前ニ既ニ奏准

ヲ經テ其實施ヲ見タルモノハ各關係ノ律條下ニ順次載録シ、又同五年以後ノ例ハ五年毎ニ一括シテ陸續律例ノ後ニ修附スルコトトシ、斯クテ乾隆帝自ラ右大清律例ニ序文ヲ付シテ天下ニ頒行シタリ（皇朝文獻通考卷百九十八刑考四刑制）。其序ニ曰ク、

皇考世宗憲（雍正）皇帝（中略）明訓ヲ垂レテ曰ク、寬嚴ノ用ハ必スヤ其時ニ因ルト、洋々タル聖謨洵ニ用法ノ權衡制刑ノ準則ナリ、朕謹テ丕基ヲ繼キ恭シク德意ヲ承ク、深ク「時ニ因ル」ノ義ヲ念ヒ以テ中ヲ民ニ建テシテ期シ、大臣ヲ簡命シテ律文及ヒ遞年奏定ノ成例ヲ取テ詳悉參定シ、重ネテ編輯ヲ加ヘ之ヲ天理ニ授リ人情ニ準シ、一ニ至公ニ本キテ而シテ至當ニ歸シ、折衷損益シテ四百三十六門千有餘條四十七卷ト爲シ、條分縷折シテ倫叙秩然タリ、以テ宇内ニ頒布シテ畫一ノ守ヲ昭カニス云々（下略）

之ニ依リテ之ヲ觀レハ愛親覺羅氏ハ北阪未開ノ地ヨリ其身ヲ起シタリト雖モ明ニ代リテ天下ニ君臨スルヤ其施政ニ全力ヲ傾注シ、支那古來ヨリノ傳統的的政策タル「治ハ賊盜ヲ首トス」トイヘル標語ヲ重ンシ、天下ノ至治ハ賊盜ヲ禁制シテ民心ヲ安泰ナラシムルヲ以テ其第一着手段ナリトスヘキ政策ニ盡瘁シタル成績ハ眞ニ没スヘカラサルモノアリテ、其熱誠ノ度ハ明祖ニ勝ルコトアルモ決シテ之ニ劣

ルモノニ非サルヲ知ルヘキナリ。

斯クテ右ニ述ヘタルカ如ク五年毎ニ一度新舊ノ例ヲ整調シ、將來成例トナスヘキモノハ之ヲ律ニ追増スルノ業ハ、其後嘉慶、道光、咸豐及ヒ同治ノ世ニ至リテモ行ハレタルトコロナルカ、此間基本タル律文其モノニ至リテハ敢テ聊モ之ヲ改修シタルニ非サルナリ。

本律ハ七編七律四百二十六條ヨリ成ルモノニシテ今其内容ノ概要ヲ示サハ左ノ如シ（同治十一年湖北識局新鑄、大清律例彙輯便覽）。

第一編 名例律ハ刑法總則ニ當ルモノニシテ四十六條ヨリ成リ、明律（永徽律）カ四十七條ヨリ成レルニ比シテ實質上何等ノ異同ナシトイフヲ妨ケサルナリ、唯本律ニ於テ注意スヘキハ充軍地方ナル一條ヲ設ケ、罪囚ヲ軍ニ充ツル場合ニ於テ、某々ノ地方ニ於ケル罪囚ハ某々ノ地方ニ護送シテ其地方警衛ノ軍務ニ服セシムヘキヲ定メタルコトニ在リトス、其他ノ五刑、十惡、八議、贖罪、文武官ノ公罪、私罪、自首減免等皆明律ニ付テ既ニ述ヘタル大綱ニ異ナルコトナシ。

第二編 吏律ハ職制及ヒ公式ノ二節アリテ何レモ十四條共計二十八條ヨリ成リ、主トシテ職

權ノ濫用ヲ防キ其職務ニ忠實ナルヘキヲ保障セントスル目的ニ出テタル規定ニシテ明律ノ三十三條ニ比シテ少キコト五條ナリトス、本編ノ規定中從來ヨリ最モ適用多ク、從テ之ニ關スル成例ノ蓄積セラレタルモノハ「賈舉非其人」ノ罪ニシテ自己ノ縁邊恩威ノ關係ヲ利用シテ登用スヘキニ非サル庸材ヲ登用シタルノ罪ヲ定メタルモノニシテ、從來官界ニ於ケル弊害ノ最モ大ナルモノヲ妨カントスルニ在リトス。

第三編

戸律ハ戸役十五條、田宅十一條、婚姻十七條、倉庫二十三條、課程八條、錢債三條及ヒ市廛五條ノ七節八十二條ヨリ成リ、明律ノ九十五條ニ比シテ少キコト十三條ナルカ實質上大差アルコトナク、現今ノ法理觀念ヨリ言ハハ民法上ノ規定ニ屬スルモノ多キモ、其違反ニ對シテハ常ニ刑罰ヲ以テ臨メルカ故ニ亦刑法ノ一部トイフヘキナリ、人多ク支那ニ於テハ戸籍ノ制度ナシトイフモ、周禮以來戸口調査ニ關シテハ最モ嚴密ノ規定アリシナリ、唯其目的トスルコロハ賦役又ハ人頭稅等ノ勵行ニ資セントスルニ過キサリシカ故ニ規定アリト雖モ其實效ヲ舉クルコト能ハサルノミ、本律錢債ノ節ニ於テ利息制限ニ關スル一本一息ノ原則又ハ契約不履行ニ對スル刑罰

的制裁規定ノ如キ、皆周漢唐以來ノ遺制ニシテ支那ノ實情ニ適セル自然ノ產物ナリトス、又市廛ノ節ニ於ケル規定ニ於テ問屋若クハ仲買人ノ暴利取締ヲ嚴禁スルカ如キ、亦明律ヲ襲套スルモノナリト雖モ極メテ妙規定トイフヘキナリ。

第四編

禮律ハ祭祀六條及ヒ儀制二十條ノ二節共計二十六條ヨリ成リ、全然明律ニ同シ。

第五編

兵律ハ宮衛十六條、軍政二十一條、關津七條、厩牧十一條及ヒ郵驛十六條ノ五節共計七十一條ヨリ成リ、明律ノ七十五條ヨリ少キコト四條ナルモ實質ニ於テ異同ナク主トシテ軍務軍律ニ關スルモノトス。

第六編

刑律ハ賊盜二十八條、人命二十條、鬪毆二十二條、罵詈八條、訴訟十二條、受贓十一條、詐僞十一條、犯姦十條、雜犯十一條、捕亡八條及ヒ斷獄二十九條ノ十一節共計百七十條ヨリ成ルモノニシテ、明律ト異ナルトコロハ詐僞ノ節ニ於テ偽造寶鈔ノ一條ヲ删除シタルノミ、何故ニ此一條ヲ删除シタルヤハ明カナラサルモ唐律ニモ亦此條ナク、惟フニ唐代ニ於テモ亦清代ニ於テモ寶鈔即チ金貨弊ノ實物ノ存在セザリシニ因ルモノナランカ。

第五項 大清現行刑律

第一目 變法自強ノ風潮ト新施設

清朝ノ祖宗順治、康熙、雍正及ヒ乾隆ノ間百五十年ヲ通シテ刑制ノ建設刷新ニ前代未曾有ノ繼續的努力ヲ盡シタルコト前述ノ如シ、而モ順治帝ノ所謂子孫臣民世々之ヲ守ルヘキ萬世不易ノ法典ハ遂ニ之ヲ得ヘカラスシテ、其後對內的ニ於ケル世態ノ變遷ト對外的情勢ノ推移ハ茲ニ支那文化ト其固有ノ制度ニ對スル未曾有ノ衝動ヲ來スノ止ムヲ得サルニ至リシナリ、蓋シ十五世紀ノ末葉ニ至リテ印度航路ノ開始セラレテ以來葡人ノ支那ニ來ルモノ多ク、之ニ次テ英人亦印度征服ノ威力ヲ以テ支那ニ進出シ、千六百八十五年(康熙二十四年)ニハ廣東ニ於テ一定ノ地域ヲ劃セル商工業上ノ地歩ヲ獲得シテ遂ニ後日ニ於ケル專管居留地ノ核子ヲ創設スルニ及ヒ、又一面ニ於テハ之ト前後シテ千六百八十七年露國トノ間ニ「ネルチンスク」條約締結セラレ、次テ千七百二十七年ニ至リ恰克圖條約締結セラレタルヲ始トシ、更ニ次テ各國トノ對外關係ヲ生シ、茲ニ唐虞三代ニ其萌芽ヲ發生シ唐宋ニ至リテ百花爛漫

ノ狀ヲ呈シ、清初ニ降リテ其餘風唐宋ヲ歷スルノ盛觀ヲ呈シ、其間常ニ四隣ヲ風化シ來リタル漢民族固有ノ文化ト制法ハ遂ニ全然其系統ト歸向ヲ異ニセル西來ノ文化ト制法ニ直接ノ接觸ヲ爲ササルヲ得サルノ勢ヲ生シ、更ニ外ニハ鴉片戰爭(一八四〇)、英佛對清戰爭(一八六〇)、清佛戰爭(一八八四)アリ、内ニ長髮賊ノ亂(一八五〇)ヲ經テ、日清戰爭(一八九四)——一八九五)、北清事變(一九〇〇)——一九〇一)アリ、其結果ハ四周ノ領域ト關稅ノ自主權ヲ失ヒ、又治外法權制度ノ羈絆ニ束縛セラレ漸次其國威ノ替敗ヲ自覺セサルヲ得サルノ狀ヲ呈スルニ至リ、殊ニ新興日本ノ勢威年ト共ニ揚ルヲ見タル清朝ハ茲ニ内外ニ逼迫セル事情ニ刺戟セラレテ唐虞周孔ノ遺制タル禮刑制度ノ基本觀念ニ對シテ自ラ前代未曾有ノ一大改革ヲ斷行スルニ非サレハ此大勢ニ處スルニ足ラサルヲ覺悟スルニ至リ、コレヨリ清朝ノ末葉ニ於ケル變法自強ノ政策計畫ノ時期ニ入ルモノトス。

此間ニ在リテ清朝及ヒ京師内外ノ重臣ヲシテ衷心ヨリ變法自強ノ決心ヲ爲サシメタルモノハ北清事變ニシテ、光緒二十七年(一九〇一)九月同伴ニ關スル議定書成ルニ先立テ、南清ノ重鎮湖廣總督張之洞及ヒ兩江總督劉坤一等ハ清朝ニ對シテ連合奏議シテ、從來ノ積弊ヲ匡正シテ其法制ヲ整頓シ泰西ノ法律ニシテ採擇スヘキモノハ之ヲ採擇スルニ吝ナラサルヘキヲ切言シテ時弊ニ適中セシモノアリシカ

故ニ、廟堂ニアリテハ政務處大臣榮祿等ノ贊成スルトコロトナリ、遂ニ同年八月二十日ノ上諭ト爲リタルモノニシテ、其前既ニ政務處ナル特設機關アリテ大勢ニ順應シ羣言ヲ博採シテ己ヲ捨テテ人ニ從フノ態度ヲ以テ、努メテ泰西ノ制度ノ善ニ倣ヒテ中國法制ノ弊ヲ救ハントスルノ試辦ナキニ非サリシモ、此奏議ハ甚ク支那ノ朝野ヲ動カシ茲ニ此上諭ヲ見ルニ至リシモノニシテ「國家安危ノ命脈ト中國生民ノ轉機ハ一ニ變法自疆ニ在リテ、宗廟ト臣民ノ計ハ之ヲ捨テテ他策ナキニ依リ上下一致此事ニ當ルヘシ」トシタルモノナリ、而シテ繼テ翌光緒二十八年四月ニハ又々上諭ヲ發シテ曰ク「現在諸外國トノ通商交渉益々煩多ト爲リタルヲ以テ沈家本及ヒ伍廷芳ヲ修訂法律大臣ニ特任シテ現行ノ律例中是等通商交渉ノ情形ニ按照シテ外國ノ法制ト齟齬スルモノハ各國ノ法律ヲ參酌シ心ヲ悉シテ考訂ヲ加ヘタル后之ヲ奏議セシメ、務メテ中外ノ通商交渉ニ裨益アラシムコトヲ期スヘク、其奏議ノ上ハ更ニ修定裁可シテ天下ニ頒布スヘシ、云々。」

光緒二十九年即チ千九百三年清朝ハ上海ニ在テ日英諸國ト通商航海條約ノ補修ヲ行ヒタル際「自國ノ司法制度ヲ改善シテ日本及ヒ歐米諸文明國ノ制度ニ適合セシメンコトヲ熱望シツツアル旨」ヲ聲明スルト同時ニ、之ニ對シテ相當ノ援助ヲ求メタルヲ以テ、是等列國ニ於テハ好シテ之ニ應スヘキ旨ヲ承

諾スルト同時ニ清國ノ法制及ヒ司法上ノ設備カ其満足スヘキ程度ニ到達シタルトキハ其望ニ從ヒ自ラ治外法權ヲ撤廢スルニ躊躇セサルヘキ旨ヲ言明シ、此爲メニ條約上特別ノ一條ヲ設ケタル成行アリテ、今ヤ清國ハ此條約上ノ見地ヨリイフモ自己固有ノ文化ノ蓄積タル其傳統的特色ヲ有スル法制ト雖モ眞ニ其良制美教ノ維持上捨ツルコトヲ得サル特種ノ規定ヲ除キ其他ハ全然其系統ヲ異ニセル日本及ヒ歐米諸國ノ制度ニ適合スルモノヲ以テ之ニ替ヘサルヲ得サル約諾ニ支配セラレ、自ラ之ニ向テ努力セサルヲ得サルノ勢ニ制セラルルニ至リタルモノトス。

勢茲ニ至ルヤ當時清室ノ實權ヲ把握セル西太后及ヒ其身邊ノ重臣モ遂ニ之ニ抗シ難ク、國家立憲ノ大本ヨリ之ヲ改メ歐米及ヒ日本ニ倣ヒ、代議政治ヲ行フヘキ決心ヲ爲シ、光緒三十一年ノ載澤、載鴻、李盛鐸、尙其亨及ヒ端方ノ五人ヲ以テ考察立憲大臣ニ任シ、海外ニ派シテ日本其他ノ歐米諸國ノ立憲政治ノ實情ヲ調査セシムルコトトナリ、斯クテ此一行ハ翌光緒三十二年相前後シテ歸國シ、何レモ國家ノ進運ヲ助長シ革命ノ危機ヲ防クハ代議政治ノ實施ヲ措キテ他ニ途ナキヲ立言シタル結果、當時既ニ特設セラレ居リタル考察政治館ハ更ニ其翌光緒三十三年七月其組織ヲ擴充シテ憲政編查館ニ改造セラレ、軍機處大臣ヲ以テ之ニ主班タラシムルト同時ニ内閣ニ直屬セシメテ憲法實施ノ準備ニ當ラ

既ニ憲政編查館ヲ設ケテ國家基本ノ大法ヲ改訂スヘキヲ一決シタル以上ハ其他ノ行政司法及ヒ民事刑事ノ全門ニ亘リテ新法ノ制定ニ當ラサルヘカラサルモ、之カ爲メニハ同館ノ外ニ別ニ一ノ特別機關ヲ組織スルノ必要アリテ、茲ニ右憲政編查館ニ次キテ同年十月別ニ修訂法律館ナルモノヲ特設スルコトトナリ、其主宰者トシテハ既ニ光緒二十八年伍廷芳ト共ニ修訂法律大臣ニ任セラレタル清末ノ碩學沈家本及ヒ新ニ同一ノ官職ニ任セラレタル俞廉三ノ二人ヲ以テ柱石トシ、其館内ニ第一(民事)科ト第二(刑事)科トヲ設ケ又別ニ譯書處、編案處及ヒ庶務處等ノ部局ヲ設ケ、修訂法律館辦事章程第十四條ヲ定メテ夫々人材ヲ登用シテ其局ニ當ラシメタリ。

右ノ如ク新法制定ニ必要ナル機關ノ設置ヲ見タルカ故ニ、茲ニ其事業計畫年度表(議院未開以前逐年籌備事宜)ヲ定メ、先ツ光緒三十四年ヲ以テ第一年度トシ、同四十二年度ニ至ル迄ノ九ケ年間ニ遂行スヘキ事業トシテ各般ノ法律制度ヲ各年度ニ割當テ、逐次其完成ヲ期セントシタルカ、修改新刑律ハ右第一年度ノ事業トシテ組入レラレタルヲ見ル。

第二目 大清現行刑律草案ノ脱稿

前記ノ如ク新刑律ノ修改ハ修訂法律館ノ開館第一年度ノ事業トシテ割當テラレタルトコロナリシモ、當時怒濤澎湃ノ勢ヲ以テ支那ノ内外ヲ壓迫シツツアリタル秘政改革ノ氣運ハ政府カ唯單ニ是等ノ事業ニ着手シタリトイフ態度ヲ宣明シタルノミヲ以テ満足セサリシヲ見タル沈家本ハ其當時既ニ約百七十年ヲ經過セル乾隆五年ノ制定ニ係ハル大清律例カ今ヤ其用ヲ爲スニ適セサル點甚タ多キヲ熟知セルト同時ニ之ヲ根本的ニ修改スル事業ノ甚タ困難ニシテ到底短日月ヲ以テ之ヲ完成スルコト能ハサルヘキヲ熟知セシカ故ニ、茲ニ應急ノ便法トシテ同律例中新時世ニ適セサル部分ヲ刪除改修シテ一時暫行ノモノトスルヲ以テ最モ時宜ニ適セルモノトシタリ、然リ而シテ此大清律例ノ刪除改修ノ業タルヤ同人ハ既ニ數年前刑部左侍郎ノ任ニ在リシ時ヨリ之ニ着手シ、一部分ハ既ニ完了シタルモノアリシカ故ニ、新ニ修訂法律館ヲ主宰スルコトナレルヤ否ヤ翌光緒三十四年一月二十九日其既ニ改修ヲ經タル部分ヲ呈上シ、並ニ其全部改修ニ關スル方針及ヒ要點等ヲ上奏シテ裁可ヲ求メタルカ、此上奏文及ヒ之ニ對スル其後ノ形勢ハ當時ノ支那刑法變革ノ一端ヲ窺フニ足ルモノアルカ故ニ冗長ナリト雖モ之ヲ左ニ紹介セン、沈家本ノ上奏文左ノ如シ。

竊カニ惟フニ新政ノ要ハ因ト革トノ兩事ニ外ナラス、此兩者ハ互ニ相衡リテ平ヲ持スヘキ

モ草ハ難クシテ因ハ易シ、而シテ因ハ慣習ニシテ慣習ハ遺傳ニ本ツクモノナレハ之ヲ革メテ損益セントセハ宜シク順序ヲ定メテ之ニ依ルヲ要シ、一朝一夕ノ間ニ其目的ヲ達スルコト能ハサルナリ、方今世界ノ交通開ケテ各國互ニ同位比伍セリ、而シテ其間權力ニ多少ノ差等アルトキハ強弱之ニ因リテ直チニ別ルルハ職トシテ之カ爲メナリ、サレハ各國ノ政令、學術、兵制、商務等殆ント日ニ同一ノ趨勢ニ向フ、是ヲ以テ臣、沈家本先年（今茲ニ進呈セル大清現行刑律トハ別個ノ）刑律ヲ進呈シタルカ、主トシテ列國刑法ノ主義トセルトコロヲ模範トシタルモ而モ其間種々樽俎折衝ヲ加ヘタルモノトス、然ルトコロ刑罰ハ教育ト共ニ消長スヘキモノニシテ、若シ教育ニシテ未タ普及セザランカ俄ニ輕刑主義ニ從フトキハ却テ教刑補弼ノ效ヲ收メ難シ、殊ニ審判官ノ材能、警察規定、監獄制度等皆刑法ト繋連セサルナク、是等ノ要素ハ漸次培養シ設立シ得ヘシト雖モ一舉ニシテ悉ク完善ノ域ニ達スルハ難シ、固ヨリ法律進化ノ理ヨリ之ヲ推サハ我邦ニ於テモ一ノ進歩シタル刑律ハ將來必スヤ之ヲ施行セサルヘカラサルモ、其實施ノ期日ハ決シテ急クヘキニ非サルナリ、之ヲ日本ニ付テ考フルモ新刑法實施ノ以前ニ在リテハ一時我國ノ刑律ヲ折衷シタル新律綱領ナル

モノヲ頒行シ、以テ其幕府時代ニ於ケル武斷嚴酷ナル刑風ヲ一洗シタル上ニテ新ニ歐洲ノ制度ヲ採酌シタル改定刑法二百余條ヲ頒行シ以テ新律綱領ノ不備ナルトコロヲ補ヒ漸次新舊ノ間ヲ調整シテ其成效顯著ナルヲ致シタリ、臣等既ニ修訂法律館ノ開設並ニ其執務規則ニ關スル呈文内ニ於テ陳ヘタルカ如ク同館内ニハ編案處ヲ設ケテ我邦舊來ノ律例ヲ刪訂スルト同時ニ各種ノ法則ヲ編纂シ又更ニ總纂、纂修及ヒ協修等ノ職ヲ設ケテ各其司職トスルトコロニ當ラシムルコトトシ、既ニ裁可ヲ經テ案ニ在ルトコロナルカ、伏シテ按スルニ乾隆年間ノ規則ニ依レハ、條例ハ五年ニ一度小修ヲ行ヒ更ニ次ノ五年ニ一度大修ヲ行ヒ以テ條例ヲ（一）分修、（二）改修、（三）續纂又ハ（四）刪除ノ四項ノ要領ニ依リ年次ニ從テ之カ整理編訂ヲ行フヘキモノトセラレタルモ、同治九年（一八七〇）以後ニ降リテハ是等ノ制法ニ依ル整理編訂ノ行ハレタルコトナシ、斯クテ光緒二十九年ニ至リ臣カ刑部左侍郎ノ任ニ在リシ際ニ是等舊來ノ條例ノ刪訂ヲ奏請シ、嗣テ三十一年ニ至リ先ツ刪除ノ一事業ノミニテモ其功ヲ上ケントシ舊條例中ヨリ共計三百四十五條ヲ刪除スルコトト定メ、之ニ付キ數回ニ分チテ明細書ヲ呈上シタル成行ナリシカ、其他ノ分修、改修及ヒ續纂ノ三事業ニ付テハ未タ起

稿スルニ及ハスシテ官制ノ改革ニ遇ヒ、從前其任ニ在リタル提調又ハ總纂等ノ各員ハ或ハ昇進シ或ハ地方官ニ任セラレ若クハ(京ニ在リテモ)他ノ部局ニ補任セラレタル者アル等ノ事情ニ因リ、一時此事業ハ中止ノ外ナキニ至レリ、而シテ現在ノ情形ニ按スレハ新ニ刑律ヲ制定シテ之カ頒布ヲ行ハンカ爲メニハ尙ホ多クノ時日ヲ要スルモノアルカ故ニ、其間一時舊律(康熙年間制定ノ大清律例)ヲ刪訂シテ之ヲ暫行スルノ外ナク、コレ最モ至急ヲ要スルコトニ屬ス、依テ臣等共同商酌シ引續キ舊律刪訂ノ業ニ當リテ從前ノ事業(一部完了ノコト前述ノ如シ)ヲ完結センコトヲ期スヘク、コレカ爲メニ其刪訂ノ方針ニ關スル四原則ヲ奏上シテ豫メ裁定ヲ請ハントスルモノナリ。

其一ハ刑律中ノ總目(編名)ノ刪除ニシテ舊律ハ明律ノ舊ニ倣ヒ吏、戶、禮、兵、刑及ヒ工ノ六部ノ職名ニ分チ、名例以外ハ六律ヲ以テ編制セルモノナルカ、コレ蓋シ元代ノ聖政典章及ヒ經世大典等ノ諸書ノ定ムルトコロヲ沿用シタルモノナルモ、本來六部ノ名ヲ以テ律名トスルノ不可ナルノミナラス、現今ノ官制ニ於テハ既ニ各部ノ名稱ヲ改メ、又ハ彼是合併分離シ、從テ舊式ニ從ヒ難キモノアルカ故ニ、是等吏、戶、禮、兵、刑、工等ノ律目ハ

一切之ヲ刪除シテ以テ其何レノ部ニ屬スルモノタルヤノ着眼點ヲ離レテ全律ノ劃一ヲ期スヘキコト。

其二ハ刑名ノ改正ニシテ舊律ニ於テハ笞、杖、徒、流及ヒ死ノ五種アルニ過キスト雖モ、條例ニ於テハ流ノ外ニ外遣及ヒ充軍ノ二種ヲ增加シ、光緒二十九年以來刑部ノ奏請ニ依リ充軍ノ刑目ハ之ヲ改メテ安置トセリ、而シテ同年刑部又山西巡撫趙爾巽ノ議ヲ用ヒ軍、流、徒ヲ改メテ工作ト爲シ、引續キ三十一年ニハ臣家本ハ伍廷芳ト共ニ兩江總督劉坤一等ノ奏議ニ贊同シテ笞杖ヲ廢シテ罰金ニ改メンコトヲ請ヒテ其議容レラレ、又三十二年ニ至リ按察使ハ犯人ノ情狀ノ憐察スヘキモノアルトキハ死刑ヲ免シテ流刑ニ處スルヲ得ル旨ヲ定メラレ、三十三年ニハ臣等聖旨ヲ奉シテ滿漢人ノ區別ヲ除キテ何レモ同一刑制ニ服スヘキヲ定メ、同年更ニ死刑以下ノ罪ニ該ル犯人ノ刑獄モ亦按察使ノ管轄ニ歸スルヲ免スコトトシタル等常ニ變通ノ法ヲ講シテ漸次寬大簡便ノ處置ニ出ツルコトトナリタリ、之ヲ要スルニ今ヤ刑名ハ死刑、安置、工作、及ヒ罰金ノ四アルノミ、而シテ是等歷年ノ變革ハ其案ヲ定メタル際其郡度之ニ依リテ律例ノ規定ヲ改メタルニ非サリシカ故ニ、此際特ニ詳密ナ

ル考査ヲ加ヘテ是等ノ變革セラレタルモノヲ援引シテ律例ヲ改修スルノ必要アルヘク、而
 モ之ニ關シテ一タヒ疏忽センカ謬錯之ニ因リテ行ハレ、遂ニ罪實ト刑名相符セサルニ至ル
 ヘケレハ、茲ニ從來律例ニ定メタル各條項ノ刑名ハ總テ是等ノ新制ニ從フコトトシ、以テ
 紛歧ヲ免カルヘキコト。

其二ハ從來ノ成例ニシテ之ヲ律例ノ文中ニ採納スルニ足ルモノハ此際之ヲ採納スヘキコト
 ニシテ、是種ノ成例ニシテ前記ノ如ク同治九年以後今日ニ至ル迄四十年間ニ亘リテ蓄積セ
 ルモノ百四條ニ及フモ既ニ年ヲ閱スルコト久シキカ故ニ、是等ノ成例中ニモ亦今日ノ時世
 ニ適合セサルモノナキニ非サレハ茲ニ之カ取捨ヲ分別シ、其(同治九年以前ノ)舊例中ニ存
 セサルモノ、例ヘハ電柱ノ毀壞、銀貨ノ私鑄ノ罰ノ如キハ之ヲ採テ新例ノ内ニ加フヘク、
 又申明亭(前節第五項參照)ニ關スル舊例又ハ罪名ハ既ニ存セサルカ故ニ新ニ之ヲ擬スル
 ノ必要ナク其他從前ノ罪名ニシテ其後之ヲ削除シタルモノハ一切編輯ノ必要ナキコト。
 其四ハ例文ヲ簡易ニスヘキコトニシテ、律ハ一定不易ノ制ヲ垂ルルモノニシテ動カスヘカ
 ラサルモノナリト雖モ、例ハ一時ノ權宜ニ因リテ加減増損スヘキモノナレハ歷代ノ實例ニ

徴スルモ律ノ外ニ、唐ニ在リテハ令及ヒ格式アリ、宋ニ在リテハ編勅アリ、明ニ在リテハ
 大誥、會典、問刑條例等アリテ何レモ律後ニ之ヲ附入セリ、抑モ律ト例ハ當初バ合シテ一
 タリシモ例ハ歷年増輯セラレ、今ニ及ンテハ殆ント二千條ニ及ヒ、是等ノ内ニハ既ニ失效
 ノモノ多ク、又彼是研究詮索スルモ關係ノ明カニシ難キモノ少カラスシテ、從前ヨリ此種
 ノモノハ迭次削除スヘキモノトセラレタルモ其實削除セラレタルハ十中ノ二三ニ過キサリ
 シカ故ニ、今ニ至リテ之ヲ檢スレハ、現今ノ社會情勢ニ適合セサルモノ、新例(同治九年
 以後ノモノ)ノ設定ニ依リテ舊例ノ全然無用ニ歸セルモノ、從前ハ其效用アリシモ今ヤ何
 等引用ノ價值ナキモノ、又ハ彼是大同ナルモ小異アルモノ等殆ト枚舉ニ遑アラサルナリ、
 サレハ是等ノ類ハ一切之ヲ酌加刪併シテ例文ノ全體ヲ簡易ニスヘキコト。
 以上ノ四者ハ大體ニ就テ之ヲ言ヘルモノニシテ其餘尙ホ行フヘキ改修ノ點ニ付テハ臨時酌
 量辦理スヘク、若シ裁准ヲ得ハ其全篇ヲ名クテ現行刑律トスヘク、該總纂等ノ酌議ニ係ハ
 ル分修、修改續纂又ハ刪除等四項ノ事業ノ進行ニ照シテ一々理由説明書ヲ作り、部門ヲ別
 テ之ヲ編録シ各期限ヲ定メテ其完成ヲ期スヘク、完成ノ上ハ其全部ヲ目錄ト共ニ進呈シテ

欽定ヲ仰クヘク、斯クテ新刑律頒布ノ日ニ至ル迄ハ一時ノ過渡的便法トシテ之ヲ實施シ、其日ヲ俟テ此現行刑律ヲ廢止セハ、コレ之ヲ持スルニ恒ヲ以テシ、之ヲ行フニ漸ヲ以テスル所以ニシテ、他日新刑律ノ施行ニ至リテモ彼是ノ間ニ何等扞格スルノ虞アルコトナシ、茲ニ現行刑律ノ編訂ニ關スル緣由ヲ述ヘテ聖鑒ヲ乞ハントスルモノナリ。云々

斯クテ沈家本等ハ右ノ方針ニ從テ現行刑律ノ刪定ニ當リ、一年七ヶ月ヲ費シテ宣統元年八月ニ至リテ其業ヲ終リ、律文共計四百十四條及ヒ例文共計千六十六條ヲ得タリシカ故ニ、直チニ軍機大臣ヲ經テ之ヲ呈上シタルカ其結果更ニ憲政編查館ニ諮議シテ之カ核定ヲ經ヘキコトトナリタリ。

第三目 憲政編查館ノ修正意見

前述ノ如キ經過ヲ以テ修訂法律館ノ起草ニ係ハル大清現行刑律カ宣統元年八月憲政編查館ノ諮議ニ附セラルルヤ、同館ニ於テハ八月二十九日ヨリ之カ査定ニ着手シ、十二月二十三日ニ至リテ之ヲ終リタルカ其結果八項ニ亘レル修正意見ヲ提出シテ之ヲ修正シタルカ所謂其修正意見ナルモノノ概要左ノ如シ。

(一) 原案ニ於テ罰金ヲ意味スルニ罰刑ノ名ヲ以テシタルハ名實相協ハサルモノアリトス、蓋シ

罰金ノ刑ハ既ニ漢律ニ始マリ六朝ニ降ルモ尙ホ之ニ倣ヒタルモノニシテ其由來最モ古キモノトス、然ルニ今罰刑ナル文字ヲ用ヒシカ文義相類スル二字ノ重用ニ依リテ却テ疑義ヲ生スヘキカ故ニ金錢罰タル意義ヲ表明センカ爲メニ之ヲ罰金ニ改ムヘキコト、殊ニ罰金刑ハ輕罪ニ限リテ之ヲ科シ犯人ノ廉耻心ヲ保全シ其羞惡心ヲ啓發セシムヘキモノナルモ、十惡其他ノ重大犯姦ニ於テハ必スヤ實罰ヲ加フルニ非サレハ懲戒ノ目的ヲ達シテ風紀ヲ嚴ニスルコト能ハサルニ注意スヘキコト。

(二) 人身賣買ニ關スル事項ハ既ニ久シク世界諸國ノ指摘スルトコロニシテ、立憲政體下ニ於ケル人民ノ權利保護ノ趣旨ニ反スルモノナルモ、此點ニ關スル我國ノ法制トシテハ未タ案ノ確定シタルモノナク目下調査中ナルカ故ニ、本律内ノ人身賣買、奴僕、奴婢ニ關スル諸條ハ勢ヒ之ト關連スルトコロアルヲ以テ暫ク本律中ヨリ之ヲ冊除スヘキコト。

(三) 舊律ハ政府ノ六部ノ官制上ノ分類ヲ基トシ、其各部ニ屬スル律例ヲ輯集シタルモノナルモ、既ニ體例ニ於テ符セサルトコロアルノミナラス今ヤ庶政刷新セラレ昔日ト其趣ヲ異ニスルモノアルカ故ニ、是等ノ行政各部ノ則例中ニハ之ヲ刑律中ヨリ冊除スヘキモノアルノミナ

ラス、其編制上(吏律、戶律、兵律等ノ)總目ヲ刪リ、概シテ「現行刑律」ト名附ケタル以上ハ刑名ヲ有セル律文ノミヲ摘錄スヘキコトヲ以テ根本義トスヘキコト、固ヨリ原案ニ於テモ既ニ此主義ニ從ヒ、從前ノ律例中無關係ノモノハ之ヲ刪除シタルモ未タ盡ササルモノアルカ故ニ、此際更ニ是等ノモノヲ全然驅逐シ去ルヘキコト。

(四) 國家ノ榮典其他ノ典章制度ハ隨時變通スヘキモノナルモ、舊律中ニハ明律ヲ其儘ニ襲用セルモノアリトス、サレハ女官ヲ公侯ニ封スルヲ許ササルノ規定、朝見ヲ阻留スル罪等其他多ク現今ノ制度ニ合ハサルモノハ之ヲ刪除スヘキコト。

(五) 從來死刑言渡ノ判決ニ於テハ事案ノ情狀ニ鑑ミ一時死刑ノ執行ヲ差止メントスルトキハ判決文上監候ノ二字ヲ特記スルノ例アリタリト雖モ、將來此制度ヲ廢シ、既ニ判決確定シタル以上ハ直チニ之カ執行手續ヲ取り、全體一律ノ取扱ヲ爲スヘキコト。

(六) 流徒等ノ刑ノ執行ニ付テハ從前ハ遠隔ノ地ニ遷徙シテ之ヲ行フノ制ナリシモ、今之ヲ工作ノ刑ニ改メ、當該地方ノ監獄ニ於テ之ヲ執行スヘキモノトスルハ可ナルモ、唯原案ニ依レハ尙ホ從來ノ辦法ニ從ヒ、晝間ノ工作ト夜間ノ工作トヲ區別シテ以テ輕重ノ差ヲ設ケタル

ハ其當ヲ得サルカ故ニ、此晝夜工作ノ差別待遇ヲ廢スヘキコト。

(七) 即行正法即チ現場ニ在テ即時ニ死刑ヲ執行スルノ例ハ舊例ニ於テハ強盜カ流刑ニ處セラルル途中ニ在リテ脱逃シタル場合ノ如キ一時ノ權宜處分トシテ之ヲ認メタルモノニシテ、法定ノ常刑トスヘキニ非サルニ拘ラス、原案ニ於テハ一家三人ヲ殺スノ罪ニ付テハ其事情ノ如何ヲ體察セスシテ常ニ此即行正法ノ規定ヲ適用スヘキモノトシタルハ不當ナルコト。

(八) 鐵道及ヒ之ニ附屬スル要件ヲ破壞シタル罪ニ付テハ從來治罪ノ專條ナカリシヲ以テ、先般郵傳部ノ奏請アリテ既ニ允准ヲ得タルトコロナレハ、此際之ニ關スル刑律上ノ規定ヲ設クヘキコト。

憲政編查館カ主トシテ是等ノ修正意見ニ基キテ補充、修正又ハ刪除シタル條文ハ共計二百六十一條ニシテ同館ハ一々之ニ關スル理由書ヲ作り宣統元年十二月二十三日之ヲ具奏シタリ。

第四目 民法、刑法分立ノ發端

以上上世、中世及ヒ近世ノ支那ニ於ケル法制ノ概念ヲ説キ來リタルトコロニ依リテ之ヲ見ルニ、清朝ノ乾隆年間大清律例ノ制定ニ至ル迄ハ勿論、其後光緒三十三年修訂法律館ノ創設ヲ見タル以前ニ於

テハ民刑ノ差別觀念ハ支那ノ法制ノ表面上又ハ立法ノ局ニ當リタル者ノ見解上未タ認識セラレザリシトコロナリトス、人或ハ既ニ前漢ノ九章律以來戸律ナル律名アリテ、コレ即チ民律又ハ民法ヲ意味スルモノトセルモ其規定ノ實質カ民法ニ非サルコトハ極メテ明カニシテ、降テ唐、宋、元ニ至ルモ大差ナク、而シテ明ニ至リテ律ノ總目ヲ簡ニシ總則タル名例律ノ外ニ吏律、戶律、禮律、兵律、刑律及ヒ工律ノ六篇ヲ設ケ、清ニ降リテモ亦此編制ニ倣ヒタルモ是等ノ律ニ所謂戸律ハ既ニ屢々述ヘタルカ如ク、其規定ノ内容的性質ヨリ觀察シタル區別ニ非スシテ中央政府ニ屬スル各部即チ吏部、戶部、禮部、兵部、刑部及ヒ工部等ノ管掌セル各事項ニ關スルモノ、若クハ是等各部ニ屬スル吏員ノ職務ニ關スルモノヲ目標トシテ規定ヲ設ケタルト同時ニ是等ノ規定ニ違反セル場合ノ罪ト刑トヲ定メタルモノニシテ、其間何等民刑二門ノ差別觀ヲ加味セルモノニ非サルナリ、蓋シ民刑二門ノ間ニ在リテハ何等先天的差別ナク一ノ違法ノ行爲ナリト雖モ、時ニ刑罰制裁ヲ以テ臨ムコトアリ、然ラサルコトアリ、又嚴刑ヲ以テ臨ムコトアリ、輕刑ヲ以テ臨ムコトアリトス、コレ其行爲ノ性質上ノ差異ニ非スシテ程度上若クハ社會ノ通念上ノ差異ニ過キサルナリ、從テ其差異ハ時代思潮ト世態ノ變遷ニ依リテ生スルノミ、故ニ支那ニ在リテハ刑ハ世々ニ重クシテ世々ニ輕シトイヘルナリ、而シテ近代ニ至リテ之ヲ以テ最モ重要ナル法律根本

上ノ區別ナリトスル所以ノモノハ主トシテ訴訟手續上ノ問題ナリトス、即チ等シク法律ノ違反者ナリト雖モ刑事犯人ナルニ於テハ刑事訴訟法上ノ手續ヲ以テ之ニ臨ミ、民事責任者ナルニ於テハ民事訴訟法上ノ手續ヲ以テ之ニ臨マサルヘカラサルナリ、然リ而シテ刑律又ハ刑事ニ對シ民律又ハ民事ナル此觀念カ支那ニ生シタルハ最近光緒年間ノ末葉ニシテ、修訂法律館ノ設立ヲ見ルニ至ルヤ刑事科ニ對シテ民事科ヲ設ケ、而シテ前記ノ議院未開以前、逐年籌備事宜ニ於テ刑律ト對照シテ民律ナル用語ヲ使用シ、右刑事科カ新刑律ノ編訂ニ熱中セルト同時ニ民事科ニ在リテハ新民律ノ編訂ニ努力スルニ至リタルニ始マル、而シテ此觀念ヲ最モ明確ニ表示シタルモノハ、前記憲政編查館ノ宣統元年十二月二十三日附ノ現行刑律草案改修ニ關スル上奏文ノ附屬書面ニシテ、之ニ依レハ舊律戸律篇下ノ(イ)戶役ノ章内ニ於ケル承繼(相續)、分産、(ロ)婚姻、(ハ)田宅(不動産)及ヒ(ニ)錢債(債權債務)等ノ各章ニ於ケル規定中民事關係ニ屬スルモノハ將來刑ヲ科スヘキニ非サルコトヲ上奏シ、茲ニ當時ノ法律觀念上民事關係トシテ刑事關係ヨリ區別スヘキモノト認メタルモノノ總目ヲ示セルモノトス。

第五目 兩館ノ共同審査

憲政編查館カ右ノ如ク宣統元年十二月二十三日附ノ上奏ヲ爲スヤ、清室ニ於テハ同館及ヒ修訂法律

館ニ對シ前記ノ大清刑律草案ヲ共同審査スヘキヲ命シタルヲ以テ、爾來兩館ハ會同審議シ翌宣統二年四月ニ至リテ確定案ヲ得タリ、コレ大清現行刑律通計二百八十九條ニシテ、大清律ヨリ少キコト四十七條、又本律原案ヨリ少キコト二十五條トス、而シテ之ニ條例ノ附屬セルモノ共計千三百二十七條ナリトス、而シテ本律ニ於テ原案ヨリ二十七條ノ少キヲ致シタルハ、憲政編查館ノ意見ニ基クモノ其他時世ニ適セサルモノヲ削除シタルニ因ルモノナルモ、同律中ニ於ケル普通ノ刑事犯ト認ムヘキモノ即チ賊盜二十七條、人命二十條、圖毆二十一條、罵詈八條、訴訟十條、受贓十條、詐偽十一條、姦犯九條及ヒ雜犯十條共計百二十六條中ヨリ削除シタルハ僅カニ八條ニ過キスシテ殆ト異同ナカリシモノトイフヘキナリ。

右ノ會同審議ノ際ニ於テモ論議セラレタルハ民刑分離ノ問題ニシテ、審議ノ結果前記ノ如ク舊來ヨリ戸役(承繼及ヒ分産)ノ婚姻、田宅及ヒ錢債ノ各章ニ於テ規定セラレタルモノノ内民事關係ニ屬スルモノハ之ヲ削除スルコトトシタリト雖モ、而モ例ヘハ婚姻ノ章下ニ於ケル槍奪(婦女ノ略奪)姦占又ハ古來ノ禮教ヲ亂スモノトセル違律嫁娶、田宅ノ章下ニ於ケル盜賣又ハ強占若クハ錢債ノ章下ニ於ケル受寄ノ財物ノ費消等ハ悉ク刑事ノ範圍ニ屬スヘキモノナルカ故ニ總テ本律ニ照シテ治罪スヘク、是

等ノモノヲモ民事案件ナリトシテ輕卒放縱ノ取扱ヲ爲スヘキニ非サルコトハ、茲ニ此兩館ノ名ニ於テ合同聲明スルモノナリトノ表示ヲ附加シタルモノトス。

斯ノ如クニシテ當初沈家本ノ私案タリシ大清現行刑律ハ、漸次幾多ノ楷梯的審査諮詢ノ後、宣統二年四月七日軍機大臣ヲ經テ上奏裁可セラレ、大清帝國ノ末葉ニ於ケル舊式ノ立法事業ヲ代表スヘキ記念品ト爲リタルモノニシテ、右ノ裁可ト同時ニ印刷ニ付シテ全國ニ頒布セラレ一律ニ遵守セラルヘキ國法ト爲リシナリ。

今本律ニ付テ注意スヘキモノ數點ヲ略述セン、

- (一) 右ノ如ク當時ノ立法者ハ極メテ明白ニ民刑二門ノ差別ヲ認メタリト雖モ、各個ノ行爲ニ付キ果シテ何レノモノハ之ヲ刑事トシ、又何レノモノハ之ヲ民事トシテ取扱フヘキヤノ見解ニ至リテハ支那ノ民情、國風及ヒ沿革上容易ニ舊制ヲ一掃スルコト難カリシハ當然ナリトイフヘク、而シテコレ亦徒ニ新奇ヲ好ンテ一躍脫線スヘキニ非サルハ言ヲ待タサルトコロニシテ、例ヘハ負債不還ノ一條ノ如キ謹テ周、漢、唐、宋、元、明ノ古制ヲ維持シ之ヲ雜律又ハ戶律錢債ノ章ニ於テ罪ノ一種トシテ認メ、唯唐律以下ノモノカ徒刑又ハ杖刑ニ處シ

タルニ反シ、本律ニ於テハ罰金刑ニ止メタルハ時世ノ進運ヲ反映セルモノトイフヘキナリ
 (二) 右ノ如ク修訂法律館ヲ代表セル沈家本ノ上奏文中ニ言ヘル修正意見アリテ而シテ憲政編查館モ亦次テ修正意見ヲ表示シタルモ此兩者ノ間ニ在リテハ互ニ衝突セルモノナク、後者ハ唯前者ノ修正部分ノ不足セル點ヲ補充シタルニ止マルカ故ニ、結局此兩者ノ修正意見ハ全部採納セラレタルモノニシテ、之ヲ以テ其修正ノ要點ヲ知ルヲ得ヘキカ故ニ茲ニ之ヲ再説スルノ必要ナシトス。

(三) 本律ノ一特色ハ黥刺ノ刑ヲ廢止シタルニ在リトス、蓋シ前漢ノ文帝肉刑ヲ廢シタリト言ヒツツ其實ハ爾來幾度カ典廢變遷シ、而モ黥刑ニ至リテハ殆ト完全ニ廢止セラレタルヲ見タルコトナカリシモノトイフヲ得ン、然ルニ本律ニ於テハ斷然之ヲ廢止シ、爾來此刑ハ支那ノ法制上全然其跡ヲ絶ツニ至リタルモノトス、コレ第十三節第三項ニ於テ一言シタルカ如ク、明律ニ在リテハ起除刺字ノ刑アリテ、清朝ニ降リテモ最後ノ乾隆五年ノ大清律例ニ至ル迄刑律中賊盜ノ章下ニ同様ノ規定アリテ黥刑ヲ費用シ、從テ一度此刑ニ處セラレタル者カ其後故意ニ之ヲ除滅シタルトキハ別罪ヲ構成スルモノトシタルニ拘ラス本律賊盜ノ章ニ

於テハ之ヲ刪除シ既ニ刑目トシテ黥刑ヲ廢止シタルコト前記修訂法律館ノ修正意見ニ徴スルモ明カニシテ、從テ一度此刑ニ處セラレタル者カ更ニ之ヲ除滅セル場合ヲ想像シタル律文ヲ存置スルノ要ナキニ至リシヤ言ヲ待タサルトコロナリトス。

(四) 尙ホ此際茲ニ一言スヘキハ拷問制度ニシテ、コレ本來刑法ノ實體法的規定ニ非スシテ刑事訴訟法上ノ範圍ニ屬スヘキモ、從來ヨリ刑律中ノ斷獄篇中ニ規定セラレ來リ本律ニ於テモ之ニ從ヒタルモノトス。

古來拷問ノ制度アリテ殘忍ナル方法ヲ用ヒタルハ言ヲ待タサルトコロニシテ、漢代ニ至ル迄ハ其方法最モ極端ニシテ、之ヲ拷掠又ハ拷訊ト稱シタルカ、唐代ニ於テハ之ヲ拷問又ハ拷掠トイヒ一定ノ制限ヲ設ケ、八議ノ列ニ在ル者又ハ老幼ニ對シテ之ヲ行フコトヲ得ス、三度ヲ過クルコトヲ得ス、杖二百ヲ過クルコトヲ得ス、所犯、杖ニ該ルトキハ其罪ニ科スヘキ杖數ヲ過クルコトヲ得ス、其數ニ滿ツルモ而モ尙且自白セサルトキハ之ヲ保放スヘシトセル規定アリテ漸ク法制ノ體ヲ備フルニ至リタルモノトス、宋代ニ在リテハ之ヲ拷訊トイヒ大體ニ於テ唐律ノ趣旨ニ倣ヒタルモノトス、而シテ沈家本ノ沈寄繆遺書、刑制考ニ依

レハ、唐宋時代ニ於ケル拷問ハ他ノ證據ニ依リテ罪狀ノ明白ナルニ係ラス犯人カ自白セザル場合ニ於テ其自白ヲ求メンカ爲メニ之ヲ用ユヘキモノトセシニ係ラス、以後此制亂レテ審理ノ始、未タ罪狀ノ明白ナラサルトキヨリ直チニ之ヲ用ユルニ至リタルハ唐宋舊法ノ精神ヲ失スルモノトセリ、明ニ降リテモ之ヲ拷訊トイヒ原則トシテ之ヲ用ヒ、清律ニ於テモ亦其儘之ヲ襲套シタリ、然リ而シテ今清朝ノ末葉ニ降リ世界ノ大勢ニ順應シテ大ニ新法ノ新色ヲ發揮セントスルニ當リ、此拷問制度ノ存廢如何ハ甚シク論議セラレタルトコロナリシカ、拷問制度廢止ノ議ヲ首唱シタルハ光緒ノ末葉ニ於ケル兩江總督劉坤一及ヒ湖廣總督張之洞ニシテ、其奏議アルヤ修訂法律館ノ諮議ニ附セラレタリ、當時沈家本モ亦固ヨリ此議ニ贊シタリシカ、御史劉彭年ハ大ニ反對論ヲ力説シ斯ノ如キハ理論ニ走リテ實際ヲ顧ミサル空論ナリトシタルヲ以テ、修訂法律館ニ在リテハ更ニ反覆其然ラサルヲ力説セシモ遂ニ能ク之ヲ一決スルニ足ラサリシカ故ニ、本律ニ於テモ乾隆律ノ律文ヲ其儘ニ襲用シ老幼廢疾ヲ除キ拷訊スルヲ妨ケサルモノトシタルナリ。

第六項 新刑律

前項ニ於テ述ヘタルカ如ク修訂法律大臣沈家本ハ、其光緒三十四年一月二十九日附ノ上奏文ニ於テ過渡時代ノ一便法トシテ康熙年間ノ制定ニ係ハル大清律例ヲ刪訂シテ之ヲ施行スヘキモノトシタルモコレ固ヨリ一時的暫行ノモノニシテ別ニ世界ノ大勢ニ順應シ、日本及ヒ歐米諸文明國ノ制度ニ適合セシムルニ足ルヘキ新法制ヲ採用シテ、治外法權ノ撤廢ヲ圖ラントスルノ途ハ光緒二十九年上海ニ於テ日英諸國ト通商航海條約ノ補修ヲ爲シタル以來ノ成行上、亦忽諸ニ附スヘカラサル根本問題ナリシカ故ニ、光緒三十二年九月日本學界及ヒ司法界ヨリ岡田朝太郎及ヒ松岡義正ノ二氏ヲ聘シテ此業ニ當ラシメ、翌三十三年八月第一編總則十七章八十七條ヲ具奏シタルカ、同年十月修訂法律館ノ創設ヲ見ルヤ、岡田朝太郎氏ハ專ラ之ト協調シ同年内ニ第二編分則三十六章三百條(總則ヲ併セテ三百八十七條)ノ成ルヲ告ケタルヲ以テ、同館ハ引續キ之ヲ具奏シタルトコロ翌光緒三十四年ニ至リテ憲政編查館ニ諮議セラレタリ、然ルニ同館ニ於テハ同法案ノ重要性ト支那歷代ノ刑制ニ背馳セル點多キニ顧ミ容易ニ決定スヘカラサルモノアリシヲ以テ、更ニ其翌宣統元年ニ至リテ同館ヨリ之ヲ各省ノ地方長官ニ配

付シテ其意見ヲ諮詢スルコトナリタリ、當時恰モ爾ニ兩江總督劉坤一ト共ニ變法自強ノ連名奏議ヲ爲シタリシ湖廣總督張之洞ハ、入テ北京ニ在リテ軍機大臣ト爲リ兼テ學部ノ尙書タリシカ故ニ、此新刑律草案ノ批判ヲ爲スヲ得ヘキ最モ好適ノ地位ニ在リシトコロ、之ヲ一見スルヤ直チニ無夫ノ婦女ノ私通ヲ治罪スヘキ律文ナキノ故ヲ以テ禮教ニ有害ナルノ甚シキヲ駁シタルカ、各省ノ地方官吏中ニ在リテモ亦陸續同案ニ對スル排撃ノ奏文ヲ呈シ來リタルヲ以テ、遂ニ法部ト修訂法律館ハ會同シテ改修ノ局ニ當ルヘキコトトナリタリ、爾來此新刑律草案ヲ中間ニ置キテ新律派ト舊律派ト對抗論戰ノ時期ヲ生スルニ至リシナリ。

事情右ノ如クナリシヲ以テ、未タ法部ト修訂法律館トノ共同審議ヲ開カサル以前ニ於テ既ニ同館員中ニハ更ニ改案シテ之ヲ法部ニ廻付スル者スラアリテ事態ノ收拾困難ノ狀ヲ呈セリ、其内ニ在リテ最モ注目スヘキハ當時、尙書ノ重職ニ在リタル廷杰及ヒ清末鴻儒ノ一人タリシ勞乃宜ノ反對意見ニシテ此二人ハ舊律派ノ頭目トシテ認メラレシ者ナリ、廷杰ノ意見ニ依レハ、(一)皇室ニ對スル罪、(二)内亂ノ罪及ヒ(三)外患ノ罪ニ科スヘキ刑ヲ更ニ加重スヘキコト、(四)無夫ノ婦女ノ和姦ヲ處罰スヘキコト並ニ(五)尊親屬ニ對スル罪ニ付テ正當防衛ノ規定ヲ適用スヘカラサルコト等要スルニ支那傳來ノ

禮教觀念ト刑制トノ調和ニ關シテ此新刑律ニ慊ラスト爲シ、是等五點ニ付テハ更ニ別個ノ條件ヲ附加シテ以テ天下ニ頒布スヘシトノ主張ヲ爲シ、而モ其内心ニ於テハ斯ノ如キハ到底沈家本其他新律派ノ首肯シ得ルトコロニ非サルヘキヲ豫知シテ此態度ニ出テタルモノニシテ、之ニ依リテ事實上此新刑律ヲ曖昧模糊ノ間ニ葬リ去ラントシタルモノトス、而シテ正々堂々タル論陣ヲ敷キテ新律派ト抗爭シタル急先鋒ハ勞乃宜ニシテ、今其議論ノ焦點ト雙互ノ主張ノ要旨ヲ摘録セン(沈寄繹遺書文存)

(イ)「干名犯義」ノ罪ヲ規定セサルコト

舊律派ノ主張ニ依レハ干名犯義ノ規定ハ現ニ修訂法律館ニ於テ修訂ノ局ニ當リタル大清現行刑律ニ於テモ規定セルトコロニシテ、子孫カ祖父母又ハ父母ヲ告訴シ又ハ妻妾カ夫又ハ夫ノ祖父母若クハ父母ヲ告訴スルトキハ、其告訴スルトコロカ事實ナリトスルモ徒二年ニ處シ、若シ誣告ナルトキハ更ニ重刑ヲ以テ之ニ臨ムヘキヲ定メタルモノニシテ、大清律例及ヒ明律ニ於テモ共ニ同様ノ規定ヲ有シ、唐律ニ在リテハ絞刑ニ處スヘキヲ定メタルモノニシテ支那ノ禮教觀念上必スヤ之ヲ維持セサルヘカラストセルモノニシテ、之ニ對スル沈家本ノ主張ハ、コレ告訴ニ關スル事項ニシテ誣告罪ニ關スル判決録ヲ編纂スルニ當リテ適

宜ノ辦法ヲ定ムレハ足り、敢テ本律中ニ專條ヲ設クルノ必要ナシトシタルモノナリ。

(ロ)「犯罪存留養親」ノ罪ヲ規定セサルコト

舊律派ノ主張スルトコロニ依レハ、コレ犯人カ祖父母又ハ父母ヲ有シ、其既ニ老齡(七十以上)又ハ廢疾者ナルモ犯人以外ニ之ヲ養侍スヘキ者ナキトキハ、死刑ニ該ル者ト雖モ其情ヲ具奏シテ上裁ヲ仰キ、又徒流以下ノ刑ニ當ルトキハ情狀ニ依リテ杖刑ニ處シ、其他ノ罪ナルトキハ收贖ノ法ニ依ラシメ犯人ヲシテ其家ニ存留シテ親ヲ養ハシムルノ法ヲ定メタルモノニシテ、コレ亦現行刑律ニ存シ大清律例及ヒ大明律等ニ存セル由來長キ規定ニシテ孝養ヲ以テ人事百行ノ基本トセルモノナルカ故ニ永ク之ヲ維持セサルヘカラストセルモノナリ。

沈家本ノ之ニ對シテ主張スルトコロニ依レハ此規定ハ兇惡ノ徒ニ逆用セラレ、老父ノ一子タル者ハ此條アルカ爲メニ極惡ヲ犯スモ其死刑ニ處セラルルコトナキヲ豫知シ、愈奸惡ヲ逞クスルニ至ルヘク清朝ノ祖宗モ嘗テ其弊ヲ認メラレタル事實アリシヲ以テ、今之ヲ除クモ禮教ニ悖ルコトナシトイフニ在リタリ。

(ハ)「親屬相姦」ノ罪ヲ規定セサルコト

コレ亦禮教觀念上此獸行ヲ嚴罰嚴禁スヘキモノトスルコト、舊律派ノ固持スルトコロタルハ言ヲ待タスト雖モ、沈家本ノ之ニ反對シテ主張スルトコロニ依レハ、普通ノ姦犯ニ關スル刑ニシテ其最重ノモノヲ以テ之ニ臨マハ足レリトセルモノニシテ、殊ニ此種ノ犯罪ハ家族内ノ秘密ニ屬シ、直チニ社會ニ危害ヲ與フルモノニ非サルト同時ニ、多クノ場合ニ於テハ他罪ノ審理中偶然ニ發見スル餘罪ニ屬スルヲ常トスルカ故ニ、司法ノ局ニ當ル者ハ主罪ニ重キヲ置キテ餘罪ヲ問ハサルヲ常トシ、審理ノ主罪ハ輕刑ニ該ルモノナルニ反シ、偶發ノ餘罪カ死刑ニ該ルカ如キ場合ニ於テハ事實上律文ハ活用シ難キモノナルカ故ニ、本罪ニ付テハ特ニ專條ヲ設クルノ要ナク普通ノ姦犯ニ關スル規定ヲ運用スルヲ以テ足レリトセシモノナリ。

(ニ)「親屬相盜」及ヒ「親屬相毆」ノ罪ヲ規定セサルコト

現行刑律、大清律例、大明律及ヒ唐律等亦之ヲ規定セサルナク、殊ニ「親屬相毆」ニ付テハ大明律以來ノ刑制上極メテ詳密ナル規定ヲ設ケテ、一家又ハ同姓ノ親屬内ニ於ケル和平ト

風教ヲ維持セントシタリ、而シテ沈家本ノ之ニ對スル反論ニ依レハ此兩條ハ刑ノ酌量ニ關スルモノニシテ別ニ之カ爲メニ專條ヲ設クルノ要ナク、唯子孫弟幼カ尊親屬ヲ毆ツノ罪ハ古來規定ノ存スルトコロニシテ本法ニ於テモ特ニ明文ノ規定ヲ設ケタルカ故ニ、間然スルトコロナシトイフニ在リトス。

(ホ)「故殺子孫」ノ罪ヲ規定セサルコト

舊律派ノ主張ニ依レハ、コレ亦從來ノ律ニ規定シテ專條アルトコロニシテ、法律カ父子其他尊卑屬ノ間ニ於ケル特種ノ關係ヲ斟酌シテ常例ニ照シテ所罰スルノ酷ナルモノアルニ順ミタル有用ノ規定ナリトセルナリ、而シテ沈家本ノ之ニ反對スル所以ハ明律並ニ之ニ倣ヒタル大清律カ徒刑一年半ヲ以テ此罪ニ臨メルハ、輕キニ失スルノ甚シキモノナリトセルモノニシテ、父祖ハ嫡繼慈養ノ責ヲ負フモノニシテ之ヲ殺シテ嗣ヲ絶ツカ如キ場合ハ絞刑ニ處スルモ苦シカラサル場合アルヘク、若シ又酌量、減輕スヘキ理由アルニ於テハ最輕ハ三年未滿ノ徒刑ニ處スルコトヲ得ヘク、屈伸ノ法アリテ裁量宜シキヲ制スルヲ得ヘキカ故ニ是亦特ニ此場合ニ處スヘキ專條ヲ必要トセストセシモノナリ。

(ヘ)「妻毆夫」及ヒ「夫毆妻」ノ罪ヲ規定セサルコト

舊律派ノ主張スルトコロニ依レハ、夫尊妻卑、夫主妻從ハ支那古來ノ家族制度上ノ教儀ナルカ故ニ、唐律以來夫ノ罪ハ輕キニ從ヒ、妻ノ罪ハ重キニ從テ處斷スヘキヲ規定シ、明律ニ至リテハ更ニ其間ニ於ケル刑量ニ一層ノ懸隔ヲ設ケタリ、而シテ清律之ニ從ヒタルニ本律ニ於テハ之ニ關スル專條ヲ設ケサリシハ此從來ノ教儀觀念ヲ破壞スルモノトセルナリ、而シテ沈家本ノ之ニ對スル態度ハ妻ハ齊ニシテ夫ト其體ヲ齊シクスルモノナレハ、罪名ニ輕重ノ懸隔ヲ設クルノ甚シキハ古聖ノ妻齊ノ教儀ニ反スルモノニシテ、唯夫ハ多少ノ輕キニ從ヒ妻ハ多少ノ重キニ從フノ差別ハ將來判例ニ依リテ之ヲ定ムレハ足り、敢テ器械的ナル專條ヲ設クルヲ要セストシタルモノトス。

(ト)「子孫違犯教令」ノ罪ヲ規定セサルコト

舊律派ノ主張スルトコロニ依レハ、コレ孝ハ百行ノ基トセル古來ノ禮教ヲ維持センカ爲メノ規定ニシテ、子孫ニシテ祖父母、父母ノ教令ニ違犯シ又ハ供養ヲ怠ル者ハ唐律ニ在リテハ徒刑ニ處シ、明律ニ在リテハ杖刑ニ處シ、而シテ清律亦之ニ倣ヒタルカ、大清現行刑律

ニ在リテハ之ヲ罰金ニ處スルコトトシ漸次其刑ヲ輕クシタリト雖モ、而モ律ヲ以テ之ヲ罰スヘキモノトセルコト曾テ異ナルコトナシ、然ルニ今此制ヲ捨テシテ支那固有ノ禮教ト家族制度ノ基本ヲ破壞スルモノトセシナリ。

之ニ對スル沈家本ノ主張ハ極メテ簡短ニシテ教令ノ違犯ハ家庭教育上ノ問題ニ屬シ、將來感化院ノ如キヲ設備シテ家庭トノ連絡ヲ取リテ其效ヲ舉クルヲ要スヘク、國家ノ刑事ニ關スルトコロナク刑律中ニ規定スルニ足ラストセシモノナリ。

(チ)「無夫之婦女犯姦」ノ罪ヲ規定セサルコト

舊律派ノ主張ニ依ンハ、無夫ノ婦女ト雖モ和姦スル者ヲ所謂スルハ唐律以來ノ規定ニ見ルトコロニシテ、唐律ニ於テハ徒一年半ノ重刑ニ處シ、明律ニ於テハ杖八十二處シ、大清律亦之ニ從ヒ而シテ大清現行刑律ハ之ヲ罰金十兩ニ處シ、男女共ニ之ヲ戒メテ風紀ヲ維持セントセサルナキニ拘ラス。本律カ之ヲ無制裁ノ下ニ解放セルハ古來ノ聖教ヲ破壞スルモノトセルモ、沈家本ハ之ニ反シテ歐洲諸國ニ於テハ無夫ノ婦女ノ和姦ヲ治罪スヘキ刑條ヲ設ケタルモノナク、近來ノ學說亦之ヲ刑律ニ規定スルニ足ラストセルカ故ニ、今獨リ我邦ニ在

リテ此規定ヲ維持セハ必スヤ其指摘ヲ受クヘク風化ハ教育ニ關連スルカ故ニ別ニ便法ヲ講スルヲ要スヘク、此種ノ事項ヲ刑罰トシテ數アルカ如キハ所謂「之ヲ齊シクスルニ刑ヲ以テス」ルモノニシテ後世ノ爲政者カ教育ノ途ヲ講セスシテ唯刑是ヲ務ムルハ斷シテ聖人ノ意ニ非ストセルモノナリ。

以上ノ諸點ヲ中心トセル兩派ノ論争ハ一時支那在朝在野ノ法曹界ヲ壓捲シ、當時外國ノ教習ニシテ支那ニ招聘セラレタル者亦此論争ニ參加スルニ至リ、實ニ支那ノ智識階級カ其法制ノ研究ニ熱中シタルコト殆ト前後ニ其比ヲ見サルノ勢ヲ呈シ、此間新律派ハ更ニ其修正スヘキヲ修正シ又讓歩スヘキヲ讓歩シ、宣統二年ニ至リテハ結局第一編總則十七章八十八條及ヒ第二編分則三百二十三條共計四百一十一條ノモノヲ得タルカ、而モ遂ニ舊律派ヲ壓服スルコトヲ得サリシモノニシテ、却テ憲政編查館ハ前記ノ廷杰ノ意見ニ從ヒ五個ノ改修條件ヲ實質トセル暫行章程五條ヲ新刑律ノ附則トシテ頒布實施スルコトトナリタルヲ以テ、斯界ニ於ケル清朝隨一ノ碩學ニシテ同律ノ爲メニ其心血ヲ注キタル沈家本ハ終ニ其位置ニ安ンスルヲ得サルニ至リシカ故ニ、同年之ト同時ニ修訂法律大臣ノ職ヲ辭シタルカ、清朝ノ社稷モ亦其翌年ニ至リテ革命倒壞ノ悲運ニ陥リタルヲ以テ同律ハ茲ニ又々民國ノ法律トシテ其内

容ヲ改修セラレサルヲ得サル運命ノ下ニ民國ニ依リテ承繼セララルルニ至リタルモノトス。

第十六節 民國ノ刑法

第一項 暫行新刑律

宣統三年十月革命軍起リ、翌年清朝滅ヒテ中華民國成リ、一時孫逸仙ハ南京ニ在リテ臨時大總統ノ職ニ就キタルモ、間モナク袁世凱之ニ代リテ北京ニ在リテ臨時大總統ト爲ルヤ、民國元年三月十日附ノ大總統令ヲ以テ「現在民國ニ在リテハ未タ新法律ヲ議定領布スルニ至ラサルカ故ニ、從前施行ノ法律及ヒ新刑律中民國ノ國體ト抵觸セル各條ハ其效力ヲ失スヘキモ、其餘ハ暫ク援用ヲ行フ」ヘキ旨ヲ定メタルヲ以テ、茲ニ前節第六項ニ述ヘタル新刑律ハ暫行新刑律ノ名ニ於テ施行セラルルコトト爲リ同年四月ニ至リ右ノ如ク民國ノ國體ト抵觸セル部分ハ全部刪改ノ上領布セラレタリ、而シテ之カ施行ニ付テハ同年八月新刑律施行細則十條ノ制定公布アリテ此暫行新刑律ト前節第五項ニ述ヘタル舊刑律

タル大清現行刑律トノ間ニ於ケル新舊交替ノ過渡辦法ヲ定メタリ、爾來此暫行新刑律ハ或ハ單ニ新刑律ト言ヒ、之ニ對シテ大清現行刑律ハ現行律ト稱セラルルニ至レリ、蓋シ本來其名ハ現行刑律ト言ヘルモ其内容ハ刑律以外ノ職制、公式、戶役、田宅、婚姻、倉庫、錢債、祭祀、禮制、軍政其他民事、商事、行政、訴訟等ノ各部門ニ屬スル事項ヲモ併セテ規定セシモノニシテ、而シテ今暫行新刑律ニ於テ新規ニ規定シタルモノハ單ニ右大清現行刑律中ニ於ケル賊盜律以下純然タル刑事法ニ關スル部分ノミニ屬スルヲ以テ、其他ノ部分ハ民國ニ降リテ以後之ニ代ルヘキ新法ノ制定施行ヲ見サル限り其儘効力ヲ維持スヘキモノトシタルコト前述ノ如シ、而シテ既ニ刑事法ニ屬スル部分ヲ除キテ之ニ替ルヘキ新刑律ヲ立テタルカ故ニ、其殘部ハ現行刑律トイフヘカラスシテ現行律ト稱スヘキモノトシタルコト亦當然ノコトトイフヘキナリ。

前節第六項ニ述ヘタルカ如ク、當初修訂法律館ヨリ新刑律草案トシテ具奏シタルモノハ總則十七章八十七條及ヒ分則三十六章三百條共計三百八十七條ヨリ成リタルモノナリシモ、其後種々改刪、補修セラレ最後ノ宣統二年ニ於ケル成案ニ於テハ、總則八十八條及ヒ分則三百二十三條共計四百一十一條ト爲リタルモノニシテ、而シテ今民國元年四月ニ至リ、其國體ト抵觸スルモノアルノ故ヲ以テ是等ノ部

分ヲ刪改シテ頒布シタリトイフハ、此最後ノ四百十一條ヨリ成レルモノニ付テイフモノタルヤ言ヲ待
タサルトコロニシテ、之カ施行ニ關シテハ更ニ同年八月ノ通令タル新刑律施行細則ヲ以テ定ムルトコ
ロアリタリ。

右ノ如ク新刑律中民國ノ國體ニ抵觸セルノ故ヲ以テ刪改シタル部分ハ皇室ニ關スル罪ノ規定ヲ始ト
シ制書、御璽、帝國、臣民、覆奏、恩赦等ノ用語ニ至ル迄全律中至ル處ニ存在シタリト雖モ、今茲ニ
之ヲ詳述スルノ要ナシ。

民國二年十月ニ至リテ大總統選舉法ノ公布アリテ、袁世凱ハ茲ニ正式ニ第一回ノ大總統ニ選任セラ
レ、次テ各國カ中華民國ヲ承認スルコトナルヤ袁世凱ノ地位漸ク強キヲ加ヘタルヲ以テ、三年一月
ニ至リテ遂ニ國會ヲ解散シ種々ノ非常手段ヲ用ヒテ漸次帝政回復ノ機運ヲ作ラントスルニ及ンテヤ、
此暫行新刑律ハ全般ニ亘リテ刑罰制裁ノ輕キニ過クルモノアリトシ、其意ヲ滿タスニ足ラサルモノ少
カラサリシカ故ニ之ヲ改メンカ爲メニ、更ニ同三年十二月ニ至リ暫行新刑律補充條例十五箇條ヲ制定
實施スルコトトセリ、コレ一面ニ於テハ前節第六項ニ於テ述ヘタル清末ノ尙書廷杰カ、修訂法律館ノ
編定ニ係ハル新刑律ノ實施ニ對シテ反對センカ爲メニ呈出シタル五個ノ條件ヲ實質トセル暫行章程ト

同一ノ趣旨ニ出テタルモノニシテ、和姦ノ禁制、卑幼者ノ尊親屬ニ對スル罪ニ付テ正當防衛ノ規定ノ
不適用、其他禮教觀念ヲ保持シ、帝制ノ恢復ニ必要ナル忠孝思想ノ退廢ヲ防止セントスルノ意ニ出テ
タルモノナルヤ極メテ明カナリトス。

尙ホ茲ニ一言スヘキハ前記ノ如ク暫行新刑律ノ施行ヲ見ルコトナリタルヤ、大清現行刑律即チ現
行律中ノ純然タル刑法ニ屬スル部分ハ此新法ノ出現ニ依リテ其效力ヲ失ヒタルモ、前記民國元年三月
十日ノ大總統令ニ依リ同律中ノ他ノ部分ニシテ新法ト抵觸セサルモノハ依然トシテ其效力ヲ持續セル
モノト看做サレ、殊ニ民事關係ニ屬スルモノハ「民國繼續適用現行律民事部分」ナル新名目ノ下ニ其
儘有效ナルヲ認メラレタリ、此點ニ付テハ民國三年大理院上字第三〇四號判例ハ極メテ明白ニ之ヲ判
示セリ、即チ曰ク

民國ハ未タ民法法典ヲ頒布セサルヲ以テ、前清現行律（大清現行刑律）中、民國ノ國體及
ヒ嗣後頒行ノ成文法ト抵觸セサル部分ハ當然繼續シテ有效ナリトス、而シテ前清現行律ハ
名ハ現行刑律ト稱スト雖モ、其内刑事部分ヲ除クノ外民商事ニ屬スル規定尙ホ少カラサル
ニ屬ス、サレハ其名稱ノ刑律タルノ故ヲ以テ誤解シテ（暫行新刑律ノ施行ト共ニ）既ニ廢止

セラレタルモノト爲スヘカラス。云々

サレトモ往々ニシテ誤解セラレ易キカ故ニ、右ノ如ク別ニ「民國繼續適用現行律民事部分」ナルモノノ頒布アリテ其内容ヲ限定スルコトトシタルカ、此部分ハ服制圖、名例、戶役、田宅、婚姻、錢債等ノ部門ニ屬スル規定中ヨリ適當ナリト認メタルモノヲ摘取シタルモノニシテ、固ヨリ一時ノ便宜處分タリシノミナラス今ヤ既ニ新民法全法典ノ施行ヲ見ツツアルカ故ニ、茲ニ之ヲ説明スルノ要ナシ。

第二項 其後ノ刑法ノ改修事業

第一目 第一次刑法修正案

民國ノ創設後前代ヨリノ懸案タリシ刑法改修ノ事業ハ一日ト雖モ忽諸ニ附スヘカラサル事情アリシカ故ニ、民國二年前清時代ノ修訂法律館ヲ改メテ法律編查館ト爲シ、前清時代ヨリ修訂法律館ニ在リテ提調官タリシ董康、章宗祥及ヒ纂修官タリシ汪有齡等ヲ首腦者トシテ引續キ刑法改修ノ事業ニ當ラシメタルカ、其結果同人等ハ八箇月ヲ費シテ暫行新刑律ヲ修正シタル成案ヲ得タルカ故ニ、民國四年四月其修正理由ノ要領ヲ示セル説明書ト共ニ之ヲ大總統ニ呈出シタリ、其修正案改訂理由ノ要領ナル

モノ左ノ如シ。

(一) 總則編中第八章ニ親屬加重ノ一章ヲ特設シタルコト、

中國ノ舊制ニ依レハ親屬間ニ於ケル服制甚タ嚴重ニシテ、祖父母、父母其他直系ノ尊親屬ニ對スル罪ニ付テハ新刑律分則ノ各條ニ於テモ特別ノ規定アリト雖モ、傍系ノ親屬ニ付テハ何等規定スルトコロナク、伯叔父母ニ對スル罪ノ如キ一ニ裁判所カ各事件審斷ノ際刑ノ輕重ヲ自由裁量スヘキモノトシ、何等劃一的ノ條規ヲ定ムルモノナシ、故ニ修正案ニ於テハ直系尊親屬ニ對スル罪ハ本刑ニ照シテ二等ヲ加重スヘク、傍系尊親屬ニ對スルモノハ一等ヲ加重スヘキ原則ヲ定メ、並ニ親屬加重ノ場合ニ於テハ加ヘテ死刑ニ至ルヲ得ルモノトシタルコト。

(二) 直系尊親屬内ニハ外祖父母ヲ入ルヘキコト、

東西各國ノ民法ニ於テハ概シテ母黨ト父黨ト共ニ並尊シ、外祖父母ハ母ノ出ルトコロニシテ我國ノ服制ニ依レハ小功ニ屬スト雖モ、從來ノ刑律中人命、鬪毆又ハ訴訟等ノ各章ニ於テハ往々直系尊親屬ト同一視セルカ故ニ其母ノ尊フトコロタル外祖父母ハ之

ヲ直系ノ尊親屬ト同視スヘキモノトシタルコト。

三〇

(三) 第一項ニ述ヘタル暫行新刑律補充條例中ニ規定セル正當防衛權ノ限制及ヒ無夫ノ婦女ノ姦犯ニ關スルニ箇條ヲ本法ノ正條中ニ編入シタルコト、

支那舊來ノ律ニ於テハ共ニ之ヲ禁制セルトコロニシテ中國ノ禮教ニ關スルコト大ナルモノアリトセラレ、此點ニ付テハ前清以來世上ノ論議亦甚タ盛ナリシカ故ニ、茲ニ此輿論ニ鑑ミ是等ニ關スル禁制的規定ヲ本律内ニ編入シタルコト。

(四) 尊長ノ卑幼ニ對スル姦非ノ罪ヲ定メタル章中ニ強制賣姦ノ條ヲ増設シ略誘ノ章中ニ強賣及ヒ和賣ノ罪ヲ定メタルコト、

從來ノ舊律ニ在リテハ妻妾子女ヲ強ヒテ人ト通姦セシメ、又ハ子孫若クハ服制ノ内ニ在ル親屬ヲ略賣シテ人ノ奴婢ト爲シタル者ノ治罪ハ甚タ嚴ナリシニ拘ラス、暫行新刑律中ニハ何等之ニ關スル規定ナカリシカ故ニ、之ニ關スル專條ヲ設ケテ廉恥ヲ養ヒ親愛ヲ敦カラシメタルコト。

(五) 侵犯大總統ノ一章ヲ特設シタルコト、

共和國ニ在リテハ君臣ノ名分ナシト雖モ、而モ大總統ハ國民ノ推舉スルトコロニシテ政治上ノ責任ノ歸着スルトコロナレハ、米佛諸國ニ在リテモ其地位ヲ尊敬スルトコロナルカ故ニ、此一章ヲ特設シテ其尊嚴ト政體ヲ維持スヘキモノトシタルコト。

(六) 私鹽罪ノ一章ヲ特設シタルコト、

稅制ニ關スルモノハ行政事項ナリト雖モ支那ニ於ケル鹽法ハ年來特種ノ沿革ヲ有シ、其政府專賣ノ歲入ハ國家ノ專利ニ屬シ私賣ヲ禁スルニ嚴刑ヲ以テスルコト亦既ニ年所ノ久シキモノアリテ、此制度ハ依然持久スヘキモノナルカ故ニ之ヲ特別法ニ一任スルコトナク刑法中ノ分則ニ之ヲ編入シテ以テ國計ヲ重ンスヘキモノトシタルコト。

(七) 有期徒刑ノ長期ヲ十二年以下トシタルコト、

本律ニ於テハ刑ヲ死刑、自由刑及ヒ罰金ノ三種トシタルモ各本條ノ規定ニ照サハ自由刑最モ多ク、而シテ支那現下ノ情形ニ依レハ生計ノ困難ニ因ル犯罪者多ク若シ在監期間ヲ長クセンカ、監獄ノ設置ト在監囚ニ對スル費用ノ大ナルニ苦シマサルヲ得サルナリ、サレハ暫行新刑律ニ於テハ有期徒刑ノ長期ヲ十五年トセルモ本法ニ於テハ之ヲ十

以上ノ諸點ヲ以テ改修ノ要點トシタル修正案ハ之ヲ第一次刑法修正案トイヒ、漢律以來律ヲ以テ名目トセシ沿革ヲ棄テテ法ト稱スルニ至リシナリ。

第二目 第二次刑法修正案

右ニ述ヘタルトコロニ依リテ第一次ノ修正案ナルモノハ、袁世凱カ帝政復興ノ計畫ヲ立テタル時期ニ於テ、其抑制ノ下ニ立案セラレタルモノト認ムヘキ形跡ノ濃厚ナルヲ知ルヲ得ヘク、從テ其規定ノ内容ハ民國共和ノ新方針ニ合致セサルモノアリシナリ、而シテ民國五年六月其死亡スルト共ニ洪憲帝政ノ機運一掃セラレタルヲ以テ更ニ新方針ノ下ニ修訂スルノ必要ヲ認メ、民國七年ニ至リ再ヒ前清ノ光緒末葉ノ例ニ倣ヒテ修訂法律館ヲ改設シ、董康及ヒ王寵惠等總裁ト爲ルニ及ンテ茲ニ右第一次刑法修正案及ヒ暫行新刑律等ヲ基本トシ更ニ各國ノ刑法ヲ參酌討究シテ第二次刑法修正案ヲ得タリ、今此修正案カ暫行新刑律ヲ修改シタル重要ナル點ヲ摘示セン、

第一編 總 則

(一) 暫行新刑律(以下單ニ暫行律ト稱ス)ハ舊法施行ノ間ニ行ハレタル犯罪カ新法施行ノ後ニ

處斷セララルル場合ニ於テ、新舊刑法ノ間ニ刑ニ輕重ノ差アル場合ニ於テハ、一概ニ新法ニ從フヘキヲ定メタルモ、第二次刑法修正案(以下單ニ修正案ト稱ス)ニ於テハ若シ舊法ノ刑カ輕キトキハ其輕キニ從フヘキモノトシタルコト。

(二) 故意及ヒ過失ニ付キ暫行律ハ的確ナル解釋ヲ與ヘサリシカ故ニ常ニ混亂ヲ招キシニ顧ミ修訂案ニ於テハ最近各國ノ立法例ニ倣ヒ明文ヲ以テ其意義ヲ定メタルコト。

(三) 暫行律ニ於テハ一罪ヲ犯サントシテ併セテ他ノ結果ヲ生シタルトキハ其結果ノ全般ニ着眼シテ刑ヲ加重スヘキ規定ヲ設ケタルモノ頗ル多カリシモ、凡ソ犯意ニ伴フ結果アルニ於テハ時ニ重キニ從テ之ヲ所罰スルハ敢テ當ラストセサルモ、犯意外ノ結果ノ發生ハ其原因複雜ニシテ犯人ヲシテ其責ニ任セシムルハ犯人ニ對シテ公平ナラサルノミナラス、刑事政策上亦宜シキヲ得サルモノアルカ故ニ、修正案ニ於テハ千九百二年ノ萬國刑法學會ノ決議及ヒ各國最近ノ立法例ニ倣ヒ犯人ハ唯其豫見シ得タル結果ニ對シテノミ責ヲ負フヘキモノト定メタルコト。

(四) 刑事責任負擔ノ年齡ニ關シテハ支那歷代ノ律ノ規定ハ一定セスシテ、暫行律ニ於テハ十二

歳ト爲シタルモ妥當ナラサルカ故ニ、修正案ハ各國多數ノ立法例ニ倣ヒテ十四才ト爲シ、十四才以上十六才未滿ノ者ハ其刑ヲ輕減スルコトヲ得ルモノトシ、又感化教育ニ附スルノ外監護人ヲ定メ一定ノ保證金ヲ納付セシメテ品行ノ監督ニ當ラシムルノ制ヲ設ケタルコト

(五) 暫行律ニ於テハ正當防衛ハ不正ノ侵害ニ對シテ之ヲ行フヲ得ルモノトシ、緊急避難ノ行爲ハ已ムヲ得サル場合ニ於テハ皆之ヲ行フコトヲ得ルモノトシ、其範圍甚タ廣キニ過キタル嫌アルカ故ニ、修正案ニ於テハ多數ノ立法例ニ倣ヒ、前者ハ不法ノ侵害アリタル場合ヲ限トシ、後者ハ自己又ハ他人ノ生命、身體、自由若クハ財産ヲ救護スルノ目的ニ出テタル場合ヲ限トスヘキモノトシタルコト。

(六) 暫行律ニ於テハ從犯ハ犯罪行爲ノ實行以前ニ於ケル幫助ヲ以テ限トシ、實行中ノ幫助ハ其犯罪行爲トノ關係如何ヲ論スルコトナク、概シテ正犯ニ準シテ論罪スヘキヲ定メタルモ、コレ公平ナル見解ニ非サルカ故ニ、修正案ニ於テハ實行前ト實行中トヲ論セス、凡ソ正犯ヲ幫助シタルニ過キササル者ハ從犯トシ、唯犯罪ノ實行中直接且重要ナル幫助ヲ爲シタル者ハ正犯ノ刑ニ處スヘキヲ定メタルコト。

(七) 暫行律ニ於テハ有期徒刑ニ關シテ等級制ヲ採用シ、五種ノ等級ヲ以テ標準トシ刑ノ輕重各不同ナリト雖モ、必スヤ此五等ノ何レカヲ以テ之ニ處スヘキヲ定メタルカ故ニ、時ニ酷ニ失スルコトアルヘク、時ニ寬ニ失スルコトアルヘク、殊ニ加ヘントセハ必スヤ一等ヲ加フルヲ要シ、減セントセハ必スヤ亦一等ヲ減スルヲ要シ、時ニ輕キニ失シ時ニ重キニ失スルコトアルヘキカ故ニ修正案ニ於テハ等級制ヲ廢シ、分則ノ各本條ニ於テ年月ヲ定メ之ヲ加減セントスルトキハ適宜ノ分數ヲ用ユルコトヲ得テ、從テ刑ニ失當ノ虞ナク又加減懸隔ノ失ナキヲ期シタルコト。

(八) 暫行律ニ於テハ罰金ハ一圓ヲ以テ最低トセルモ修正案ハ之ヲ改メテ拾錢トシ、暫行律ニ於テハ罰金ヲ監禁ニ易ユルニハ一圓ヲ以テ一日ニ換算スルモ、修正案ハ之ヲ改メテ拾錢以上三圓以下ト定メ、暫行律ニ於テハ裁判確定前ノ拘留日數ハ一日ヲ以テ一圓ト定メタルモ、修正案ハ之ヲ改メテ十錢以上二圓以下トシ裁判官ヲシテ犯人ノ資力又ハ職業等ニ鑑ミテ之ヲ酌定セシムルコトトシ、又暫行律ニ於テハ罰金ヲ監禁ニ易ユルトキハ其日數ヲ三年ニ限リタルモ、各國ノ立法例ヲ按スルニ一年ヲ過クルモノナキカ故ニ修正案ニ於テモ之ヲ短縮

シテ一年トシタルコト。

(九) 暫行律ニ於テハ褫奪公權ハ必スヤ之ヲ行フヘキ場合ト之ヲ行フヲ得ル場合トニ區別シ、公權ノ全部ヲ褫奪スルトキト然ラサルトキトノ區別アリテ標準一ナラサルモ、修正案ニ於テハ之ヲ以テ裁判所ノ裁量ニ一任シ又一部ノ褫奪ヲ認メサルコト。

(十) 暫行律ハ累犯ニ付キ犯罪ノ異同及ヒ性質ノ如何ニ分タス、同等ニ處罰シタルヲ以テ特別ノ惡性ヲ有セル犯人ヲ懲治スルニ足ラサリシカ故ニ修正案ニ於テハ普通累犯ト特別累犯ノ二者ニ區別シ、後者ニ對スル處罰ハ前者ニ比シテ重キヲ加ヘタルコト。

(十一) 暫行律ノ總則第五章ニ定ムル俱發罪ハ舊來ノ名稱ヲ沿用スルモノナルモ、其規定スルトコロハ數罪俱發ニ非スシテ數罪別々ニ發覺シタル場合ニ於テモ尙ホ適用アルモノナルカ故ニ、日本ニ於テハ舊刑法ハ之ヲ數罪俱發ト言ヒシモ新刑法ハ改メテ之ヲ併合罪ト爲シタリ而シテ所謂併合罪ハ數罪カ合シテ一罪ト爲ルニ非スシテ各罪互ニ獨立セルモ唯併合シテ論罪セラルルニ過キス、故ニ修正案ニ於テハ之ヲ併合論罪トシタルコト。

(十二) 暫行律ハ裁判確定前ニ犯シタル數罪ハ總テ併合論罪ト爲シタリト雖モ、一罪ニ付キ既ニ

判決ノ宣告ヲ經タル後ニ犯シタル罪ニ付キ犯人ニ對シテ尙ホ併合論罪ノ利益ヲ與フヘキニ非サルカ故ニ、修正案ニ於テハ宣告前ニ犯シタル數罪ニ限りテ併合論罪ト爲スコトヲ得ヘキモノトシタルコト。

(十三) 暫行律ハ刑ノ酌減ニ關スル場合ノ外、一般ニ輕重ヲ酌量スヘキ標準ヲ定ムルモノナカリシカ故ニ其施行以來輕重ノ酌量ニ關シテ不便ヲ感シタルトコロナリシナリ、サレハ修正案ニ於テハ最近ノ瑞西及ヒ獨逸ニ於ケル新立法例ニ倣ヒ刑ノ量定ニ關スル注意事項ヲ掲ケ以テ法定ノ刑内ニ於ケル輕重裁量ノ標準トシタルコト。

(十四) 暫行律ハ三年以下ノ有期徒刑ヲ以テ刑ノ執行猶豫ノ範圍ト定メタルモ、今之ヲ各國ノ立法例ニ徵スルニ其範圍廣キニ失スルノ嫌アルヲ改メテ二年以下ノ有期徒刑ヲ以テ限トシ、又刑ノ執行猶豫ノ期間ノ長短モ本刑ノ刑期ノ長短ニ照シテ之ヲ定ムヘキモノナレハ、暫行律ニ於テハ最短期間ヲ三年ト爲シタルモ、修正案ニ於テ之ヲ短縮シテ二年ト爲シタルコト。

(十五) 罰金刑ニ付テモ執行猶豫ノ規定ヲ適用スヘキモノナリヤ否ヤニ付テハ從來議論ノ存スルトコロナルモ、本來執行猶豫ノ制裁ハ比較的ニ輕キ罪ヲ犯シタル者ニ對スル遷善政策ニシ

テ、既ニ徒刑又ハ拘役ニ該ル者ニ對シテスラ之ヲ與フルノ主義ヲ實行スル以上ハ、之ニヨリ輕キ罰金刑ニ付テ其適用ヲ見サルヘキ理由ナク、外國ノ刑法中ニモ罰金刑ニ付テ此制度ヲ適用シタル實例アルカ故ニ、修正案ニ於テハ之ヲ採用シタルモノタルコト。

(十六) 親屬ノ範圍ニ付テハ現行律(大清現行刑律)ハ舊來ノ服制圖ヲ以テ準トセルモ、此服制圖タルヤ甚タ煩複細密ノモノニシテ賢智者ト雖モ時ニ容易ニ解シ難キモノアルカ故ニ、修正案ニ於テハ民法ノ例ニ倣ヒ、親等計算法ヲ以テ簡便ナリトシテ之ニ從フコトトシ、而シテ其範圍ハ從來服制圖ノ定ムルトコロト一致スルモノタラシメタルコト。

(十七) 文例ニ關スル特別ノ規定ハ各國ノ刑法中之ヲ設クルモノアリ、然ラサルモノアリテ、後者ニ在リテハ法制ノ章中ニ一二箇條ノ規定ヲ併設セルニ過キササルモノトス、而シテ特別ノ一章ヲ設クルモノニアリテモ之ヲ總則中ノ冒頭中ニ置クモノアリ、又末段部ニ置クモノアリテ暫行律ニ於テハ和蘭ノ例ニ倣テ末段ニ置キタルモ、文例ノ規定ハ總則中ノ條項ニモ其適用アルモノ少カラサルカ故ニ、修正案ニ於テハ之ヲ第二章トシテ法例ノ章ニ次キテ期間計算ノ前ニ置キタルコト。

(十八) 暫行律ニ於テハ刑名ノ章ヲ墨西哥刑法ノ立法例ニ倣ヒ未遂罪、累犯罪、俱發罪及ヒ共犯罪等ノ各章ノ後ニ列シ、罪アリテ而シテ後ニ、刑アルカ故ニ刑ヲ先ニシテ罪ヲ後ニスヘカラストセリ、然レトモ此内未遂罪ト共犯罪ハ犯罪ノ狀態ニ關スルモノナルカ故ニ、刑名ノ前ニ列スルハ固ヨリ當ヲ得タリト雖モ、累犯ト併合論罪ハ犯罪ノ狀態ニ關スルニ非スシテ科刑ノ輕重ニ關スルモノナルカ故ニ、各種ノ刑名ヲ知ラサルニ於テハ却テ累犯ト併合論罪ノ性質ヲ知ルヲ得サルナリ、故ニ修正案ハ累犯ト併合論罪ノ二章ハ改メテ之ヲ刑名ノ後ニ置キタルコト。

(十九) 暫行律第三章「不爲罪」ノ章内ニハ罪トシテ處斷スヘキモノニ付テモ規定スルところアリテ、章名ト規定ノ實質ト一致セサルモノアリトス、而シテ宥減、自首又ハ酌減等ニ關スル各章ノ規定ハ右ノ「不爲罪」ノ章中ニ規定セラレル減等ニ關スル各條項ト其趣旨相類スルモノナルカ故ニ、修正案ニ於テハ是等「不爲罪」宥減及ヒ自首ノ三章ヲ併セテ一章トシテ刑事責任及ヒ刑ノ減免ト題シタルコト。

(二十) 暫行律第十四章ハ赦免ニ關スル規定ナルカ、コレ前清時代修訂法律館ニ於テ大清現行刑

律起草ノ際未タ憲法ノ發布ナカリシカ故ニ、之ニ關シテ刑法中ニ規定スルノ外ナキ旨ヲ聲明シタルコトアルモ、今ヤ既ニ約法上之ニ關スル規定アルカ故ニ、修正案ニ於テハ此一章ノ規定ハ全部之ヲ删除シタルコト。

第二編 分 則

(二十一) 暫行律ニ於テハ大總統ニ對スル犯罪ニ付キ何等特別ノ規定ナキカ故ニ、第一次修正案ニ於テハ之ニ關スル特別ノ一章ヲ設ケタリ、蓋シ何等特別ノ規定ナキトキハ原則ニ從ヒ大總統ノ生命、身體、名譽等皆通常ノ場合ト同一ノ律ニ從テ保護セラルヘキニ止マル、然ルニ國交妨害ノ罪ニ關スル章ニ於テハ、外國ノ元首ニ對シテ特別ノ保護ヲ與ヘンカ爲メニ規定スルトコロアルニ照シ、内外權衡ヲ得サルモノトイフヘキナリ、コレ第一次修正案第八十六條乃至第八十八條ニ於テ大總統ニ對シ危害ヲ加ヘ又ハ加ヘントシタル者、過失ニ因リ危害ヲ加ヘタル者及ヒ不敬ノ行爲ヲ爲シタル者ニ對スル特別處罰ノ規定ヲ設ケタル所以ニシテ、第二次修正案ニ於テモ略ホ之ト同シク「侵犯大總統罪」ノ一章ヲ設ケテ第二編第一章ト爲シ普通ノ犯罪ニ比シ重キニ從テ所罰スヘキモノト爲シタルコト

(二十二) 暫行律ニ於テハ内亂罪ニ關シテ既遂ト未遂ニ區別シテ規定スト雖モ、此罪ニ付テハ犯罪ノ如何ナル程度ニ達セルトキヲ以テ既遂トスヘキヤニ關シテ學者間ニ議論ノ存スルモノアルニ鑑ミ、修正案ニ於テハ實行ニ着手シタルトキヲ以テ犯罪ノ成立シタルモノトスルノ主義ヲ採リタルコト。

(二十三) 暫行律ニ於テハ機務ヲ漏洩スルノ罪ヲ規定シ其各條ノ刑甚タ嚴酷ニ過キテ各國ニ其例ナキトコロナルカ故ニ、修正案ニ於テハ之ヲ外患ニ關スル罪ノ中ニ一括シテ規定シ、唯國家ノ安全ヲ害スルモノ又ハ外患ヲ貽スモノヲ以テ限トシタルコト。

(二十四) 暫行律ニ於テハ國交妨害罪ニ於テ外國ノ元首ハ其友邦タルト否トニ論ナク一律ニ特別ノ保護ヲ與ヘタルモ、コレ其範圍ノ廣キニ過クルモノニシテ、修正案ニ於テハ單ニ友邦ノ元首ヲ以テ限トシタルコト。

(二十五) 暫行律ニ於テハ瀆職罪ノ章中賄賂ニ關スル罪ニ付キ、事前ノ收賄ト事後ノ收賄ニ區別シテ刑ノ輕重ヲ定ムヘキモノトシ、其罪案ノ輕重トハ必スシモ相關セサルカ如ク、即チ職務違反ノ行爲ニ關シ事前ニ收賄シタルトキハ事後ニ收賄シタルトキニ比シ當然重キニ從テ

處罰スヘキモノトセルモ、各國ノ立法例ニ依レハ多クハ其職務違反ナリヤ否ヤノ罪質ニ依リテ刑ヲ定ムルコト、恰モ支那ノ舊律ニ於テ枉法ト不枉法トヲ分別シタル觀念ト異ナルナキカ故ニ、修正案ニ於テハ此主義ニ從ヒ以テ中外ノ法律ノ符合スヘキヲ期シタルコト。

(二十六) 暫行律ニ於テハ騷擾罪ヲ以テ獨立ノ一章トシタルモ、其性質上妨害秩序罪ト異ナルナキカ故ニ、修正案ニ於テハ之ヲ後者ニ一括シタルコト。

(二十七) 暫行律ニ於テハ「放火決水及妨害水利罪」、「危險物罪」、「妨害交通罪」、「妨害飲料水罪」及ヒ「妨害衛生罪」等ニ付キ各一章ヲ設ケタルモ、其規定タルヤ皆公共ノ安全ヲ妨害スル行爲ニ關スルモノナルカ故ニ、修正案ニ於テハ各國多數ノ立法例ニ倣ヒ是等ヲ併セテ一章ト爲シ公共危險ノ罪ト名付ケタルコト。

(二十八) 文書偽造ノ罪ニ付テハ各國ノ刑法ハ大略二派ニ分タレ、權利義務ノ關係ヲ證明スルニ足ルヘキ文書ヲ以テ保護ノ限トセルモノハ獨逸派ノ立法例ニシテ、公衆又ハ他人ノ文書ニ損害ヲ生スルヲ以テ保護ノ限トセルモノハ佛國派ノ立法例ナリ、而シテ暫行律ニ於テハ獨逸派ニ從ヒタリ、然レトモ所謂權利義務ヲ證明スルニ足ルヘキ文書ナルモノノ標準ニ至リ

テハ甚タ確定シ難ク、其爲メ獨逸ニ在リテハ數十年來困難ヲ來シ學者ハ多ク之ヲ非議セシカ故ニ、其新刑法草案ニ於テハ「此權利義務ヲ證明スルニ足ルヘキ」ナル一句ヲ刪除シテ他人ノ重要ナル權利義務ノ關係ヲ欺瞞スルモノナリヤ否ヤヲ以テ標準トスヘキヲ定メ、其結果殆ト佛國ノ文書損害主義ト大ナル區別ナキニ至リタルヲ以テ、修正案ニ於テモ佛國主義ニ從ヒタルコト。

(二十九) 暫行律ニ於ケル「姦非及重婚罪」ノ章ハ其名目上他ノ各種ノ猥褻ノ行爲ヲモ一括シテ其章中ニ規定スルニ適セサルナリ、而シテ「略誘及和誘罪」ノ章ニ於テハ多ク婚姻及ヒ家庭制度ノ妨害ニ關スル罪ヲ規定セリ、故ニ修正案ニ於テハ更ニ廣義ニ解釋セラルヘキ「妨害風化罪」及ヒ「妨害婚姻家庭罪」ナル名目ノ二章ヲ設ケテ暫行律ニ於ケル右二章ノ罪ヲ夫々分別規定シタルコト。

(三十) 暫行律ニ在リテハ大清現行刑律及ヒ其以前ノ律中ニ存セシ無夫ノ婦女ノ和姦ニ關スル罪ヲ廢止(前節第六項ニ説明シタル新刑律即チ暫行律ノ前身タルモノ以來廢止)シタル爲メ當時甚シク物議ヲ生シタル結果遂ニ其附則トシテ頒布シタル暫行章程五條中ニ之ニ關スル

規定ヲ設ケタリシコト前節第六項ノ下ニ説明シタルトコロナルカ、今此修正案ヲ實施スルニ到ランカ是等從來ヨリノ制法ハ全然其效力ヲ失フニ至リテ、極端ナル婦女ノ解放ヲ生スヘケレハ本案ニ於テハ風化ヲ妨害スル罪ノ章中ニ無夫ノ婦女ノ和姦ニ關スル罪ヲ定メタルモ、唯二十才未滿ノ良家ノ婦女タルヲ以テ限トシタルコト。

(三十一) 暫行律ニ於ケル「喪禮祀典及發掘墳墓罪」ノ一章ハ屍體ノ侵犯ニ關スル各條ヲ一括スルニ適セサルトコロナルカ、之ヲ各國ノ刑法ニ按スルニ此種ノ罪ヲ規定セル專章ハ「妨害宗教罪」ト名目シ、而シテ前清時代ノ修訂法律館ノ草案理由書ニ依ルモ同章ノ規定ヲ以テ宗教上ノ信仰保護ノ目的ノ爲メニ設ケタルモノトセルカ故ニ、修正案ニ於テモ「妨害宗教罪」ト命名シテ是等ノ諸罪ヲ一括シタルコト。

(三十二) 暫行律ニ於テハ「妨害商務罪」ノ章ナカリシカ故ニ修正案ニ於テ之ヲ増設シテ商務ヲ保護スヘキヲ定メタルコト。

(三十三) 鴉片ノ禁止ニ關スル海牙ノ國際條約ニ依レハ鴉片ノ外「モルヒネ」「コカイン」「ヘロイン」及ヒ其化合物ニ關スル禁止規定アリテ、民國ニ於テモ民國二年四月ノ頒行ニ係ハル

「モルヒネ」治罪條例アルカ故ニ、修正案ニ於ケル鴉片ニ關スル罪ノ章内ニ於テハ暫行律ニ定ムル鴉片ノ外尙ホ右「モルヒネ」其他ノ品名ヲ記入シタルコト。

(三十四) 暫行律ニ於テハ「賭博罪」ヲ規定シ如何ナル財物タルヲ問ハス之ヲ賭シタル者ヲ處罰スト雖モ、實際上其運用ヲ見ルコト困難ナルカ故ニ修正案ニ於テハ其範圍ヲ縮小スルコトトシタルコト。

(三十五) 暫行律ニ於テハ殺傷罪ヲ一章ノ下ニ規定シタルモ殺人ト傷害ハ二罪ニシテ其輕重甚シク懸隔シ、罪狀モ亦別個ニ觀察スヘキモノアルカ故ニ、修正案ニ於テハ之ヲ分テ二章トシタルコト。

(三十六) 暫行律ニ於テハ謀殺ト故殺ノ別ヲ廢シタルカ故ニ、科刑ノ範圍モ亦十年以上ノ有期徒刑ヨリ死刑ニ至リ、其範圍ノ廣大ナルコト同法ノ如キハ唯日本ノ一立例アルノミ、英米法ハ謀殺ト故殺ヲ區別シ獨法亦然リトス、而シテ伊太利及ヒ南米諸國ノ立法例モ亦普通ノ情節ト重大ノ情節トヲ區別シ謀殺ハ重大ノ情節ニ屬スルモノトス、而シテ支那ノ舊律ニ於テモ大同小異ナルカ故ニ修正案ニ於テハ中外ノ立法例ヲ斟酌シテ謀殺ト故殺ヲ區別シ又情節

ノ輕重ヲ區別シテ規定シ以テ科刑ヲ輕重スヘキモノトシタルコト。

(三十七) 暫行律ニ於テハ「私擅逮捕監禁罪」及ヒ「妨害安全信用名譽及秘密罪」ノ二章ノ罪ハ共ニ個人ノ自由ヲ法益トセルモノナリトシ、而シテ「妨害秩序罪」及ヒ「略誘及和誘罪」ノ兩章内ニモ亦個人ノ自由ヲ侵害スル罪ヲ規定セルカ故ニ、修正案ニ於テハ之ヲ一併シテ「自由妨害罪」ト爲シタルコト。

(三十八) 暫行律ニ於テハ竊盜ト強盜ヲ一併シテ一章ノ下ニ規定セルモ竊盜ハ單ナル財産侵害罪ナルニ反シ、強盜ハ財産及ヒ自由ノ侵害ニシテ其保護ノ法益同シカラサルカ故ニ修正案ニ於テハ之ヲ別章トシテ規定シタルコト。

(三十九) 略奪行爲ハ強盜ト差別スヘキモノアルカ故ニ、修正案ニ於テハ強盜ノ外ニ略奪ノ罪名ヲ用ヒ又海洋ニ於ケル強奪ハ強盜ニ比シテ其刑ヲ加重スヘキ事情アルカ故ニ、別ニ海賊ノ罪名ヲ定メテ刑ノ重キニ從フヘキヲ定メタルコト。

(四十) 暫行律ニ於テハ詐欺取財ノ章下ニ恐喝罪ヲ入レタルハ甚タ妥當ナラサルカ故ニ、本案ハ別ニ一章ヲ設ケタリ、又詐欺取財罪ト他人ノ財産ヲ處理スル者ノ其義務ニ違背スル罪トハ

別個ノモノナルカ故ニ、修正案ニ於テハ之ヲ詐欺ト同章ニ規定シタルモ別ニ背信ノ罪名ヲ設ケタルコト。

(四十一) 修正案第二十六條ニ於テハ故意ヲ狹義ノモノト廣義ノモノニ區別シ、何レノ場合ニ於テモ概シテ處罰スルヲ原則トセルモ、狹義ノ故意ヲ以テ犯罪成立ノ要件トセル場合ニ於テハ各本條ニ於テ必スヤ「明知」ノ文字ヲ用ヒテ特ニ其意義ヲ明カニスルノ文例ヲ定メ、以テ其他ノ場合ニ於テハ廣義ノ故意アルトキハ之ニ依リテ處罰スルニ足レリトシタルコト、尙ホ暫行律ニ於テハ此種ノ狹義ノ故意ノ存在ヲ要件トセルモノ僅カニ其第二百四十條ノ一條アリシノミナルニ反シ、修正案ニ於テハ九條ノ多キヲ認メタルコト。

(四十二) 暫行律ニ於テハ犯罪ノ未遂又ハ豫備若クハ陰謀ヲ處罰スヘシトセル場合甚タ多キニ過キタルモノアリシカ故ニ、修正案ニ於テハ之ヲ謹ミ、暫行律ノ規定ヲ斟酌シテ犯罪ノ輕重ニ注意ヲ拂ヒ以テ未遂ヲ罰スヘキヤ否ヤヲ定メ、殊ニ豫備若クハ陰謀ヲモ罰スヘキモノトスル場合ハ極メテ少數ノ重罪ニノミ限リタルコト。

(四十三) 暫行律ニ於テハ犯罪ノ未遂豫備又ハ陰謀ヲ罰セントスルトキハ之カ爲メニ別ニ獨立ノ

一條ヲ設ケテ各犯罪ニ關スル本條ト分離シテ之ヲ規定シタルモ、修正案ニ於テハ犯罪各本條中ノ一項トシテ一々之ヲ規定シ、以テ法條ヲ援用セントスル者ヲシテ容易ニ看過スルコトナカラシメンコトヲ期シタルコト。

(四十四) 犯罪ヲ同謀シタルモ之カ實行ニ關係セサル者ハ共同正犯トイフコトヲ得ス、又教唆ト並論スヘカラサルモノアリ、而シテ日本ノ判例ニ依レハ之ヲ以テ共同正犯トシ、爲メニ學者多ク之ヲ非難シ斯ノ如キハ共同實行ノ觀念ヲ誤解セルモノトセリ、而シテ一部ノ學者ハ又之ヲ以テ教唆ト爲シ、若クハ從犯ト爲ス等一定ノ見解ナシ、故ニ修正案ニ於テハ露國及ヒ瑞典ノ立法例ニ倣ヒ別ニ同謀犯トシテ殺人、強盜及ヒ恐嚇等ノ罪ニ關スル章中ニ特別ノ一條ヲ設ケタルコト。

(四十五) 暫行律ノ規定ニ依レハ各規定ノ間ニ於ケル刑量ノ範圍ニ著シク廣狹ノ懸隔アリテ權衡ヲ失スルモノアリトス、例ヘハ第九十條ニ於テハ最輕ヲ一百圓以下ノ罰金トシ最重ヲ五等ノ有期徒刑トシテ之ヲ四等ノ階級ニ分チテ詳細ナル規定ヲ設ケ、以テ法律上輕重ノ權衡ヲ定ムルモノアルニ反シ、第二百一十一條ノ殺人ノ罪ニ付テハ裁判所ハ有期徒刑ヨリ無期徒刑

刑並ニ死刑ニ至ル迄ノ廣キ範圍ニ於ケル刑ノ輕重ニ關シテ全然裁量ノ自由ヲ有ス、而シテ斯ノ如キ例ハ其他ノ規定中ニモ多ク之ヲ見出スコトヲ得、故ニ修正案ニ於テハ是等ノ不權衡ヲ調節シタルコト。

(四十六) 暫行律ニ依レハ五等以上三等以下ノ有期徒刑又ハ四等以上二等以下ノ有期徒刑若クハ若干額ノ範圍内ノ罰金ヲ科スルコトヲ得ル旨ヲ定メ、例ヘハ其第一百九條ノ如キ又ハ第二十二條ノ如キ其一例ナリトス、今四等以上二等以下ノ有期徒刑ニ科スヘキヲ定メタル各本條ニ付テ之ヲ考フルニ五等ノ有期徒刑ヲ科スルヲ以テ適當ナリトスル場合ニ於テモ之ヲ科スルコトヲ得スシテ必スヤ四等乃至二等ノ重刑ヲ科スヘク、然ラスンハ五等刑ヲ飛ヒ越エテ直チニ財産刑ノ輕キニ處スルノ外ナキカ如キハ刑ト罪トノ權衡ヲ考ヘサルモノトイフヘキナリ、サレハ修正案ニ於テハ是等ノ刑等ノ踰越ヲ避ケテ輕重ノ權衡ヲ計ランコトニ注意シタルコト。

(四十七) 暫行律ニ依レハ某罪ヲ犯シタル者カ之ニ因リテ人ヲ死傷シタルトキハ殺人又ハ傷害ノ罪ニ關スル規定ヲ援用シテ、數罪俱發ノ例ニ依リテ處斷スヘシトセルモノ合計十二條アリ

トス、而シテ之ヲ其實情ニ照スニ其各本罪ト俱發罪タル殺人又ハ傷害ノ罪トハ其間輕重ノ一々同シカラサルモノアリテ、刑ノ裁量上困難ヲ感スルモノアルカ故ニ寧ロ各個ノ場合ニ付キ法文上夫々刑ヲ定ムルヲ可トス、コレ修正案ニ於テハ數罪俱發ノ例ニ依ルヘキヲ定メスシテ何レカ其重キニ從ヒ各本條ニ於テ一々之ニ科スヘキ刑ヲ規定シタルコト。

(四十八) 暫行律ニ於テハ過失罪ニ付テモ被害者ノ身分ニ因リテ其刑ヲ加重セルモ、修正案ニ於テハ過失罪ハ故意ノ惡性ナキモノナルカ故ニ、如何ナル場合ニ於テモ加重ノ例ニ入ルヘキニ非ストシテ其規定ヲ刪除シタルコト。

(四十九) 多數ノ立法例ニ依レハ自由刑ト罰金刑ハ往々之ヲ併科セリ、コレ蓋シ自由刑ノミヲ以テスルモ未タ犯人ノ貪慾心ヲ懲戒スルニ足ラズトセルカ故ナリ、然ルニ暫行律ニ於テハ自由刑ト罰金刑ヲ併科セル場合ハ僅カニ四條ニ過キスシテ其適用ノ場合甚タ少シ、故ニ修正案ニ於テハ其他ノ貪慾心ノ發動ニ因ル犯罪ニ對シテモ之ヲ併科スヘキモノトシ此種ノ規定ヲ増加シタルコト、殊ニ暫行律ニ於テハ犯罪ニ因リテ利得シタル場合ニ限リテ罰金ヲ併科シ、利得セサルトキハ犯人ニシテ資財ヲ有セル者ナル場合ニ於テモ敢テ之ヲ併科セサルカ

故ニ其貪慾心ヲ懲戒スルニ足ラサルナリ、コレ修正案ニ於テハ關係條文中ニ於ケル「因テ利得シタルトキハ」ノ一句ヲ刪除シタル所以ナルコト。

(五十) 暫行律ニ於テハ罰金額ヲ定ムルニ被害物件ノ價格ノ若干倍額ヲ以テ標準トセル場合十三條アリトス、而モ其價格ヲ定ムルコト困難ナルノミナラス標價ノ時期ヲ何レニ定ムヘキヤニ付テモ亦何等規定スルトコロナキカ故ニ愈々其困難ノ大ナルモノアリトス、サレハ修正案ニ在リテハ價格若干倍ノ制ヲ廢シ各本條ニ於テ的確ナル罰金ノ數額ヲ定メタルコト。

尙ホ以上掲ケタルトコロハ暫行律ト第二次修正案トノ間ニ於ケル差異ナルカ、第一次修正案ト第二次修正案トノ間ニモ大小ノ差異アリトス、而シテ最モ重大ナル差異ハ第一次修正案カ私鹽罪ノ一章ヲ特設シタルニ拘ラス、第二次修正案ニ於テハ之ヲ刪除シタルコトニ在リトス、コレ各國ノ立法例ニ倣ヒ國家ノ專賣ニ屬スル事項及ヒ之ニ關スル違反行爲ハ共ニ特別法中ニ一括規定スルヲ以テ便利ナリトシタルモノトス。

以上本目ニ記載セルトコロハ楊鴻烈著「中國法律發達史」ニ依ルモノニシテ之ヲ以テ第二次刑法修正案ノ内容ノ如何ナルモノナリヤハ略ホ之ヲ知ルヲ得ヘキナリ。

第三目 法權調査委員ノ調査

二五二

民國創設以來一時暫行新刑律ノ實施ノ下ニ別ニ日本及ヒ歐米諸國ノ刑法ヲ參酌セル新式刑法ノ制定事業ニ努力シ、漸クニシテ第二次刑法修正案ヲ得ルニ至リタル經過ハ右ニ述ヘタルカ如キモノナリシカ、偶々民國十五年（西曆一九二六年）列國法權委員カ華盛頓會議（西曆一九二二年）ノ決議ニ基キ、支那ノ法制並ニ司法制度ノ實情ヲ實地調査スルコトトナリタルヤ、此暫行新刑律及ヒ第二次刑法修正案ハ同委員等ノ爲メニ最モ忠實ナル調査ト批判ヲ受ケタルモノニシテ、右民國十五年同委員等ノ名ニ於テ發表シタル報告書ニ依レハ「暫行新刑律ノ欠點多キモノナルハ説明ノ要ナキモ、第二次刑法修正案ハ法理的ニシテ且精確ナル規定ヲ設ケ、殊ニ第四十一條（現行法第四十九條）ハ刑ノ量定ニ關シテ一層屈伸性ニ富メル規定ヲ設ケ、又第六十二條（現行法第七十六條）ハ刑ノ酌量上裁判官トシテ注意スヘキ情狀ヲ列舉スル等、何レモ法權委員カ其會議中屢々暫行新刑律ノ欠點ナリトシテ論評シタルモノノ大部分ヲ修正シタルモノ」トセリ、サレハ國民政府當局ハ本法ニ付テハ最モ得意ナリ。

第四目 中華民國刑法ノ公布及ヒ施行

民國十四年七月一日以來廣東ニ於テ設立セラレタル國民政府カ民國十六年四月十八日ヨリ南京ニ移

リテ其國都ヲ此處ニ定ムルヤ、一時兵馬匆忙ヲ極メタリト雖モ、既ニ清末以來幾度トナク精鍊セラレタル右第二次刑法修正案ハ法權委員ノ批判ヲ受ケタルコト右ノ如クナリシヲ以テ、今ヤ之ヲ正式ニ新中華民國ノ新刑法トシテ公布實施スルニ熟シタルモノトイフヲ憚カラサリシカ故ニ、從來ヨリ爭議上ノ懸案タリシ三四ノ點ニ對シテ最後ノ修正ヲ加ヘタル上ニテ之ヲ決行スルコトトナリシナリ、其果シテ如何ナル點ニ修正ヲ加ヘシヤハ第二次刑法修正案其モノノ公布ナキカ故ニ正確ニ之ヲ述フルヲ得サルモ、（イ）「侵害大總統罪」ノ刪除、（ロ）無夫ノ婦女ノ和姦ハ原則トシテ之ヲ罪スルコトナク、唯十六才未滿ノ女子ノ姦淫ハ總テ之ヲ強姦罪トシテ論スヘキコト、（ハ）「妨害宗教罪」ナル抽象的ニシテ、且總括的ナル罪名ヲ廢シテ祀典冒瀆及ヒ墳墓、屍體ノ侵害等直接ニ、名ニ依リテ實ヲ示スヘキ罪名ヲ用ユルニ復歸シタルコト、（ニ）「妨害商務罪」ハ其名ノ狹キニ失スルカ故ニ農工商ヲ妨害スル罪ト改メタルコトノ如キカ其重ナルモノナリシナラン。

斯クテ同案ハ民國十七年三月十日國民政府之ヲ公布シ同年九月一日ヨリ實施スルコトトナリタルモノニシテ、次テ同年六月九日中華民國刑法施行條例十一條ヲ公布シ是亦同法ト同シク同年九月一日ヨリ施行セラルルコトトナリタリ。

以上述フルカ如クニシテ唐虞夏殷ヲ經テ周代周禮ノ制定ニ依リテ確認セラレタル支那ノ刑律上ノ基礎觀念ニシテ、前後四千年間世々代々支那民族ノ間ニ傳統セラレタルモノハ、茲ニ歐洲ニ發達シタル全然別個ノ法系ニ屬スル刑事觀念ト混和セラレテ漸ク其形影ノ薄キヲ致セルハ世界ノ大勢上眞ニ止ムヲ得サルモノトイフヘキナリ、唯法ヲ新タニスルハ易ク吏ヲ新タニスルハ難シ、況ンヤ民ヲ新タニスルニ於テオヤ、第二ノ白居易ヲシテ革命支那ノ法有テ革命ノ吏ナク民ナキヲ嘆スルコトナカラシメンコトヲ期セサルヘカラサルナリ。

中華民國刑法

民國十七年三月十日國民政府公布

第一編 總 則 (總則)

第一章 法 例 (法例)

第一條 行爲ノ時ノ法律ニ刑罰ヲ科スヘキ明文ナキトキハ其行爲ハ罪ト爲ラ
ス

(原文) 行爲時之法律無明文科以刑罰者其行爲不爲罪。

第二條 犯罪ノ時ノ法律力裁判ノ時ノ法律ト異ナルトキハ裁判ノ時ノ法律ニ
依リテ處斷ス但犯罪ノ時ノ法律ノ刑力輕キトキハ輕キ刑ヲ適用ス

(原文) 犯罪時之法律與裁判時之法律遇有變更者依裁判時之法律處斷但犯罪時法律之刑較輕者適用較輕之刑。

第三條 本法ハ民國領域内ニ於テ罪ヲ犯シタル者ニ之ヲ適用ス

本法ハ民國領域外ニ在ル民國ノ船艦内ニ於テ罪ヲ犯シタル者ニ亦之ヲ適用ス

(原文)

本法於凡在民國領域内犯罪者適用之。

本法於凡在民國領域外之民國船艦内犯罪者亦適用之。

第四條

犯罪行為カ民國領域内ニ於テ行ハレ其結果カ民國領域外ニ於テ生シタルトキ又ハ犯罪行為カ民國領域外ニ於テ行ハレ其結果カ民國領域内ニ於テ生シタルトキハ民國領域内ニ於ケル犯罪ヲ以テ論ス

(原文)

犯罪之行為在民國領域内而其結果在民國領域外或犯罪之行為在民國領域外而其結果在民國領域内者以在民國領域内犯罪論。

第五條

本法ハ民國領域外ニ於テ左ニ掲ケタル罪ヲ犯シタル者ニ之ヲ適用ス

一 第三百三條乃至第三百六條ノ内亂ノ罪

二 第一百七條乃至第二百一十條ノ外患ノ罪

三 第二百一十一條乃至第二百一十七條ノ貨幣偽造ノ罪

四 第二百二十五條乃至第二百二十七條、第二百三十一條、第二百三十三條及ヒ第二百三十五條乃至第二百三十七條ノ文書及ヒ印章偽造ノ罪

五 第三百五十二條及ヒ第三百五十三條ノ海賊ノ罪

(原文)

本法於凡在民國領域外犯左列各罪者適用之。

一 第一百零三條至第一百零六條之内亂罪。

二 第一百零七條至第一百二十條之外患罪。

三 第二百一十一條至第二百一十七條之偽造貨幣罪。

四 第二百二十五條至第二百二十七條、第二百三十一條、第二百三十三條及第二百三十五條之偽造文書印文罪。

五 第三百五十二條及第三百五十三條之海盜罪。

第六條

本法ハ民國公務員ニシテ民國領域外ニ於テ左ニ掲ケタル罪ヲ犯シタ

ル者ニ之ヲ適用ス

二五八

- 一 第二百二十八條、第二百二十九條、第三百一十一條、第三百三十三條、第三百三十五條、第三百三十六條、第三百三十九條及ヒ第四百十條ノ瀆職ノ罪
- 二 第一百七十二條ノ逃走ノ罪
- 三 第二百三十條ノ文書偽造ノ罪

(原文)

本法於民國公務員在民國領域外犯左列各罪者適用之。

- 一 第一百二十八條第一百二十九條第一百三十一條第一百三十三條第一百三十五條第一百三十六條第一百三十九條及第一百四十條之瀆職罪。
- 二 第一百七十二條之脫逃罪。
- 三 第二百三十條之偽造文書罪。

第七條 本法ハ民國人民カ民國領域外ニ於テ前二條以外ノ罪ヲ犯シ左ニ掲ケタル情狀ヲ具備セル場合ニ之ヲ適用ス

- 一 犯罪ニ對スル最モ輕キ本刑カ有期徒刑以上ナル場合

二 犯罪地ノ法律カ罪ト爲セル場合

三 犯人カ外國ニ於テ未タ無罪ノ確定裁判ヲ受ケス又ハ既ニ有罪ノ確定裁判ヲ受ケタリト雖モ未タ其刑ノ執行ヲ終ラス若クハ免除ヲ得サル

場合

前項ノ規定ハ民國領域外ニ於テ民國人民ニ對シテ罪ヲ犯シタル外國人ニ之ヲ準用ス

(原文)

本法於民國人民在民國領域外犯前二條以外之罪具備左列情形者適用之。

- 一 所犯之罪其最輕本刑爲有期徒刑以上者。
 - 二 犯罪地之法律以爲罪者。
 - 三 犯人在外國未受無罪之確定裁判或雖受有罪之確定裁判而其刑未經執行完畢或免除者。
- 前項之規定於在民國領域外對民國人民犯罪之外國人準用之

第八條 前條ニ規定シタル場合ヲ除キ同一行爲ニ付キ外國ニ於テ確定裁判ヲ受ケタルトキト雖モ仍ホ本法ニ依リテ處罰スルコトヲ得但外國ニ於テ既ニ

二五九

刑ノ執行ヲ受ケ又ハ免除ヲ得タルトキハ本法ノ刑ヲ減輕又ハ免除ス

(原文) 除前條之規定外同一行為雖經外國確定裁判仍得依本法處罰但在外國已受刑之執行或應免除者減輕或免除本法之刑。

第九條 本法ノ總則ハ他ノ法令ニ於テ刑ヲ定メタルトキト雖モ亦之ヲ適用ス但特別ノ規定アルトキハ此限ニ在ラス

(原文) 本法總則於其他法令之定有刑名者亦適用之但有特別規定者不在此限。

第二章 文 例 (文例)

第十條 以上、以下、以內ト稱スル場合ニハ本數又ハ本刑ヲ合セテ計算ス

(原文) 稱以上以下以內者俱連本數或本刑計算。

第十一條 親屬ト稱スルハ左ニ掲ケタル者ヲ謂フ

- 一 夫妻
- 二 四親等内ノ宗親

- 三 三親等内ノ外親
- 四 二親等内ノ姻族

(原文) 稱親屬者謂左列各親。

- 一 夫妻。
- 二 四親等内之宗親。
- 三 三親等内之外親。
- 四 二親等内之妻親。

第十二條 自己ノ出ツルトコロ又ハ自己ヨリ出ツルトコロノ者ヲ直系親トシ直系親ニ非スシテ自己又ハ妻ト同源ノ祖若クハ父ヨリ出ツル者ヲ傍系親トス

(原文) 己身所從出或從己身所出者爲直系親非直系親而與己身或妻出於同源之祖若父者爲旁系親。

第十三條 親等ノ計算ハ直系親ハ自己ヨリ數ヘ上下一世ヲ以テ一親等トシ傍系親ハ自己又ハ妻ヨリ數ヘテ同源ノ祖若クハ父ニ至ル世數ト其指ストコロ

ノ親屬ヨリ數ヘテ同源ノ祖若クハ父ニ至ル世數ト相同シキトキハ一方ノ世數ニ依リテ之ヲ定メ相同シカラサルトキハ其多キ世數ニ依リテ之ヲ定ム

(原文) 親等之計算直系親從己身上下數以一世爲一親等旁系親從己身或妻數至同源之祖若父並從所指之親屬數至同源之祖若父其世數相同者以一方之世數定之世數不相同者從其多者定之

第十四條 直系尊親屬ト稱スルハ左ニ掲ケタル親屬ヲ謂フ

- 一 父母
- 二 祖父母、曾祖父母、高祖父母及ヒ高祖以上ノ祖父母
- 三 外祖父母

養子ノ血族直系尊親屬ハ仍ホ直系尊親屬ヲ以テ論ス

(原文) 稱直系尊親屬者謂左列各親。

- 一 父母。
- 二 祖父母曾祖父母高祖父母及高祖以上祖父母。
- 三 外祖父母。

爲人後者於本生直系尊親屬仍以直系尊親屬論。

第十五條 傍系尊親屬ト稱スルハ左ニ掲ケタル親屬ヲ謂フ

- 一 同腹ノ伯祖父母叔祖父母、同腹ノ伯父母叔父母及ヒ同腹未婚ノ伯叔母
- 二 母ト同腹ノ兄弟姊妹
- 三 同腹ノ兄及ヒ同腹未婚ノ姉

(原文) 稱旁系尊親屬者謂左列各親。

- 一 胞伯叔祖父母胞伯叔父母及在室胞姑。
- 二 母之胞兄弟姊妹。
- 三 胞兄及在室胞姉。

第十六條 妻ノ父母及ヒ祖父母ハ傍系尊親屬ヲ以テ論ス

夫ノ父母及ヒ祖父母亦同シ

(原文) 夫於妻之父母及祖父母以旁系尊親屬論。

妻於夫之父母及祖父母同。

第十七條 公務員ト稱スルハ職官、吏員其他法令ニ依リテ公務ニ從事スル議員及ヒ職員ヲ謂フ

(原文)

稱公務員者謂職官吏員及其他依法令從事於公務之議員及職員。

第十八條 公署ト稱スルハ公務員ノ職務ヲ執行スル場所ヲ謂フ

(原文)

稱公署者謂公務員執行職務之處所。

第十九條 公文書ト稱スルハ公務員力職務上作製シタル文書ヲ謂フ

(原文)

稱公文書者謂公務員職務上制作之文書。

第二十條 重傷ト稱スルハ左ニ掲ケタル傷害ヲ謂フ

- 一 一眼或ハ兩眼ノ視力ノ毀敗
- 二 一耳又ハ兩耳ノ聽力ノ毀敗
- 三 語能ノ毀敗

四 一肢以上ノ機能ノ毀敗

五 身體上又ハ健康上重大不治ノ傷害

六 容貌ノ變更及ヒ重大不治ノ傷害

七 生殖器ノ毀敗

(原文)

稱重傷者謂左列傷害。

- 一 毀敗一目或二目之視能。
- 二 毀敗一耳或二耳之聽能。
- 三 毀敗語能。
- 四 毀敗一肢以上之機能。
- 五 於身體或健康有重大不治之傷害。
- 六 變更容貌且有重大不治之傷害。
- 七 毀敗陰陽。

第三章 期間計算 (時例)

第二十一條 期間カ日ヲ以テ計算スルトキハ二十四時間ヲ一日トシ月又ハ年ヲ以テ計算スルトキハ曆ニ從フ

期間カ分數ヲ以テ計算スルトキハ一月ハ三十日トシ一年ハ十二月トス

(原文) 時期以日計者四二十四小時以月或年計者從曆。

時期以若干分之數計算者一月爲三十日一年爲十二月。

第二十二條 期間ノ初日ハ時刻ニ拘ラス一日ヲ以テ論シ最終日ハ全日ヲ閱スルヲ要ス

刑囚ノ放免ハ刑期滿了ノ翌日午前之ヲ行フ

(原文) 時期之初日不計時刻以一日論最終之日須閱全日。

放免囚犯於期滿之次日午前行之。

第二十三條 刑期ハ裁判確定ノ日ヨリ起算ス

裁判確定ノ後ト雖モ拘禁セラレサル日數ハ刑期ニ算入セス

(原文) 刑期自裁判確定之日起算。

裁判雖經確定其尙未受拘禁之日數不算入刑期內。

第四章 刑事責任及ヒ刑ノ減免 (刑事責任及刑之減免)

第二十四條 故意ニ非サル行爲ハ之ヲ罰セス

(原文) 非故意之行爲不罰。

第二十五條 過失ニシテ處罰スヘキモノハ特別ノ規定アル場合ニ限ル

(原文) 過失應處罰者以有特別規定者爲限。

第二十六條 犯人カ犯罪構成ノ事實ヲ明知シ並ニ之ヲ發生セシムル意思ヲ有シタルトキハ故意トス

犯人カ犯罪構成ノ事實ニ付キ其發生ヲ豫見シ並ニ其發生力犯人ノ本意ニ違背セサルトキハ故意ヲ以テ論ス

(原文)

犯人對於構成犯罪之事實明知並有意使其發生者爲故意。

犯人對於構成犯罪之事實雖見其發生而其發生並不違背犯人本意者以故意論。

第二十七條

犯人カ故意ニ非スト雖モ其情況ニ按シ注意スヘク且注意シ得タルニ拘ラス注意セサリシトキハ過失トス

犯人カ犯罪構成ノ事實ニ付キ其發生ノ可能ナルコトヲ豫見シタリト雖モ其發生セサルコトヲ確信シタルトキハ過失ヲ以テ論ス

(原文)

犯人雖非故意但其情節應注意並能注意而不注意者爲過失。

犯人對於構成犯罪之事實雖雖見其能發生而確信其不發生者以過失論。

第二十八條

法令ヲ知ラサルニ因リテ刑事責任ヲ免除スルコトヲ得ス但情狀ニ因リ本刑ノ二分ノ一ヲ減輕スルコトヲ得

(原文)

不得因不知法令而免除刑事責任但因其情節得減輕本刑二分之一。

第二十九條

犯罪カ一定ノ結果ヲ發生スルニ因リテ其刑ヲ加重セララルル場合ニ於テ若シ犯人カ其發生ヲ豫見スルコト能ハサリシトキハ重キニ從テ處斷

スルコトヲ得ス

(原文)

犯罪因發生一定之結果而加重其刑者若犯人不能豫見其發生時不得從重處斷。

第三十條

十三歳未滿ノ者ノ行爲ハ之ヲ罰セス但其情狀ニ因リ感化教育ヲ施シ又ハ其監護人若クハ保佐人ヲシテ相當ノ保證金ヲ納付セシメ一年以上三年以下ノ期間内其品行ヲ監督セシムルコトヲ得

十三歳以上十六歳未滿ノ者ノ行爲ハ本刑ノ二分ノ一ヲ減輕スルコトヲ得但本刑ヲ減輕シタル場合ニ於テモ其情狀ニ因リ感化教育ヲ施シ又ハ其監護人若クハ保佐人ヲシテ相當ノ保證金ヲ納付セシメ一年以上三年以下ノ期間内其品行ヲ監督セシムルコトヲ得

八十歳以上ノ者ノ行爲ハ本刑ノ二分ノ一ヲ減輕スルコトヲ得

(原文)

未滿十三歳人之行爲不罰但因其情節得施以感化教育或令其監護人保佐人繳納相當之保證金於一年以上三年以下之期間内監督其品行。

十三歳以上未滿十六歳人之行爲得減輕本刑二分之一但減輕本刑者因其情節得施以感化教育或令其監護人保佐人繳納相當之保證金於一年以上三年以下之期間內監督其品行。
滿八十歳人之行爲得減輕本刑二分之一。

第三十一條 心神喪失者ノ行爲ハ之ヲ罰セス但其情狀ニ因リ監禁處分ヲ施スコトヲ得

心神耗弱者ノ行爲ハ本刑ヲ減輕ス但其情狀ニ因リ執行ノ完了又ハ免除ノ後ニ於テ監禁處分ヲ施スコトヲ得

(原文)

心神喪失人之行爲不罰但因其情節得施以監禁處分。

心神耗弱人之行爲減輕本刑但因其情節得於執行完畢或免除後施以監禁處分。

第三十二條 酒亂ニ因リテ刑事責任ヲ免除スルコトヲ得ス但酒亂力自己ノ意思ニ出テタルニ非サルトキハ本刑ヲ減輕ス

(原文)

不得因酒亂而免除刑事責任但酒亂非出於己意者減輕本刑。

第三十三條 瘖啞者ノ行爲ハ本刑ヲ減輕ス

(原文)

瘖啞人之行爲減輕本刑。

第三十四條 法令ニ依ル行爲又ハ正當ナル業務上ノ合法行爲ハ之ヲ罰セス

(原文)

依法令之行爲或正當業務之合法行爲不罰。

第三十五條 所屬上級公務員ノ命令ニ依ル職務上ノ行爲ハ之ヲ罰セス

(原文)

依所屬上級公務員命令之職務上行爲不罰。

第三十六條 現在不法ノ侵害ニ對シテ自己又ハ他人ノ權利ヲ防衛スルニ出テタル行爲ハ之ヲ罰セス但防衛行爲力過當ナリシトキハ本刑ヲ減輕又ハ免除スルコトヲ得

(原文)

對於現在不法之侵害而出於防衛自己或他人權利之行爲不罰但防衛行爲過當者得減輕或免除本刑。

第三十七條 自己又ハ他人ノ生命、身體、自由若クハ財産ニ對スル緊急ノ危難ヲ救護センカ爲メニ已ムコトヲ得サルニ出テタル行爲ハ之ヲ罰セス但救護行爲力過當ナリシトキハ本刑ヲ減輕又ハ免除スルコトヲ得

前項ノ自己ノ救護ニ關スル規定ハ公務上又ハ業務上特別ノ義務アル者ニハ之ヲ適用セス

(原文)

因救護自己或他人生命身體自由財產之緊急危險而出於不得已之行為不罰但救護行為適當者得減輕或免除本刑。

前項關於救護自己之規定於公務上或業務上有特別義務者不適用之。

第三十八條 未タ發覺セサル罪ニ付キ當該管轄公務員ニ自首シテ裁判ヲ受ケタル者ハ自首シタル罪ニ關スル刑ノ三分ノ一ヲ減スルコトヲ得
被害者、告訴人又ハ請求權ヲ有スル者ニ自首シテ當該管轄公務員ノ裁判ヲ受ケタル者亦同シ

(原文)

對於未發覺之罪自首於該管公務員受裁判者得減所首罪之刑三分之一。

向被害者告訴人或請求權之人自首而受該管公務員裁判者亦同。

第五章 未遂罪 (未遂罪)

第三十九條 既ニ犯罪ノ實行ニ着手シタルモ之ヲ遂ケサル者ハ未遂罪トス其犯罪ノ結果ヲ發生スルコト能ハサリシトキ亦同シ
未遂罪ノ處罰ハ特別ノ規定アル場合ニ限ル

(原文)

已着手於犯罪之實行而不遂者爲未遂罪其不能發生犯罪之結果者亦同。

未遂罪之處罰以有特別規定者爲限。

第四十條 未遂罪ノ刑ハ既遂罪ノ刑ノ二分ノ一ヲ減スルコトヲ得但犯罪ノ方法カ到底犯罪ノ結果ヲ發生スルコト能ハサリシトキハ本刑ヲ減輕又ハ免除スルコトヲ得

(原文)

未遂罪之刑得減既遂罪之刑二分之一但犯罪之方法決不能發生犯罪之結果者得減輕或免除本刑。

第四十一條 既ニ犯罪ノ實行ニ着手シタルモ自己ノ意思ニ因リテ之ヲ中止シタルトキハ本刑ヲ減輕又ハ免除ス

(原文)

已着手於犯罪之實行而因已意中止者減輕或免除本刑。

第六章 共犯 (共犯)

第四十二條 二人以上共同シテ犯罪ヲ實行シタル者ハ皆正犯トス

(原文) 二人以上共同實施犯罪之行為者皆爲正犯。

第四十三條 他人ヲ教唆シテ犯罪ヲ實行セシメタル者ハ教唆犯トス教唆犯ヲ教唆シタル者亦同シ

教唆犯ハ正犯ノ刑ニ處ス

(原文) 教唆他人使之實施犯罪之行為者爲教唆犯教唆犯者亦同。

教唆犯處以正犯之刑。

第四十四條 正犯ヲ幫助シタル者ハ從犯トス

從犯ヲ教唆シタル者ハ從犯ヲ以テ論ス

從犯ノ刑ハ正犯ノ刑ノ二分ノ一ヲ減ス但犯罪ノ實行ニ際シ直接且重要ナル

幫助ヲ爲シタル者ハ正犯ノ刑ニ處ス

(原文) 幫助正犯者爲從犯。

教唆從犯者以從犯論。

從犯之刑減正犯之刑二分之一但於實施犯罪行為之際爲直接及重要之幫助者處以正犯之刑

第四十五條 身分ニ因リ構成スヘキ犯罪ヲ共同シテ實行シ又ハ教唆若クハ幫

助シタル者ハ其身分ナキ者ト雖モ仍ホ共犯ヲ以テ論ス

身分ニ因リ刑ノ輕重又ハ免除アルトキハ其身分ナキ者ニハ仍ホ通常ノ刑ヲ科ス

(原文) 因身分成立之罪其共同實施或教唆幫助者雖無身分仍以共犯論。

因身分致刑有重輕或免除者其無身分之人仍科通常之刑。

第四十六條 正犯ノ情ヲ知リテ正犯ヲ幫助シタル者ハ正犯力共同ノ事實ヲ知ラサリシ場合ト雖モ仍ホ從犯ヲ以テ論ス

(原文) 知正犯之情而幫助正犯者雖正犯不知共同之情仍以從犯論。

第四十七條 二人以上過失罪ニ付キ共同過失アルトキハ皆過失正犯トス

(原文) 二人以上於過失罪有共同過失者皆爲過失正犯。

第七章 刑 (刑名)

第四十八條 刑ハ主刑及ヒ從刑トス

(原文) 刑分爲主刑及從刑。

第四十九條 主刑ノ種類左ノ如シ

- 一 死刑
- 二 無期徒刑
- 三 有期徒刑 二月以上十五年以下トス但之ヲ加減スル場合ニ於テハ減シテ二月未滿トシ又ハ加ヘテ二十年ニ至ルコトヲ得
- 四 拘役 一日以上二月未滿トス但之ヲ加重スル場合ニ於テハ二月以上

ニ至ルコトヲ得

五 罰金 一元以上トス但犯人ノ貧困ニ因リ五分ノ一二減スルコトヲ得

(原文) 主刑之種類如左。

- 一 死刑。
- 二 無期徒刑。
- 三 有期徒刑 二月以上十五年以下但遇有加減時得減至二月未滿或加至二十年。
- 四 拘役 一日以上二月未滿但遇有加重時得加至二月以上。
- 五 罰金 一元以上但囚犯貧得減至五分之一。

第五十條 從刑ノ種類左ノ如シ

- 一、公權褫奪
- 二、沒收

(原文) 從刑之種類如左。

- 一、褫奪公權。

第五十一條 主刑ノ輕重ハ第四十九條ニ規定セル順序ニ依リテ之ヲ定ム
 同シク死刑又ハ無期徒刑ニ該ル者ハ犯罪ノ情狀ニ依リテ其輕重ヲ定ム
 同種ノ刑ハ最高度ノ長キモノ又ハ多キモノヲ以テ重シトシ最高度ノ等シキ
 トキハ最低度ノ長キモノ又ハ多キモノヲ以テ重シトス
 最高度及ヒ最低度共ニ等シキトキハ犯罪ノ情狀ニ依リテ其輕重ヲ定ム

(原文)

主刑之重輕依第四十九條規定之次序定之。

同爲死刑或無期徒刑者據犯罪情節定其重輕。

同種之刑以最高度之較長或較多者爲重最高度相等者以最低度之較長或較多者爲重。

最高度與最低度俱等者據犯罪情節定其重輕。

第五十二條 第八條ニ依リテ主刑ヲ免除シタルトキハ公權褫奪ヲ專科スルコ
 トヲ得
 主刑ヲ免除シタルトキハ沒收ヲ專科スルコトヲ得

(原文)

依第八條免除主刑者得專科褫奪公權。

免除主刑者得專科沒收。

第五十三條 死刑ハ絞首シ監獄内ニ於テ之ヲ執行ス
 死刑ハ司法部ノ准許ヲ經ルニ非サレハ執行スルコトヲ得ス

(原文)

死刑用絞於監獄内執行之。

死刑非經司法部覆准不得執行。

第五十四條 徒刑及ヒ拘役ノ刑囚ハ監獄内ニ之ヲ拘禁ス
 徒刑及ヒ拘役ノ刑囚ハ勞役ニ服セシム但其情狀ニ因リ勞役ヲ免スルコトヲ得

(原文)

徒刑及拘役之囚犯於監獄内拘禁之。

徒刑及拘役之囚犯令服勞役但得因其情節免服勞役。

第五十五條 罰金ハ裁判確定後一月以内ニ之ヲ完納セシム
 滿期ニ至ルモ罰金ヲ完納セサルトキハ強制執行シ尙ホ完納セサルトキハ之
 ニ易ヘテ監禁ヲ科ス

罰金ニ易ヘテ監禁ヲ科スルニハ一元以上三元以下ヲ以テ一日ニ換算ス但犯人ノ貧困ニ因リ罰金ヲ減シタルトキハ其減殘額ニ比例シテ計算スヘシハ
罰金ヲ科スル裁判ハ前項ノ規定ニ依リ一日ニ換算スヘキ金額ヲ明記スヘシ
但監禁ノ期間ハ一年ヲ超ユルコトヲ得ス

完納期間内本人ノ承諾ヲ經タルトキハ罰金ニ易ヘテ監禁ヲ科シ即時ニ執行スルコトヲ得

罰金ニ易ヘテ科シタル監禁ハ監獄内ニ附設セル監禁所ニ於テ之ヲ執行シ勞役ニ服セシムルコトヲ得

罰金ニ易ヘテ科シタル監禁期間内ニ罰金ヲ納付シタルトキハ其納付金額ヲ裁判ノ定メタル標準ニ依リ換算シテ監禁日數ヲ控除ス

罰金總額カ一年ノ日數ヲ超ユルトキハ罰金總額ト一年ノ日數トヲ比例シテ

換算ス

罰金ニ易ヘテ監禁ヲ科スル場合ニ於テ一日ニ滿タサル端數ハ之ヲ計上セス

(原文)

罰金於裁判確定後令一月以内完納之。

期滿而不完納者強制執行其未完納者易科監禁。

易科監禁以一元以上三元以下折算一日但因犯貧而減罰金者應以減得之數比例計算。

科罰金之裁判應依前項之規定載明折算一日之額數但監禁期限不得逾一年。

完納期內經本人之承諾者得易科監禁即時執行。

易科監禁於監獄內附設之監禁所執行之得令服勞役。

易科監禁期內納罰金者以所納之數依裁判所定之標準折算扣除監禁日期。

罰金總額逾一年之日數者以罰金總額與一年之日數比例折算。

易科監禁不滿一日之零數不算。

第五十六條 公權褫奪ハ左ニ掲ケタル資格ヲ褫奪ス

- 一 公務員タルヘキ資格
- 二 法律ニ定メタル中央及ヒ地方ノ選舉ニ於テ選舉人及ヒ被選舉人タル

へキ資格

- 三 軍籍ニ入ルヘキ資格
- 四 官立公立學校ノ職員又ハ教員タルヘキ資格
- 五 辯護士タルヘキ資格

(原文)

褫奪公權者褫奪左列資格。

- 一 爲公務員之資格。
- 二 依法律所定之中央及地方選舉爲選舉人及被選舉人之資格。
- 三 入軍籍之資格。
- 四 爲官立公立學校職員教員之資格。
- 五 爲律師之資格。

第五十七條 公權褫奪ハ無期及ヒ有期トス

有期ノ公權褫奪ハ一年以上十五年以下ヲ以テ限トス
死刑又ハ無期徒刑ヲ宣告スルトキハ其公權褫奪ハ無期トス

十年以上ノ有期徒刑ヲ宣告スルトキハ其公權褫奪ハ無期又ハ有期トス
六月以上十年未滿ノ有期徒刑ヲ宣告スルトキハ其公權褫奪ハ十年ヲ超ユル
コトヲ得ス

(原文)

褫奪公權分爲無期及有期。

有期褫奪公權以一年以上十五年以下爲限。

宣告死刑或無期徒刑者其褫奪公權爲無期。

宣告十年以上有期徒刑者其褫奪公權爲無期或有期。

宣告六月以上十年未滿有期徒刑者其褫奪公權不得逾十年。

第五十八條 六月未滿ノ有期徒刑又ハ拘役若クハ罰金ヲ宣告スルトキハ公權
ヲ褫奪スルコトヲ得ス

過失ニ因リテ罪ヲ犯シタルトキハ公權ヲ褫奪スルコトヲ得ス

(原文)

宣告六月未滿有期徒刑或罰金者不得褫奪公權。

因過失犯罪者不得褫奪公權。

第五十九條 公權褫奪ハ裁判ノ時併セテ之ヲ宣告ス

公權褫奪ハ裁判確定ノ時效力ヲ生ス但有期ノ公權褫奪ノ期間ハ主刑ノ執行ヲ終リ又ハ其免除アリタル日ヨリ之ヲ起算ス

(原文)

褫奪公權於裁判時併宣告之。

褫奪公權於裁判確定時發生效力但有期褫奪公權之期限自主刑執行完畢或免除之日起算。

第六十條 沒收スル物件左ノ如シ

- 一 禁令ニ違背スル物
- 二 犯罪ノ使用又ハ其豫備ニ供シタル物
- 三 犯罪ニ因リテ取得シタル物

(原文)

沒收之物如左。

- 一 違禁物。
- 二 供犯罪所用及犯罪豫備之物。
- 三 因犯罪所得之物。

第六十一條 前條第一號ノ物ニ付テハ沒收ヲ專科スルコトヲ得

(原文)

前條第一款之物得專科沒收

第六十二條 第六十條第一號ノ物ハ犯人ニ屬スルト否トヲ問ハス之ヲ沒收シ

第二號及ヒ第三號ノ物ハ犯人ニ屬スルトキニ限り之ヲ沒收スルコトヲ得
最モ重キ本刑力拘役又ハ罰金ナルトキハ特別ノ規定アルニ非サレハ沒收ス
ルコトヲ得ス但第六十條第一號ノ物ハ此限ニ在ラス

(原文)

第六十條第一款之物不問屬於犯人與否沒收之第二款第三款之物以屬於犯人者爲限得沒收之。

最重本刑爲拘役或罰金者非有特別之規定不得沒收但第六十條第一款之物不在此限。

第六十三條 沒收ハ裁判ノ時併セテ之ヲ宣告ス

(原文)

沒收於裁判時併宣告之。

第六十四條 裁判確定前ノ勾留日數ハ二日ヲ以テ有期徒刑又ハ拘役ノ一日ニ

當テ若クハ一日ヲ以テ第五十五條第七項ニ規定セル裁判ノ定メタル罰金額
ニ當ツ

(原文) 裁判確定前羈押之日數得以二日抵有期徒刑或拘役一日或以一日抵第五十五條第七項裁判所定之罰金額數。

第八章 累犯 (累犯)

第六十五條 有期徒刑ノ執行ヲ受ケテ之ヲ終リ又ハ無期徒刑若クハ有期徒刑ノ一部ノ執行ヲ受ケテ免除セラレタル後五年内ニ再ヒ有期徒刑以上ノ罪ヲ犯シタルトキハ之ヲ累犯トス

(原文) 受有期徒刑之執行完畢或受無期徒刑或有期徒刑一部之執行而免除後五年内再犯有期徒刑以上之罪者爲累犯。

第六十六條 累犯カ同一ナラサル罪又ハ左ニ掲ケタル同號ナラサル罪一回ナルトキハ本刑ノ三分ノ一ヲ加重シ二回以上ナルトキハ本刑ノ二分ノ一ヲ加重ス

累犯カ同一ノ罪又ハ左ニ掲ケタル同號ノ罪一回ナルトキハ本刑ノ二分ノ一

ヲ加重シ二回以上ナルトキハ本刑ノ一倍ヲ加重ス

- 一 内亂ノ罪、外患ノ罪、國交ヲ妨害スル罪
- 二 瀆職ノ罪、公務ヲ妨害スル罪、選舉ヲ妨害スル罪、秩序ヲ妨害スル罪

三 逃走ノ罪、犯人藏匿及ヒ證據湮滅ノ罪、偽證及ヒ誣告ノ罪

四 公共ノ危險ニ關スル罪

五 貨幣偽造ノ罪、度量衡偽造ノ罪、文書及ヒ印章偽造ノ罪

六 風化ヲ妨害スル罪、婚姻及ヒ家庭ヲ妨害スル罪

七 祀典冒瀆及ヒ墳墓屍體侵害ノ罪

八 農工商ヲ妨害スル罪

九 阿片ニ關スル罪、賭博ニ關スル罪

十 殺人ノ罪、傷害ノ罪、墮胎ノ罪、遺棄ノ罪

十一 自由ヲ妨害スル罪、名譽及ヒ信用ヲ妨害スル罪、秘密ヲ妨害スル罪

十二 竊盜ノ罪、掠奪、強盜及ヒ海賊ノ罪、横領ノ罪、詐欺及ヒ背任ノ罪、恐嚇ノ罪、贓物ニ關スル罪、毀棄及ヒ損壞ノ罪

(原文)

累犯不同一之罪或左列不同款之罪一次者加重本刑三分之一二次以上者加重本刑二分之一。累犯同一之罪。或左列同款之罪一次者加重本刑二分之一二次以上者加重本刑一倍。

一 内亂罪外患罪妨害國交罪。

二 瀆職罪妨害公務罪妨害選舉罪妨害秩序罪。

三 脫逃罪藏匿犯人及湮滅證據罪偽證及誣告罪。

四 公共危險罪。

五 偽造貨幣罪偽造度量衡罪偽造文書印文罪。

六 妨害風化罪妨害婚姻及家庭罪。

七 褻瀆祀典及侵害墳墓屍體罪。

八 妨害農工商罪。

九 鴉片罪賭博罪。

十 殺人罪傷害罪墮胎罪遺棄罪。

十一 妨害自由罪妨害名譽及信用罪妨害秘密罪。

十二 竊盜罪搶奪強盜及海盜罪侵占罪詐欺及背信罪恐嚇罪贓物罪毀棄損壞罪。

第六十七條 裁判確定後累犯者タルコトヲ發覺シタルトキハ前條ノ規定ニ依

リテ更ニ其刑ヲ定ム

前項ノ規定ハ執行ヲ終リ又ハ免除シタル後ニ至リテ發覺シタルトキハ之ヲ適用セス

(原文)

裁判確定後發覺爲累犯者依前條之規定更定其刑。前項之規定於執行完畢或免除後發覺者不適用之。

第六十八條 累犯ノ規定ハ前ノ犯罪力軍法ニ依リ又ハ外國ノ裁判所ニ於テ裁

判セラレタルトキハ之ヲ適用セス

(原文)

累犯之規定於前所犯罪依軍法或於外國法院受裁判者不適用之。

第九章 併合論罪 (併合論罪)

第六十九條 裁判宣告前ニ犯シタル數罪ハ併合論罪ス

(原文) 裁判宣告前犯數罪者併合論罪。

第七十條 併合論罪ハ各別ニ各罪ノ刑ヲ宣告シ左ノ例ニ依リ其執行スヘキモノヲ定ム

- 一 宣告セラレタル最重刑カ死刑ナルトキハ他ノ刑ヲ執行セス但從刑ハ此限ニ在ラス
- 二 宣告セラレタル最重刑カ無期徒刑ナルトキハ他ノ刑ヲ執行セス但罰金及ヒ從刑ハ此限ニ在ラス
- 三 多數ノ有期徒刑ヲ宣告シタルトキハ各刑中ノ最長期以上各刑合併ノ刑期以下ニ於テ其刑期ヲ定ム但二十年ヲ超ユルコトヲ得ス

- 四 多數ノ拘役ヲ宣告シタルトキハ前號ノ例ニ依リテ其刑期ヲ定ム
- 五 多數ノ罰金ヲ宣告シタルトキハ各刑中ノ最多額以上各刑合併ノ金額以下ニ於テ其金額ヲ定ム
- 六 多數ノ有期ノ公權褫奪ヲ宣告シタルトキハ其中ノ最長期ノ公權褫奪ノミヲ執行ス
- 七 多數ノ沒收ヲ宣告シタルキハ共ニ之ヲ執行ス
- 八 第三號乃至第六號ニ規定シタル刑ハ共ニ之ヲ執行ス

(原文) 併合論罪分別宣告其罪之刑依左例定其應執行者。

- 一 宣告之最重刑爲死刑者不執行他刑但從刑不在此限。
- 二 宣告之最重刑爲無期徒刑者不執行他刑但罰金及從刑不在此限。
- 三 宣告多數之有期徒刑者於各刑中之最長期以上各刑合併之刑期以下定其刑期但不得逾二十年。
- 四 宣告多數之拘役者依前款之例定其刑期。

- 五 宣告多數之罰金者於各刑中之最多額以上各刑合併之金額以下定其金額。
- 六 宣告多數之有期懲役公權者止執行其中最長期之懲役公權。
- 七 宣告多數之沒收者併執行之。
- 八 依第三款至第六款所定之刑併執行之。

第七十一條 併合論罪ニ於テ既ニ裁判ヲ經タルモノト未タ裁判ヲ經サルモノトアルトキハ未タ裁判ヲ經サル罪ニ付テ處斷ス

(原文) 併合論罪有已經裁判及未經裁判者就未經裁判之罪處斷。

第七十二條 併合論罪ニ於テ二個以上ノ裁判アリタルトキハ第七十條ノ規定ニ依リテ其執行スヘキ刑ヲ定ム

(原文) 併合論罪有二裁判以上者依第七十條之規定定其應執行之刑。

第七十三條 併合論罪力既ニ處斷セラレタルモ若シ各罪中赦免ヲ受ケタルモノアルトキハ餘罪ニ付テハ仍ホ第七十條ノ規定ニ依リ其執行スヘキ刑ヲ定ム但餘罪僅ニ一個ナルトキハ其宣告ノ刑ニ依リテ執行ス。

(原文) 併合論罪已經處斷若各罪中有受赦免者餘罪仍依第七十條之規定定其應執行之刑但僅餘一罪者。依其宣告之刑執行。

第七十四條 一行爲ニシテ數項ノ罪名ニ觸レ又ハ一罪ヲ犯スノ方法若クハ其結果ニシテ他項ノ罪名ニ觸レタルトキハ一ノ重キニ從テ處斷ス

(原文) 一行爲而犯數項罪名或以犯一罪之方法或其結果而犯他項罪名者從一重處斷。

第七十五條 連續シタル數行爲ニシテ同一ノ罪名ニ觸ルルトキハ一罪ヲ以テ論ス

(原文) 連續數行爲而犯同一之罪名者以一罪論。

第十章 刑ノ酌量 (刑之酌量)

第七十六條 科刑ニ際シテハ一切ノ情狀ヲ審酌シテ法定ノ刑内ニ於ケル科刑輕重ノ標準ト爲シ並ニ其情狀ヲ分別シテ左ニ掲ケタル事項ニ注意スヘシ

一 犯罪ノ原因

- 二 犯罪ノ目的
- 三 犯罪ノ時ニ受ケタル刺戟
- 四 犯人ノ心術
- 五 犯人ト被害者トノ平素ノ關係
- 六 犯人ノ品行
- 七 犯人ノ智識ノ程度
- 八 犯罪ノ結果
- 九 犯罪後ノ態度

罰金ヲ科スル場合ニ於テハ併セテ犯人ノ資力ヲ審酌スヘシ

(原文)

科刑時應審酌一切情形爲法定刑內科刑輕重之標準並應分別情形注意左列事項。

- 一 犯罪之原因。
- 二 犯罪之目的。

- 三 犯罪時所受之激刺。
- 四 犯人之心術。
- 五 犯人與被害人平日之關係。
- 六 犯人ノ品行。
- 七 犯人知識之程度。
- 八 犯罪之結果。
- 九 犯罪後之態度。

科罰金時并應審酌犯人之資力。

第七十七條 犯罪ノ情狀憫恕スヘキモノハ本刑ヲ酌減スルコトヲ得

(原文)

犯罪之情狀可憫恕者得酌減本刑。

第七十八條 法令ニ依リ加重又ハ減輕スヘキ場合ニ於テモ仍ホ前條ノ規定ニ依リテ本刑ヲ酌減スルコトヲ得

(原文)

依法令加重或減輕者仍得依前條之規定酌減本刑。

第十一章 加減例 (加減例)

第七十九條 死刑ハ加重スルコトヲ得ス

死刑ノ三分ノ一ヲ減輕スルトキハ無期徒刑トシ二分ノ一ヲ減輕スルトキハ十二年以上二十年以下ノ有期徒刑トス

(原文) 死刑不得加重。

死刑減輕三分之一者爲無期徒刑減輕二分之一者爲十二年以上二十年以下有期徒刑。

第八十條 無期徒刑ハ加重スルコトヲ得ス

無期徒刑ノ三分ノ一ヲ減輕スルトキハ十年以上十五年以下ノ有期徒刑トシ二分ノ一ヲ減輕スルトキハ七年以上十二年以下ノ有期徒刑トス

(原文) 無期徒刑不得加重。

無期徒刑減輕三分之一者爲十年以上十五年以下有期徒刑減輕二分之一者爲七年以上十二年以下有期徒刑。

第八十一條 有期徒刑ヲ加減スヘキトキハ其最高度及ヒ最低度共之ヲ加減ス

(原文) 有期徒刑應加減者其最高度及最低度同加減之。

第八十二條 拘役ヲ加減スヘキトキハ其最高度ノミヲ加減ス

(原文) 拘役應加減者止加減其最高度。

第八十三條 罰金ヲ加減スヘキトキハ其最高度ノミヲ加減ス

(原文) 罰金應加減者止加減其最高度。

第八十四條 本刑ヲ減輕スルニ其若干分數ノ規定ナキトキハ本刑ハ最少其二一分ノ一二至ルマテ之ヲ減輕ス

(原文) 減輕本刑而無若干分之幾之規定者至少減輕本刑二分之一。

第八十五條 二種以上ノ主刑ヲ加減スヘキトキハ各同時ニ之ヲ加減ス

(原文) 有二種以上之主刑應加減者同時併加減之。

第八十六條 同時ニ刑ノ同分數ノ加重及ヒ減輕アルトキハ互ニ相殺ス

同時二刑ノ不同分數ノ加重及ヒ減輕アルトキハ先加後減ス

二九八

(原文)

同時刑有同等分數之加重及減輕者互相抵銷。

同時刑有不等分數之加重及減輕者先加後減。

第八十七條 二種以上ノ加重又ハ減輕スヘキモノアルトキハ之ヲ遞加又ハ遞減ス

(原文)

有二種以上應加或應減者遞減之。

有二種以上不等分數之減輕者先依較少之分數減輕之。

第八十八條 徒刑又ハ拘役力加減ニ因リ一日ニ滿タサル時間ヲ生シタルトキハ之ヲ計上セス

罰金力加減ニ因リ拾錢ニ滿タサル金額ヲ生シタルトキ亦同シ

(原文)

徒刑或拘役因加減有不满一日之時間者不計。

罰金因加減有不满一角之額數者亦同。

第八十九條 從刑ハ加重又ハ減輕スルコトヲ得ス

(原文)

從刑不得加重或減輕。

第十二章 刑ノ執行猶豫 (緩刑)

第九十條 二年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ罰金ノ宣告ヲ受ケタル者左ニ掲ケタル事由ノ一アルトキハ同時ニ二年以上五年以下ノ刑ノ執行猶豫ヲ宣告スルコトヲ得其期間ハ裁判確定ノ日ヨリ之ヲ起算ス

- 一 未タ拘役以上ノ刑ノ宣告ヲ受ケサルコト
- 二 前ニ拘役以上ノ刑ノ宣告ヲ受ケタルモ其執行ヲ終リ又ハ免除ヲ得タル後三年以内未タ拘役以上ノ刑ノ宣告ヲ受ケサルコト

(原文)

受二年以下有期徒刑拘役或罰金之宣告而有左列情形之一者得同時宣告二年以上五年以下之緩刑其期間自裁判確定之日起算。

一 未曾受拘役以上刑之宣告者。

二 前受拘役以上刑之宣告執行完畢或免除後三年以内未曾受拘役以上刑之宣告者。

第九十一條 刑ノ執行猶豫ノ宣告ヲ受ケタル者左ニ掲ケタル場合ノ一ニ該ル

トキハ其宣告ヲ取消ス但過失ニ因リテ罪ヲ犯シタルトキハ此限ニ在ラス

- 一 刑ノ執行猶豫ノ期間内更ニ罪ヲ犯シ有期徒刑以上ノ刑ノ宣告ヲ受ケタルトキ

- 二 前條第二號ノ場合ヲ除ク外刑ノ執行猶豫ノ宣告前他ノ犯罪ニ因リ既ニ有期徒刑以上ノ刑ノ宣告ヲ受ケ猶豫期間内ニ始メテ發覺シタルトキ

(原文)

受緩刑之宣告而有左列情形之一者撤銷其宣告但因過失犯罪者不在此限。

- 一 緩刑期内更犯罪受有期徒刑以上刑之宣告者。
- 二 除前條第二款外因緩刑前犯他罪曾受有期徒刑以上刑之宣告在緩刑期内始發覺者。

第九十二條 刑ノ執行猶豫期間滿了シタルモ執行猶豫ノ宣告ノ取消ナキトキハ其刑ノ宣告ハ無效トス

(原文)

緩刑期滿而緩刑之宣告未經撤銷者其刑之宣告爲無效。

第十三章 假出獄 (假釋)

第九十三條 徒刑ノ執行ヲ受ケ改悛ノ實證アルトキハ無期徒刑ニ付テハ十年

有期徒刑ニ付テハ刑期二分ノ一ヲ經過シタル後監獄官ヨリ司法部ニ呈請シ

テ假出獄ヲ許スコトヲ得但有期徒刑ノ執行力未タ二年ニ滿タサルトキハ此限ニ在ラス

前項ノ執行期間ハ第六十四條ノ事由アルトキハ殘餘ノ刑期ヲ以テ計算ス

(原文)

受徒刑之執行而有悛悔實據者無期徒刑逾十年後有期徒刑逾二分之一後由監獄官呈司法部得許假釋出獄但有期徒刑之執行未滿二年者不在此限。

前項執行期間遇有第六十四條情形者以所餘之刑期計算。

第九十四條 假出獄ノ期間内左ニ掲ケタル場合ノ一ニ該ルトキハ其假出獄ヲ取消スコトヲ得

- 一 更ニ罪ヲ犯シ拘役以上ノ刑ノ宣告ヲ受ケタルトキ
 - 二 假出獄取締規則ニ違背シタルトキ
- 假出獄ヲ取消シタルトキハ其出獄ノ日數ハ刑期ニ算入セス

(原文)

假釋期内有左列情形之一者得撤銷其假釋。

- 一 更犯罪受拘役以上刑之宣告者。
- 二 犯假釋管束規則者。

假釋撤銷後其出獄日數不算入刑期内。

第九十五條 假出獄ノ期間内他ノ罪ニ因リ刑ノ執行ヲ受ケタルトキハ其執行ノ期間ハ假出獄ノ期間ニ算入セス

(原文)

假釋期内因他罪受刑之執行者其執行之期間不算入假釋期内。

第九十六條 假出獄期間滿了シタルモ假出獄ノ取消ナキトキハ其未タ執行セラレサル刑期ハ既ニ執行セラレタルモノヲ以テ論ス

(原文)

假釋期滿而未經撤銷假釋者其未執行之刑期以已執行論。

第十四章 時 效 (時 效)

第九十七條 起訴權ハ左ニ掲ケタル期間ヲ經過スルモ之ヲ行使セサルトキハ時効ニ因リテ消滅ス

- 一 死刑、無期徒刑又ハ十年以上ノ有期徒刑ハ二十年
- 二 一年以上十年未滿ノ有期徒刑ハ十年
- 三 一年未滿ノ有期徒刑、拘役又ハ罰金ハ三年

前項ノ期間ハ犯罪成立ノ日ヨリ之ヲ起算ス但第七十五條ノ連續犯罪ハ犯罪最終ノ日ヨリ之ヲ起算ス

(原文)

起訴權逾左列期限而不行使者因時效而消滅。

- 一 死刑無期徒刑或十年以上有期徒刑者二十年。
- 二 一年以上十年未滿有期徒刑者十年。
- 三 一年未滿有期徒刑拘役或罰金者三年。

前項期限自犯罪成立之日起算但第七十五條之連續犯罪自犯罪最終之日起算。

第九十八條 起訴權ノ時効期間ハ本刑ノ最高度ニ依リテ之ヲ計算シ二種以上ノ主刑アルトキハ最モ重キ主刑ノ最高度ニ依リテ之ヲ計算ス

(原文) 起訴權之時効期限據本刑之最高度計算有二種以上之主刑者據最重主刑之最高度計算。

第九十九條 本刑ヲ加重又ハ減輕スヘキ場合ニ於テモ起訴權ノ時効期間ハ仍ホ本刑ニ依リテ之ヲ計算ス

(原文) 本刑應加重或減輕者起訴權之時効期限仍據本刑計算。

第一百條 起訴權ノ時効ハ法令ニ依リ捜査、豫審、起訴又ハ公判ノ手續ヲ開始シ又ハ繼續スルコト能ハサルトキハ之ヲ停止ス

時効停止シタルトキハ停止原因消滅ノ日ヨリ起算シ停止前既ニ經過シタル期間ヲ通算ス

(原文) 起訴權之時効遇有依法令不能開始或繼續偵查預審起訴或審判之程序時停止之。

時効停止自停止原因消滅之日起與停止前已經過之期間一併計算。

第一百一條 執行權ハ左ニ掲ケタル期間ヲ經過スルモ之ヲ行使セサルトキハ時効ニ因リテ消滅ス

一 死刑、無期徒刑又ハ十年以上ノ有期徒刑ハ三十年

二 一年以上十年未滿ノ有期徒刑ハ十五年

三 一年未滿ノ有期徒刑、拘役、罰金又ハ專科ノ沒收ハ五年

前項ノ期間ハ裁判確定ノ日ヨリ之ヲ起算ス

(原文) 行刑權逾在列期限而不行使者因時効而消滅。

一 死刑無期徒刑或十年以上有期徒刑者三十年。

二 一年以上十年未滿有期徒刑者十五年。

三 一年未滿有期徒刑拘役罰金或專科沒收者五年。

前項期限自裁判確定之日起算。

第一百二條 執行權ノ時効ハ法令ニ依リ執行ヲ開始又ハ繼續スルコト能ハサル

トキハ之ヲ停止ス
時効停止シタルトキハ停止原因消滅ノ日ヨリ起算シ停止前既ニ經過シタル
期間ヲ通算ス

(原文)

行刑權之時效。遇有依法令不能開始或繼續執行時停止之。

時効停止自停止原因消滅之日起與停止前已經過之期間一併計算。

第二編 分 則

第一章 内亂ノ罪 (内亂罪)

第三百三條 不法ノ手段ヲ以テ政府ヲ顛覆シ土地ヲ僭竊シ又ハ國憲ヲ紊亂セン
コトヲ意圖シテ其實行ニ着手シタル者ハ内亂ノ罪ト爲シ七年以上ノ有期徒
刑ニ處シ首謀者ハ無期徒刑ニ處ス
本條ノ罪ヲ犯サンコトヲ豫備又ハ陰謀シタル者ハ六月以上五年以下ノ有期

徒刑ニ處ス

(原文)

意圖以非法之方法顛覆政府僭竊土地或紊亂國憲而着手實行者爲内亂罪處七年以上有期徒

刑首謀者處無期徒刑。

預備或陰謀犯本條之罪者處六月以上五年以下有期徒刑。

第四百條 暴動ヲ以テ内亂ノ罪ヲ犯シタル者ハ無期徒刑又ハ七年以上ノ有期
徒刑ニ處シ首謀者ハ死刑又ハ無期徒刑ニ處ス
本條ノ罪ヲ犯サンコトヲ豫備又ハ陰謀シタル者ハ一年以上七年以下ノ有期
徒刑ニ處ス

(原文)

以暴動犯内亂罪者處無期徒刑或七年以上有期徒刑首謀者處死刑或無期徒刑。

預備或陰謀犯本條之罪者處一年以上七年以下有期徒刑。

第四百五條 兵器、彈藥、錢穀ヲ供給シ又ハ其他ノ行爲ヲ以テ前二條ノ罪ヲ幫
助シタル者ハ一年以上七年以下ノ有期徒刑ニ處ス

(原文)

供給軍械彈藥錢穀或以其他行爲幫助前二條之罪者處一年以上七年以下有期徒刑。

第六六條 本章ノ罪ヲ犯シタル者ハ第五十七條及ヒ第五十八條ノ規定ニ依リテ公權ヲ褫奪スルコトヲ得

(原文)

犯本章之罪者得依第五十七條及第五十八條之規定褫奪公權。

第二章 外患ノ罪 (外患罪)

第七七條 外國政府又ハ其派遣者ト通謀シテ該國又ハ其他ノ國ヲシテ民國ニ對シテ戰端ヲ開カシメンコトヲ意圖シタル者ハ死刑又ハ無期徒刑ニ處ス
本條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス
本條ノ罪ヲ犯サンコトヲ豫備又ハ陰謀シタル者ハ一年以上七年以下ノ有期徒刑ニ處ス

(原文)

通謀外國政府或其派遣之人意圖使該國或他國對於民國開戰端者處死刑或無期徒刑。

本條之未遂罪罰之。

預備或陰謀犯本條之罪者處一年以上七年以下有期徒刑。

第八八條 外國政府又ハ其派遣者ト通謀シテ民國ノ領域ヲシテ該國又ハ其他ノ國ニ屬セシメンコトヲ意圖シタル者ハ死刑、無期徒刑又ハ十年以上ノ有期徒刑ニ處ス
本條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス
本條ノ罪ヲ犯サンコトヲ豫備又ハ陰謀シタル者ハ一年以上七年以下ノ有期徒刑ニ處ス

(原文)

通謀外國政府或其派遣之人意圖使民國領域屬於該國或他國者處死刑無期徒刑或十年以上

有期徒刑。

本條之未遂罪罰之。

預備或陰謀犯本條之罪者處一年以上七年以下有期徒刑。

第九九條 民國人民ニシテ敵軍ニ在リテ役務シタル者又ハ敵國ニ與シテ民國若クハ其同盟國ニ抗敵シタル者ハ死刑又ハ無期徒刑ニ處ス
本條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

本條ノ罪ヲ犯サンコトヲ豫備又ハ陰謀シタル者ハ一年以上七年以下ノ有期
徒刑ニ處ス

(原文)

民國人民在敵軍執役或與敵國輔抗民國或其同盟國者處死刑或無期徒刑。

本條之未遂罪罰之。

預備或陰謀犯本條之罪者處一年以上七年以下有期徒刑。

第一百十條

外國ト開戦シ又ハ將ニ開戦セントスル時期ニ於テ軍事上ノ利益ヲ
敵國ニ供シ若クハ軍事上ノ不利益ヲ以テ民國又ハ其同盟國ヲ害シタル者ハ
五年以上十二年以下ノ有期徒刑ニ處ス

本條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

本條ノ罪ヲ犯サンコトヲ豫備又ハ陰謀シタル者ハ三年以上ノ有期徒刑ニ處ス

(原文)

在與外國開戦或將開戦期內以軍事上之利益供敵國或以軍事上之不利益害民國或其同盟國
者處五年以上十二年以下有期徒刑。

本條之未遂罪罰之。

預備或陰謀犯本條之罪者處三年以上有期徒刑。

第一百十一條

前條第一項ノ罪ヲ犯シタル者ニシテ左ニ掲ケタル場合ノ一二該
ルトキハ死刑又ハ無期徒刑ニ處ス

- 一 軍隊ヲ敵國ニ交付シ又ハ要塞、軍港、軍營、軍用艦船其他軍用ノ場
所、建築物、民國ノ軍用ニ供スル兵器彈藥、錢穀其他ノ軍需品並ニ
橋梁、鐵道、電線、電機、電局其他運輸用ノ器物ヲ敵國ニ交付シ又
ハ損壞シ若クハ使用ニ堪ヘサルニ至ラシメタルトキ

- 二 敵國ノ爲メニ軍隊ヲ招募シ又ハ軍人ヲ煽惑シテ降敵セシメタルトキ
- 三 軍人ヲ煽惑シテ職務ヲ執行セシメス又ハ紀律ヲ守ラシメス若クハ之
ヲ逃叛セシメタルトキ

- 四 要塞、軍港、軍營、軍用ノ艦船其他軍用ノ場所、建築物又ハ軍略ニ
關スル秘密ノ文書、圖畫、消息若クハ物品ヲ敵國ニ漏洩又ハ交付シ

タルトキ

三二二

五 敵國ノ間諜ヲ爲シ又ハ敵國ノ間諜ヲ幫助シタルトキ
本條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

本條ノ罪ヲ犯サンコトヲ豫備又ハ陰謀シタル者ハ一年以上七年以下ノ有期
徒刑ニ處ス

(原文)

犯前條第一項之罪而有左列情形之一者處死刑或無期徒刑。

- 一 將軍隊交付敵國或將要塞軍港軍營軍用船艦及其他軍用處所建築物與供民國軍用之軍械彈藥錢糧及其他軍需品或橋梁鐵路電線電機電局及其他供轉運之器物交付敵國或毀壞或致令不堪用者。
- 二 代敵國招募軍隊或煽惑軍人使其降敵者。
- 三 煽惑軍人不執行職務或不守紀律或逃叛者。
- 四 以關於要塞軍港軍營軍用船艦及其他軍用處所建築物或軍略之秘密文書圖畫消息或物品洩漏或交付於敵國者。
- 五 爲敵國之間諜或幫助敵國之間諜者。

本條之未遂罪罰之。

預備或陰謀犯本條之罪者處一年以上七年以下有期徒刑。

第一百十二條 外國ト開戦シ又ハ將ニ開戦セントスル時期ニ於テ民國ノ軍用ニ
供セサル兵器、彈藥其他直接ニ戰鬪ノ用ニ供スルヲ得ヘキ物品ヲ敵國ニ交
付シタル者ハ無期徒刑又ハ五年以上ノ有期徒刑ニ處ス

本條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

本條ノ罪ヲ犯サンコトヲ豫備又ハ陰謀シタル者ハ三年以下ノ有期徒刑ニ處
ス

(原文)

在與外國開戦或將開戦期內以非供供民國軍用之軍械彈藥及其他可直接供戰門用之物品交

付敵國者處無期徒刑或五年以上有期徒刑。

本條之未遂罪罰之。

預備或陰謀犯本條之罪者處三年以下有期徒刑。

第一百十三條 外國ト開戦シ又ハ將ニ開戦セントスル時期ニ於テ軍需品ノ供給

三二三

契約ヲ履行セス又ハ契約ニ照シテ履行セサル者ハ五年以下ノ有期徒刑ニ處シ且五千元以下ノ罰金ヲ併科スルコトヲ得
過失ニ因リテ前項ノ罪ヲ犯シタル者ハ二年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ千元以下ノ罰金ニ處ス

(原文) 在與外國開戰或將開戰期內不履行供給軍需之契約或不照契約履行者處五年以下有期徒刑
得併科五千元以下罰金。

因過失犯前項之罪者處二年以下有期徒刑拘役或一千元以下罰金

第一百四條 民國ノ國防ニ關スル秘密ノ文書、圖畫、消息又ハ物品ヲ漏洩若クハ交付シタル者ハ五年以下ノ有期徒刑ニ處ス
前項ノ文書、圖畫、消息又ハ物品ヲ外國政府又ハ其派遣者ニ漏洩シ又ハ交付シタル者ハ三年以上十年以下ノ有期徒刑ニ處ス
本條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

本條ノ罪ヲ犯サンコトヲ豫備又ハ陰謀シタル者ハ一年以下ノ有期徒刑ニ處ス

(原文) 洩漏或交付關於民國國防應秘密之文書圖畫消息或物品者處五年以下有期徒刑。
洩漏或交付前項之文書圖畫消息或物品於外國政府或其派遣之人者處三年以上十年以下有期徒刑。

本條之未遂罪罰之。
預備或陰謀犯本條之罪者處一年以下有期徒刑

第一百五條 公務員カ職務上知悉シ又ハ所持セル前條第一項ノ文書、圖畫、消息又ハ物品ヲ過失ニ因リテ漏洩又ハ交付シタル者ハ二年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ千元以下ノ罰金ニ處ス

(原文) 公務員對於職務上知悉或持有前條第一項之文書圖畫消息或物品因過失而洩漏或交付者處二年以下有期徒刑拘役或一千元以下罰金。

第一百六條 第一百四條第一項ノ文書、圖畫、消息又ハ物品ヲ探索又ハ收集

シタル者ハ五年以下ノ有期徒刑ニ處ス

本條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

本條ノ罪ヲ犯サンコトヲ豫備又ハ陰謀シタル者ハ一年以下ノ有期徒刑ニ處ス

(原文)

刺探或收集第一百二十四條第一項之文書圖畫消息或物品者處五年以下有期徒刑。

本條之未遂罪罰之。

預備或陰謀犯本條之罪者處一年以下有期徒刑。

第十七條

第一百四條第一項ノ文書、圖畫、消息又ハ物品ヲ探索又ハ收集

センコトヲ意圖シ許可ナクシテ堡壘、砲臺、軍艦其他軍用ノ場所又ハ建築

物ニ入り若クハ其内ニ滞留シタル者ハ一年以下ノ有期徒刑ニ處ス

(原文)

意圖刺探或收集第一百二十四條第一項之文書圖畫消息或物品未受允准而入堡壘砲臺軍艦及其他軍用處所建築物或留滯其内者處一年以下有期徒刑。

第十八條

政府ノ委任ヲ受ケテ外國政府ニ對スル事務ヲ處理スル者力其委

任ニ違背シテ民國ニ損害ヲ及ホシタルトキハ無期徒刑又ハ七年以上ノ有期

徒刑ニ處ス

(原文)

受政府之委任處理對於外國政府之事務而違背其委任致生損害於民國者處無期徒刑或七年以上有期徒刑。

第十九條

民國カ外國ニ對シテ享有セル權利ヲ證明スヘキ文書、圖畫其他

ノ證據ヲ偽造、變造、毀棄又ハ隱匿シタル者ハ五年以上十二年以下ノ有期

徒刑ニ處ス

(原文)

偽造變造毀棄或隱匿可以證明民國對於外國所享權利之文書圖畫及其他證據者處五年以上十二年以下有期徒刑。

第二十條

本章ノ罪ヲ犯シタル者ハ第五十七條及ヒ第五十八條ノ規定ニ依

リテ公權ヲ褫奪スルコトヲ得

(原文)

犯本章之罪者得依第五十七條及第五十八條之規定褫奪公權。

第三章 國交ヲ妨害スル罪 (妨害國交罪)

第二百一十一條 友邦ノ元首ニ對シ故意ニ殺人ノ罪ヲ犯シタル者ハ死刑ニ處ス
本條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

本條ノ罪ヲ犯サンコトヲ豫備又ハ陰謀シタル者ハ一年以上七年以下ノ有期
徒刑ニ處ス

(原文)

對於友邦元首犯故意殺人罪者處死刑。

本條之未遂罪罰之。

預備或陰謀犯本條之罪者處一年以上七年以下有期徒刑。

第二百二十二條 友邦ノ元首ニ對シ故意ニ傷害ノ罪自由ヲ妨害スル罪及ヒ名譽
ヲ侵害スル罪ヲ犯シタル者ハ本刑ノ三分ノ一ヲ加重ス

(原文)

對於友邦元首犯故意傷害罪妨害自由罪及妨害名譽罪者加重本刑三分之一。

第二百二十三條 民國ニ派遣セラレタル外國ノ代表者ニ對シテ罪ヲ犯シタル者

ニ付テハ公務ヲ妨害スル罪ノ各條ノ規定ヲ準用ス

(原文)

對於派至民國之外國代表犯罪者準用妨害公務罪各條之規定。

第二百二十四條 私ニ外國ト戰鬪スル者ハ三年以上十年以下ノ有期徒刑ニ處ス
本條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

本條ノ罪ヲ犯サンコトヲ豫備又ハ陰謀シタル者ハ一年以下ノ有期徒刑ニ處
ス

(原文)

私與外國戰鬥者處三年以上十年以下有期徒刑。

本條之未遂罪罰之。

預備或陰謀犯本條之罪者處一年以下有期徒刑。

第二百五條 外國交戦ノ際政府ノ局外中立ノ命令ニ違背シタル者ハ一年以
下ノ有期徒刑、又ハ拘役ニ處シ三千元以下ノ罰金ヲ併科若クハ易科スルコ
トヲ得

(原文)

於外國交戦之際違背政府局外中立之命令者處一年以下有期徒刑拘役得併科或易科三千元

以下罰金。

三二〇

第二百二十六條 外國ヲ侮辱センコトヲ意圖シテ公然外國ノ國旗又ハ國章ヲ損壞、除去若クハ汚辱シタル者ハ一年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ三百元以下ノ罰金ニ處ス

(原文) 意圖侮辱外國公然損壞除去或汚辱外國之國旗國章者處一年以下有期徒刑拘役或三百元以下罰金。

第二百二十七條 第二百二十二條ノ名譽ヲ侵害スル罪及ヒ第二百二十六條ノ罪ハ外國政府ノ請求ヲ待テ之ヲ論ス

(原文) 第二百二十二條之妨害名譽罪及第二百二十六條之罪須外國政府之請求乃論。

第四章 瀆職ノ罪 (瀆職罪)

第二百二十八條 公務員カ職務上ノ行爲ニ關シテ賄賂其他不正ノ利益ヲ要求、約束又ハ收受シタルトキハ五年以下ノ有期徒刑ニ處シ且五千元以下ノ罰金

ヲ併科スルコトヲ得

公務員ニ對シ職務上ノ行爲ニ關シテ賄賂其他不正ノ利益ヲ提議、約束又ハ交付シタル者ハ二年以下ノ有期徒刑ニ處シ且三千元以下ノ罰金ヲ併科スルコトヲ得

第一項ノ罪ヲ犯シタル者ノ收受シタル賄賂ハ之ヲ沒收ス若シ其全部又ハ一部ヲ沒收スルコト能ハサルトキハ其價額ヲ追徵ス

(原文) 公務員對於職務上之行為要求期約或收受賄賂或其他不正利益者處五年以下有期徒刑併得併科五千元以下罰金。

對於公務員關於職務上之行為行求期約或交付賄賂或其他不正利益者處二年以下有期徒刑併得併科三千元以下罰金。

犯第一項之罪者所收受之賄賂沒收之若全部或一部不能沒收時追徵其價額。

第二百二十九條 公務員カ職務ニ違背スル行爲ニ關シテ賄賂其他不正ノ利益ヲ要求、約束又ハ收受シタルトキハ一年以上七年以下ノ有期徒刑ニ處シ且五

三二一

千元以下ノ罰金ヲ併科スルコトヲ得
 因テ職務ニ違背スル行爲ヲ爲シタル者ハ三年以上十年以下ノ有期徒刑ニ處
 シ且五千元以下ノ罰金ヲ併科スルコトヲ得
 公務員ニ對シ職務ニ違背スル行爲ニ關シテ賄賂其他不正ノ利益ヲ提議、約
 束又ハ交付シタル者ハ三年以下ノ有期徒刑ニ處シ且三千元以下ノ罰金ヲ併
 科スルコトヲ得

第一項及ヒ第二項ノ罪ヲ犯シタル者ノ收受シタル賄賂ハ之ヲ沒收ス若シ其
 全部又ハ一部ヲ沒收スルコト能ハサルトキハ其價額ヲ追徴ス

(原文) 公務員對於違背職務之行爲要求期約或收受賄賂或其他不正利益者處一年以上七年以下有
 期徒刑併科五千元以下罰金。
 因而爲違背職務之行爲者處三年以上十年以下有期徒刑併科五千元以下罰金。
 對於公務員關於違背職務之行爲行求期約或交付賄賂或其他不正利益者處三年以下有期徒刑
 併科三千元以下罰金。

犯第一項及第二項之罪者所收受之賄賂沒收之若全部或一部不能沒收時追徴其價額。

第三百十條 裁判ノ職務ヲ行フ公務員又ハ仲裁人カ其處理又ハ裁判スル法律

事件ニ關シテ賄賂其他不正ノ利益ヲ要求、約束又ハ收受シタルトキハ三年
 以上十年以下ノ有期徒刑ニ處シ且五千元以下ノ罰金ヲ併科スルコトヲ得
 裁判ノ職務ヲ行フ公務員又ハ仲裁人ニ對シ其處理又ハ裁判スル法律事件ニ
 關シテ賄賂其他不正ノ利益ヲ提議、約束又ハ交付シタル者ハ三年以下ノ有
 期徒刑ニ處シ且三千元以下ノ罰金ヲ併科スルコトヲ得

第一項ノ罪ヲ犯シタル者ノ收受シタル賄賂ハ之ヲ沒收ス若シ其全部又ハ一
 部ヲ沒收スルコト能ハサルトキハ其價格ヲ追徴ス

(原文) 有審判職務之公務員或公斷人對於處理或審判之法律事件要求期約或收受賄賂或其他不正
 利益者處三年以上十年以下有期徒刑併科五千元以下罰金。
 對於有審判職務之公務員或公斷人關於處理或審判之法律事件行求期約或交付賄賂或其他
 不正利益者處三年以下有期徒刑併科三千元以下罰金。

犯第一項之罪者所收受之賄賂沒收之若全部或一部不能沒收時追徵其價額。

三二四

第三十一條 未タ公務員タラサル時ニ於テ豫メ職務上ノ行爲ニ關シテ賄賂其他不正ノ利益ヲ要求、約束又ハ收受シ公務員ト爲リタル後ニ於テ之ヲ履行シタル者ハ公務員カ賄賂其他不正ノ利益ヲ要求、約束又ハ收受シタル場合ヲ以テ論ス

(原文)

於未爲公務員時預以職務上之行爲要求期約或收受賄賂或其他不正利益而於爲公務員後履行者以公務員要求期約或收受賄賂或其他不正利益論。

第三十二條 裁判ノ職務ヲ行フ公務員又ハ仲裁人カ法律ヲ明知シテ故ラニ之ヲ枉ケタルトキハ六月以上五年以下ノ有期徒刑ニ處ス

(原文)

有裁判職務之公務員或公斷人明知法律而故爲出入者處六月以上五年以下有期徒刑。

第三十三條 犯罪訴追ノ職務ヲ有スル公務員カ左ニ掲ケタル行爲ノ一ヲ犯シタルトキハ一年以上七年以下ノ有期徒刑ニ處ス

一 供述ヲ取ランコトヲ意圖シテ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタルコト

二 無罪ノ者タルコトヲ明知シテ訴追シ處罰ヲ受ケシメ又ハ有罪ノ者タルコトヲ明知シテ故ナク訴追セス處罰ヲ受ケシメサルコト

因テ人ヲ死又ハ重傷ニ致シタル者ハ故意傷害ノ罪ニ照シ重キニ從テ處斷ス

(原文)

有追訴犯罪職務之公務員犯左列行爲之一者處一年以上七年以下有期徒刑。

一 意圖取供而施強暴脅迫者。

二 明知爲無罪之人而使其受追訴處罰或明知爲有罪之人而無故不使其受追訴處罰者。

因而致人於死或重傷者比較故意傷害罪從重處斷。

第三十四條 刑罰執行ノ職務ヲ有スル公務員カ違法ニ刑罰ヲ執行シタルトキハ五年以下ノ有期徒刑ニ處シ執行吏カ違法ニ刑罰ヲ執行セサルトキハ三年以下ノ有期徒刑ニ處ス
執行吏カ過失ニ因リテ違法ニ刑罰ヲ執行シタルトキハ一年以下ノ有期徒刑拘役又ハ三百元以下ノ罰金ニ處ス

三二五

(原文)

有執行刑罰職務之公務員違法執行刑罰者處五年以下有期徒刑執行更違法不執行刑罰者處三年以下有期徒刑。

執行更因過失致違法執行刑罰者處一年以下有期徒刑拘役或三百元以下罰金。

第三百三十五條

公務員力租稅其他各種ノ收入ニ關シ徵收スヘカラサルモノナ

ルコトヲ明知シテ徵收シタルトキハ三年以下ノ有期徒刑又ハ拘役ニ處シ一千元以下ノ罰金ヲ併科若クハ易科スルコトヲ得

公務員力職務上發給スル金錢又ハ物品ニ付キ其發給スヘキモノナルコトヲ明知セルニ拘ラス抑留シテ發給セサルトキ又ハ控除セルトキ亦同シ
本條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

(原文)

公務員對於租稅及各項入款明知不履徵收而徵收者處三年以下有期徒刑拘役得併科或易科一千元以下罰金。

公務員對於職務上發給之款項物品明知應發給而抑留不發或尅扣者亦同。

本條未遂罪罰之。

第三百三十六條

公務員力其主管又ハ監督スル事務ニ關シテ直接又ハ間接ニ利

益ヲ圖リタルトキハ三年以下ノ有期徒刑ニ處シ且五千元以下ノ罰金ヲ併科スルコトヲ得

(原文)

公務員對於主管或監督之事務直接或間接圖利者處三年以下有期徒刑得併科五千元以下罰金。

第三百三十七條

公務員力民國ノ內政ニ關シ秘密ニスヘキ文書、圖畫、消息又

ハ物品ヲ漏洩又ハ交付シタルトキハ三年以下ノ有期徒刑ニ處シ且五千元以下ノ罰金ヲ併科スルコトヲ得

(原文)

公務員洩漏或交付關於民國內政應秘密之文書圖畫消息或物品者處三年以下有期徒刑得併科五千元以下罰金。

第三百三十八條

郵務局又ハ電報局ニ於テ職務ヲ執行スル公務員力投寄セラレ

タル郵便物又ハ電報ヲ開封又ハ隱匿シタルトキハ三年以下ノ有期徒刑又ハ拘役ニ處シ五百元以下ノ罰金ヲ併科若クハ易科スルコトヲ得

(原文)

在郵務局或電報局執行職務之公務員開拆或隱匿投寄之郵件或電報者處三年以下有期徒刑

拘役併科或易科五百元以下罰金。

第三百三十九條 公務員カ其所屬ノ下級公務員ヲ誘惑シテ第二百二十八條乃至第三百二十八條ノ罪ヲ犯シタルトキハ誘惑シタル罪ノ本刑ニ處シテ二分ノ一ヲ減輕ス

(原文) 公務員誘惑所屬下級公務員犯一百二十八條至一百三十八條之罪者處所誘惑罪之本刑減輕二分之一。

第四百十條 公務員カ其職務上ノ權力、機會又ハ手段ヲ利用シテ故意ニ本章以外ノ罪ヲ犯シタルトキハ本刑ノ三分ノ一ヲ加重ス但公務員ノ身分ニ因リ已ニ別ニ其刑ヲ規定スルモノアルトキハ此限ニ在ラス

(原文) 公務員假借職務上之權力機會或方法以故意犯本章以外各罪者加重本刑三分之一但因公務員之身分已特別規定其刑者不在此限。

第四百十一條 本章ノ罪ヲ犯シタル者ハ第五十七條及ヒ第五十八條ノ規定ニ依リテ公權ヲ褫奪スルコトヲ得

(原文) 犯本章之罪者得依第五十七條及第五十八條之規定褫奪公權。

第五章 公務ヲ妨害スル罪 (妨害公務罪)

第四百十二條 公務員又ハ其佐理人カ法令ニ依リテ職務ヲ執行スルニ當リ之ニ對シテ暴行又ハ脅迫ヲ加ヘタル者ハ三年以下ノ有期徒刑ニ處ス
公務員又ハ其佐理人ヲシテ一定ノ職務ヲ執行セシメ又ハ法令ニ依ル一定ノ職務執行ヲ妨害シ若クハ公務員ヲシテ辭職セシメンコトヲ意圖シテ暴行又ハ脅迫ヲ加ヘタル者亦同シ
前二項ノ罪ヲ犯シ因テ公務員又ハ其佐理人ヲ死又ハ重傷ニ致シタル者ハ故意傷害ノ罪ニ照シ重キニ從テ處斷ス

(原文) 對於公務員或其佐理人依法執行職務時施強暴脅迫者處三年以下有期徒刑。
意圖使公務員或其佐理人執行一定之職務或妨害其依法執行一定之職務或使公務員辭職而施強暴脅迫者亦同。

犯前二項之罪因而致公務員或其佐理人於死或重傷者比較故意傷害罪從重處斷。

第四百十三條 公然衆ヲ聚メテ前條ノ罪ヲ犯シタル場合ニ於テ現場ニ在リテ

勢ヲ助ケタル者ハ一年以下ノ有期徒刑ニ處シ暴行又ハ脅迫ヲ首謀シ若クハ下手實行シタル者ハ一年以上七年以下ノ有期徒刑ニ處ス

因テ公務員又ハ其佐理人ヲ死又ハ重傷ニ致シタルトキハ暴行又ハ脅迫ヲ首謀シタル者及ヒ之ヲ下手實行シタル者ハ故意傷害ノ罪ニ照シ重キニ從テ處斷ス

(原文) 公然衆衆犯前條之罪者在協助勢之人處一年以下有期徒刑首謀及下手實施強暴脅迫者處一年以上七年以下有期徒刑。

因而至公務員或其佐理人於死或重傷者首謀及下手實施強暴脅迫之人比較故意傷害罪從重處斷。

第四百十四條 公務員ノ職務上管掌シ又ハ第三者ニ委託シテ管掌セル文書、

圖畫又ハ物品ヲ毀棄、損壞又ハ隱匿シ若クハ使用ニ堪ヘサルニ至ラシメタ

ル者ハ六月以上五年以下ノ有期徒刑ニ處ス

(原文) 毀棄損壞或隱匿公務員職務上管掌或委託第三人掌管之文書圖畫物品或致令不堪用者處六月以上五年以下有期徒刑。

第四百十五條 公務員ノ施シタル封印又ハ差押ノ標示ヲ損壞、除去又ハ汚穢

シ若クハ其效力ニ違背スル行爲ヲ爲シタル者ハ一年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ三百元以下ノ罰金ニ處ス

(原文) 損壞除去或汚穢公務員所施之封印或查封之標示或爲違背其效力之行爲者處一年以下有期徒刑拘役或三百元以下罰金。

第四百十六條 公務員方法令ニ依リテ職務ヲ執行スル時現場ニ於テ侮辱シ又

ハ法令ニ依リテ執行スル職務ニ對シテ公然侮辱シタル者ハ六月以下ノ有期徒刑、拘役又ハ三百元以下ノ罰金ニ處ス

公署ニ對シテ公然侮辱シタル者亦同シ

(原文) 於公務員依法執行職務時當場侮辱或對於其依法執行之職務公然侮辱者處六月以下有期徒刑

刑拘役或三百元以下罰金。

對於公署公然侮辱者亦同。

第四百十七條 公務員又ハ公署ヲ侮辱センコトヲ意圖シテ公衆ノ場所ニ貼付シタル告文ヲ損壞、除去又ハ汚穢シタル者ハ拘役又ハ百元以下ノ罰金ニ處ス

(原文)

意圖侮辱公務員或公署而損壞除去或汚穢實貼公衆場所之文告者處拘役或一百元以下罰金

第四百十八條 本章ノ罪ヲ犯シタル者ハ第五十七條及ヒ第五十八條ノ規定ニ依リテ公權ヲ褫奪スルコトヲ得

(原文)

犯本章之罪者得依第五十七條及第五十八條之規定褫奪公權。

第六章 選舉ヲ妨害スル罪 (妨害選舉權)

第四百十九條 法令ニ依リテ施行スル中央及ヒ地方ノ選舉ニ際シ暴行、脅迫其他不法ノ方法ヲ以テ他人カ自由ニ其選舉權ヲ行使セントスルヲ妨害シタ

ル者ハ五年以下ノ有期徒刑ニ處ス

本條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

(原文)

對於依法所設立之中央及地方選舉以強暴脅迫或其他非法之方法妨害他人自由行使其選舉

權者處五年以下有期徒刑。

本條之未遂罪罰之。

第四百五十條 選舉權者カ賄賂其他不正ノ利益ヲ要求、約束又ハ收受シテ其選舉權ヲ行使セサルヘキコト若クハ一定ノ行使ヲ爲スヘキコトヲ許諾シタルトキハ三年以下ノ有期徒刑ニ處シ且五千元以下ノ罰金ヲ併科スルコトヲ得

選舉權者ニ對シ賄賂其他不正ノ利益ヲ提議、約束又ハ交付シテ選舉權ヲ行使セサルヘキコト又ハ一定ノ行使ヲ爲スヘキコトヲ約諾セシメタル者ハ二年以下ノ有期徒刑ニ處シ且三千元以下ノ罰金ヲ併科スルコトヲ得

第一項ノ罪ヲ犯シタル者ノ收受シタル賄賂ハ之ヲ沒收ス若シ其全部又ハ一部ヲ沒收スルコト能ハサルトキハ其價額ヲ追徴ス

(原文)

有選舉權之人要求期約或收受賄賂或其他不正利益而許以不行使其選舉權或為一定之行使者處三年以下有期徒刑併科五千元以下罰金。

對於有選舉權之人行求期約或交付賄賂或其他不正利益而約其不行使選舉權或為一定之行使者處二年以下有期徒刑併科三千元以下罰金。

犯第一項之罪者所收受之賄賂沒收之若全部或一部不能沒收時追徵其價額。

第五十一條

生計上ノ利害ヲ以テ選舉人ヲ誘惑シテ其選舉權ヲ行使セシメス又ハ一定ノ行使ヲ爲サシメタル者ハ三年以下ノ有期徒刑ニ處ス

(原文)

以生計上之利害誘惑選舉人不行使其選舉權或為一定之行使者處三年以下有期徒刑。

第五十二條

詐術其他不法ノ手段ヲ以テ投票ヲシテ不正確ノ結果ヲ發生セシメ又ハ選舉ノ結果ヲ變造シタル者ハ三年以下ノ有期徒刑ニ處ス
本條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

(原文)

以詐術或其他非法之方法使投票發生不正確之結果或變造選舉之結果者處三年以下有期徒刑。

本條之未遂罪罰之。

第五十三條

選舉ヲ妨害又ハ擾亂シタル者ハ一年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ五百元以下ノ罰金ニ處ス

(原文)

妨害或擾亂選舉者處一年以下有期徒刑拘役或五百元以下罰金。

第五十四條

無記名投票ノ選舉ニ於テ被選舉人ノ姓名ヲ探索シタル者ハ五百元以下ノ罰金ニ處ス

(原文)

於無記名投票之選舉刺探被選舉人之姓名者處五百元以下罰金。

第五十五條

本章ノ罪ヲ犯シタル者ハ第五十七條及ヒ第五十八條ノ規定ニ依リテ公權ヲ褫奪スルコトヲ得

(原文)

犯本章之罪者得依第五十七條及第五十八條之規定褫奪公權。

第七章 秩序ヲ妨害スル罪 (妨害秩序罪)

第四百五十六條 公然衆ヲ聚メテ暴行又ハ脅迫ヲ爲サンコトヲ意圖シ既ニ當該公務員ヨリ解散ノ命令ヲ受クルコト三回以上ニ及フモ解散セサルトキハ現場ニ在テ勢ヲ助ケタル者ハ六月以下ノ有期徒刑、拘役又ハ三百元以下ノ罰金ニ處シ首謀者ハ三年以下ノ有期徒刑ニ處ス

(原文) 公然衆意圖爲強暴脅迫已受該管公務員解散命令三次以上而不解散者在場助勢之人處六月以下有期徒刑拘役或三百元以下罰金首謀者處三年以上有期徒刑。

第四百五十七條 公然衆ヲ聚メテ暴行又ハ脅迫ヲ爲シタル場合ニ於テ現場ニ在リテ勢ヲ助ケタル者ハ一年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ三百元以下ノ罰金ニ處シ暴行又ハ脅迫ヲ首謀シ又ハ下手實行シタル者ハ六月以上五年以下ノ有期徒刑ニ處ス

(原文) 公然衆乘強暴脅迫者在場助勢之人處一年以下有期徒刑拘役或三百元以下罰金首謀及下手實施強暴脅迫者處六月以上五年以下有期徒刑。

第四百五十八條 生命、身體、又ハ財産ヲ害スヘキコトヲ以テ公衆ヲ恐嚇シテ公安ニ危害ヲ生セシメタル者ハ二年以下ノ有期徒刑ニ處ス

(原文) 以加害生命身體財產之事恐嚇公衆致生危害於公安者處二年以下有期徒刑。

第四百五十九條 暴行、脅迫又ハ詐術ヲ以テ合法ノ集會ヲ阻止シ又ハ擾亂シタル者ハ二年以下ノ有期徒刑ニ處ス

(原文) 以強暴脅迫或詐術阻止或擾亂合法之集會者處二年以下有期徒刑。

第四百六十條 文字、圖畫、演說其他ノ手段ヲ以テ公然左ニ掲ケタル行爲ノ一ヲ爲シタル者ハ二年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ千元以下ノ罰金ニ處ス

- 一 他人ヲ煽惑シテ罪ヲ犯サシメタルモノ
- 二 他人ヲ煽惑シテ法令ニ違背セシメ又ハ合法ノ命令ニ抗拒セシメタル

モノ

三 他人ノ犯罪ヲ賞揚シテ公安ニ危害ヲ生セシメタルモノ

(原文)

以文字圖畫演說或他法公然爲左列行爲之一者處二年以下有期徒刑拘役或一千元以下罰金

- 一 煽惑他人犯罪者。
- 二 煽惑他人違背法令或抗拒合法之命令者。
- 三 頌揚他人所犯之罪致生危害於公安者。

第六十一條 犯罪ヲ主旨トスル結社ニ參與シタル者ハ三年以下ノ有期徒刑
 拘役又ハ五百元以下ノ罰金ニ處ス首謀者ハ一年以上七年以下ノ有期徒刑ニ
 處ス

(原文)

參與以犯罪爲宗旨之結社者處三年以下有期徒刑拘役或五百元以下罰金首謀者處一年以上七年以下有期徒刑。

第六十二條 犯罪ヲ豫防シ得ヘカリシ際左ニ掲ケタル犯罪ノ將ニ行ハレン
 トスルヲ知リテ之ヲ當該公務員又ハ將ニ害ヲ被ラントスル人ニ報告セサリ

シ者ハ一年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ三百元以下ノ罰金ニ處ス

- 一 内亂ノ罪
- 二 外患ノ罪
- 三 第八十七條、第八十八條、第九十條、第九十二條、第九十三條及ヒ第九十七條ノ公共危險ノ罪
- 四 強姦ノ罪
- 五 殺人ノ罪
- 六 強盜及ヒ海賊ノ罪

(原文)

於犯罪可以預防之際知有將犯左列各罪而不向該管公務員或將被害之人報告者處一年以下有期徒刑拘役或三百元以下罰金。

- 一 内亂罪。
- 二 外患罪。
- 三 第八十七條第一、八十八條第一、九十條第一、九十二條第一、九十三條第一

百九十七條之公共危險罪。

四 強姦罪。

五 殺人罪。

六 強盜及海盜罪。

第六十三條 軍人ヲ煽惑シテ職務ヲ執行セシメス又ハ紀律ヲ守ラシメス若クハ逃叛セシメタル者ハ六月以上五年以下ノ有期徒刑ニ處ス

(原文) 煽惑軍人不執行職務或不守紀律或逃叛者處六月以上五年以下有期徒刑。

第六十四條 許可ナクシテ軍隊ヲ招集シ又ハ軍需品ヲ發給シ若クハ軍隊ヲ引率シタル者ハ三年以下ノ有期徒刑ニ處ス

(原文) 未受允准招集軍隊發給軍需或率帶軍隊者處三年以下有期徒刑。

第六十五條 民國又ハ外國公務員ノ職權ヲ僭行シタル者ハ一年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ三百元以下ノ罰金ニ處ス

(原文) 僭行民國或外國公務員之職權者處一年以下有期徒刑拘役或三百元以下罰金。

第六十六條 公然民國公務員ノ服飾、徽章又ハ官位ヲ僭用シタル者ハ五百元以下ノ罰金ニ處ス

(原文) 公然僭用民國公務員服飾徽章或官銜者處五百元以下罰金。

第六十七條 民國ヲ侮辱センコトヲ意圖シテ公然民國ノ國旗又ハ國章ヲ損壞、除去若クハ汚辱シタル者ハ一年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ三百元以下ノ罰金ニ處ス

(原文) 意圖侮辱民國公然損壞除去或汚辱民國之國旗國章者處一年以下有期徒刑拘役或三百元以下罰金。

下罰金。

第六十八條 親屬カ第六十二條ニ列舉シタル罪ヲ犯サントスル場合ニ於テ之ヲ報告セサル者ハ其刑ヲ免除ス

(原文) 親屬將犯第一百六十二條所列舉之罪而不報告者免除其刑。

第六十九條 本章ノ罪ヲ犯シタル者ハ第五十七條及ヒ第五十八條ノ規定ニ

依リテ公權ヲ褫奪スルコトヲ得

(原文)

犯本章之罪者得依第五十七條及第五十八條之規定褫奪公權。

三四二

第八章 逃走ノ罪 (脱逃罪)

第七十條 法令ニ依リテ逮捕、拘禁セラレタル囚人カ逃走シタルトキハ一年以下ノ有期徒刑ニ處ス

拘禁ノ場所又ハ械具ヲ損壞シ若クハ暴行脅迫ヲ以テ前項ノ罪ヲ犯シタル者ハ五年以下ノ有期徒刑ニ處ス

衆ヲ聚メ暴行又ハ強迫ヲ以テ第一項ノ罪ヲ犯シタル場合ニ於テ現場ニ在リテ勢ヲ助ケタル者ハ五年以上十二年以下ノ有期徒刑ニ處シ暴行又ハ脅迫ヲ首謀シ若クハ下手實行シタル者ハ無期徒刑又ハ五年以上ノ有期徒刑ニ處ス
本條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

(原文)

依法逮捕拘禁之囚人脱逃者處一年以下有期徒刑。

損壞拘禁處所械具或以強暴脅迫犯前項之罪者處五年以下有期徒刑。

聚衆以強暴脅迫犯第一項之罪者在場助勢之人處五年以上十二年以下有期徒刑首謀及下手

實施強暴脅迫者處無期徒刑或五年以上有期徒刑。

本條之未遂罪罰之。

第七十一條 法令ニ依リテ逮捕拘禁セラレタル囚人ヲ盜取シ又ハ其逃走ニ

便宜ヲ與ヘタル者ハ三年以下ノ有期徒刑ニ處ス

拘禁ノ場所又ハ械具ヲ損壞シ若クハ暴行脅迫ヲ以テ前項ノ罪ヲ犯シタル者ハ六月以上五年以下ノ有期徒刑ニ處ス

衆ヲ聚メ暴行又ハ脅迫ヲ以テ第一項ノ罪ヲ犯シタル場合ニ於テ現場ニ在リテ勢ヲ助ケタル者ハ七年以上ノ有期徒刑ニ處シ暴行又ハ脅迫ヲ首謀シ又ハ下手實行シタル者ハ無期徒刑又ハ七年以上ノ有期徒刑ニ處ス
本條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

三四三

(原文)

盜取供法逮捕拘禁之囚人或便利其脫逃者處三年以下有期徒刑。

損壞拘禁處所械具或以強暴脅迫犯前項之罪者處六月以上五年以下有期徒刑。

乘乘以強暴脅迫犯前項之罪者在協助勢之人處七年以上有期徒刑首謀及下手實施強暴脅

迫者處無期徒刑或七年以上有期徒刑。

本條之未遂罪罰之。

第七十二條 公務員又ハ其佐理人カ職務上法令ニ依リテ逮捕拘禁シタル囚人ヲ盜取シ又ハ其逃走ニ便宜ヲ與ヘタルトキハ一年以上七年以下ノ有期徒刑ニ處ス

過失ニ因リテ前項ノ囚人ヲ逃走セシメタルトキハ六月以下ノ有期徒刑、拘役又ハ五百元以下ノ罰金ニ處ス

第一項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

(原文)

公務員或其佐理人盜取職務上依法逮捕拘禁之囚人或便利其脫逃者處一年以上七年以下有期徒刑。

因過失致前項之囚人脫逃者處六月以下有期徒刑拘役或五百元以下罰金。

第一項之未遂罪罰之。

第七十三條 本章ノ罪ヲ犯シタル者ハ第五十七條及ヒ第五十八條ノ規定ニ依リテ公權ヲ褫奪スルコトヲ得

(原文)

犯本章之罪者得依第五十七條及第五十八條之規定褫奪公權。

第九章 犯人藏匿及ヒ證據湮滅ノ罪 (藏匿犯人及湮滅證據罪)

第七十四條 犯人又ハ法令ニ依ル逮捕拘禁中逃走シタル者ヲ藏匿シ若クハ之ヲ隱避セシメタル者ハ二年以下ノ有期徒刑ニ處ス

前項ノ罪ヲ犯サンコトヲ意圖シテ本人ノ身代リト爲リタル者亦同シ

(原文)

藏匿犯人或依法逮捕拘禁之脫逃人或使之隱避者處二年以下有期徒刑。

意圖犯前項之罪而預警者亦同。

第七十五條 他人ノ刑事被告事件ニ關スル證據ヲ偽造、變造又ハ湮滅シ若

クハ偽造又ハ變造シタル證據ヲ使用シタル者ハ二年以下ノ有期徒刑ニ處ス

(原文) 偽造變造或運藏關係他人刑事被告案件之證據或使用偽造變造之證據者處二年以下有期徒刑。

第七十六條 前條ノ罪ヲ犯シ他人ノ刑事被告事件ノ裁判確定前自白シタル者ハ其刑ヲ減輕又ハ免除ス

(原文) 犯前條之罪於他人刑事被告案件裁判確定之前自白者減輕或免除其刑。

第七十七條 親屬カ犯人又ハ法令ニ依ル逮捕拘禁中逃走シタル者ヲ利センコトヲ圖リテ本章ノ罪ヲ犯シタルトキハ其刑ヲ免除ス

(原文) 親屬圖利犯人或依法逮捕拘禁之脫逃人而犯本章之罪者免除其刑。

第七十八條 本章ノ罪ヲ犯シタル者ハ第五十七條及ヒ第五十八條ノ規定ニ依リテ公權ヲ褫奪スルコトヲ得

(原文) 犯本章之罪者得依第五十七條及第五十八條之規定褫奪公權。

第十章 偽證及ヒ誣告ノ罪 (偽證及誣告罪)

第七十九條 裁判ノ職務ヲ執行スル公署ニ於テ裁判ヲ爲ス際證人、鑑定人又ハ通事カ事件ニ重要ノ關係アル事項ニ付キ供述前又ハ供述後ニ宣誓シテ虚偽ノ供述ヲ爲シタルトキハ一年以上七年以下ノ有期徒刑ニ處ス

(原文) 於執行審判職務之公署審判時證人鑑定人通譯於案情有重要關係之事項供前或供後具結而爲虚偽供述者處一年以上七年以下有期徒刑。

第八十條 他人ヲシテ刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受ケシメンコトヲ意圖シテ管轄公務員ニ對シテ誣告シタル者ハ七年以下ノ有期徒刑ニ處ス
他人ヲシテ刑事又ハ懲戒ノ處分ヲ受ケシメンコトヲ意圖シテ證據ヲ偽造又ハ變造シ若クハ偽造又ハ變造シタル證據ヲ使用シタル者亦同シ

(原文) 意圖他人受刑事或懲戒處分向該管公務員誣告者處七年以下有期徒刑。

意圖他人受刑事或懲戒處分而偽造變造證據或使用偽造變造之證據者亦同。

第八十一條 直系ノ尊親屬ヲ陷害センコトヲ意圖シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ本刑ノ二分ノ一ヲ加重ス
傍系ノ尊親屬ヲ陷害センコトヲ意圖シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ本刑ノ三分ノ一ヲ加重ス

(原文)

意圖陷害直系尊親屬而犯前條之罪者加重本刑二分之一。

意圖陷害旁系尊親屬而犯前條之罪者加重本刑三分之一。

第八十二條 犯人ヲ指定セスシテ管轄公務員ニ對シテ犯罪ヲ誣告シタル者ハ一年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ三百元以下ノ罰金ニ處ス
犯人ヲ指定セスシテ犯罪ノ證據ヲ偽造又ハ變造シ若クハ偽造又ハ變造シタル犯罪ノ證據ヲ使用シテ刑事訴訟手續ヲ開始セシメタル者亦同シ

(原文)

未指定犯人而向該管公務員誣告犯罪者處一年以下有期徒刑拘役或三百元以下罰金。

未指定犯人而偽造變造犯罪證據或使用偽造變造之犯罪證據致開始刑事訴訟程序者亦同。

第八十三條 自己又ハ親屬ノ自由又ハ名譽ヲ保存センコトヲ意圖シテ第七十九條ノ罪ヲ犯シタル者ハ其刑ヲ免除ス

(原文)

意圖保存自己或親屬之自由名譽而犯第七十九條之罪者免除其刑。

第八十四條 第七十九條乃至第八十二條ノ罪ヲ犯シ虛偽ノ陳述又ハ誣告シタル事件ノ裁判又ハ懲戒處分ノ確定前自白シタル者ハ其刑ヲ減輕又ハ免除ス

(原文)

犯第七十九條至第八十二條之罪於所虛偽陳述或所誣告之案件裁判或懲戒處分確定前自白者減輕或免除其刑。

第八十五條 本章ノ罪ヲ犯シタルトキハ本刑ヲ宣告スルノ外被害者ノ申請ニ因リ判決ノ全部又ハ一部ヲ新聞紙ニ登載シ其費用ハ犯人ニ於テ負擔スヘキコトヲ命スルコトヲ得

(刑文)

犯本章之罪者除宣告本刑外因被害人之聲請得令將判詞全部或一部登報其費用由犯人擔負

第八十六條 本章ノ罪ヲ犯シタル者ハ第五十七條及ヒ第五十八條ノ規定ニ依リテ公權ヲ褫奪スルコトヲ得

(原文) 犯本章之罪者得依第五十七條及第五十八條之規定褫奪公權。

第十一章 公共ノ危險ニ關スル罪 (公共危險罪)

第八十七條 火ヲ放テ現ニ人ノ使用セル住宅又ハ人ノ現在セル建築物鑛坑汽車、電車其他水、陸、空ヲ行走スル舟車ヲ燒燬シタル者ハ無期徒刑又ハ七年以上ノ有期徒刑ニ處ス

火ヲ失シテ前項ノ物ヲ燒燬シタル者ハ一年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ三百元以下ノ罰金ニ處ス

第一項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第一項ノ罪ヲ犯サンコトヲ豫備シタル者ハ一年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ

以三百元以下ノ罰金ニ處ス但其情狀ニ因リ其刑ヲ免除スルコトヲ得

(原文)

放火燒燬現供人使用之住宅或現有人所在之建築物鑛坑火車電車或其他行駛水陸空之舟車者處無期徒刑或七年以上有期徒刑。

失火燒燬前項之物者處一年以下有期徒刑拘役或三百元以下罰金。

第一項之未遂罪罰之。

預備犯第一項之罪者處一年以下有期徒刑拘役或三百元以下罰金但因其情節得免除其刑。

第八十八條

火ヲ放テ現ニ人ノ使用セサル他人所有ノ住宅又ハ人ノ現在セサル他人所有ノ建築物、鑛坑、汽車、電車其他水、陸、空行走用ノ舟車ヲ燒燬シタル者ハ三年以上十年以下ノ有期徒刑ニ處ス

火ヲ放テ前項ニ定ムル自己ノ所有物ヲ燒燬シテ公共ノ危險ヲ生セシメタル者ハ六月以上五年以下ノ有期徒刑ニ處ス

火ヲ失シテ第一項ノ物ヲ燒燬シタル者ハ六月以下ノ有期徒刑、拘役又ハ三百元以下ノ罰金ニ處ス火ヲ失シ前項ノ物ヲ燒燬シテ公共ノ危險ヲ生セシメ

タル者亦同シ

第一項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

第一項ノ罪ヲ犯サンコトヲ豫備シタル者ハ一年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ三百元以下ノ罰金ニ處ス但其情狀ニ因リ其刑ヲ免除スルコトヲ得

(原文)

放火燒燬現非供人使用之他人所有住宅或現未有人所在之他人所有建築物坑火車電車或
其他行駛水陸空之舟車者處三年以上十年以下有期徒刑。

放火燒燬前項之自己所有物致生公共危險者處六月以上五年以下有期徒刑。

失火燒燬第一項之物者處六月以下有期徒刑拘役或三百元以下罰金失火燒燬前項之物致生

公共危險者亦同。

第一項之未遂罪罰之。

預備犯第一項之罪者處一年以下有期徒刑拘役或三百元以下罰金但因其情節得免除其刑。

第八十九條 火ヲ放テ前二條以外ノ他人ノ所有物ヲ燒燬シテ公共ノ危險ヲ生セシメタル者ハ一年以上七年以下ノ有期徒刑ニ處ス

生セシメタル者ハ一年以上七年以下ノ有期徒刑ニ處ス

火ヲ放テ前二條以外ノ自己ノ所有物ヲ燒燬シテ公共ノ危險ヲ生セシメタル者ハ二年以下ノ有期徒刑ニ處ス

火ヲ失シテ前二條以外ノ物ヲ燒燬シテ公共ノ危險ヲ生セシメタル者ハ拘役又ハ三百元以下ノ罰金ニ處ス

(原文)

放火燒燬前二條以外之他人所有物致生公共危險者處一年以上七年以下有期徒刑。

放火燒燬前二條以外之自己所有物致生公共危險者處二年以下有期徒刑。

失火燒燬前二條以外之物致生公共危險者處拘役或三百元以下罰金。

第九十條 故意又ハ過失ニ因リテ火藥、蒸氣、電氣、瓦斯、其他ノ爆裂物ヲ炸裂セシメタルトキハ放火又ハ失火ノ規定ヲ準用ス

(原文)

故意或因過失使火藥蒸氣電氣煤氣或其他爆裂物炸裂者準用放火失火之規定。

第九十一條 蒸氣、電氣又ハ瓦斯ヲ漏逸セシメ又ハ之ヲ隔斷シテ公共ノ危險ヲ生セシメタル者ハ三年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ三百元以下ノ罰金ニ

處ス

因テ人ヲ死又ハ重傷ニ致シタル者ハ故意傷害ノ罪ニ照シ重キニ從テ處斷ス

(原文)

漏逸或間隔蒸氣電氣或煤氣致生公共危險者處三年以下有期徒刑拘役或三百元以下罰金。

因而致人於死或重傷者比較故意傷害罪從重處斷。

三五四

第九十二條 決水シテ現ニ人ノ使用セル住宅又ハ人ノ現在セル建築物、鑛

坑、汽車若クハ電車ヲ侵害シタル者ハ無期徒刑又ハ五年以上ノ有期徒刑ニ處ス

過失ニ因リ決水シテ前項ノ物ヲ侵害シタル者ハ一年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ三百元以下ノ罰金ニ處ス

第一項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

(原文)

決水浸害ヲ供人使用之住宅或現有人所在之建築物鑛坑或火車電車者處無期徒刑或五年以

上有期徒刑。

因過失決水浸害前項之物者處一年以下有期徒刑拘役或三百元以下罰金。
第一項之未遂罪罰之。

第九十三條 決水シテ現ニ人ノ使用セササ他人所有ノ住宅又ハ人ノ現在セ

サル他人所有ノ建築物又ハ鑛坑ヲ侵害シタル者ハ一年以上七年以下ノ有期徒刑ニ處ス

決水シテ前項ニ定ムル自己ノ所有物ヲ侵害シテ公共ノ危險ヲ生セシメタル者ハ六月以上五年以下ノ有期徒刑ニ處ス

過失ニ因リ決水シテ第一項ノ物ヲ侵害シタル者ハ六月以下ノ有期徒刑、拘役又ハ三百元以下ノ罰金ニ處ス

過失ニ因リ決水シテ前項ノ物ヲ侵害シ公共ノ危險ヲ生セシメタル者亦同シ
第一項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

(原文)

決水浸害現非供人使用之他人所有住宅或現未有人所在之他人所有建物或鑛坑者處一年以

三五五

上七年以下有期徒刑。

決水浸害前項之自己所有物致生公共危險者處六月以上五年以下有期徒刑。

因過失決水浸害第一項之物者處六月以下有期徒刑或三百元以下罰金。

因過失決水浸害前項之物致生公共危險者亦同。

第一項之未遂罪罰之。

第九十四條

決水シテ前二條以外ノ他人ノ所有物ヲ侵害シテ公共ノ危險ヲ生セシメタル者ハ五年以下ノ有期徒刑ニ處ス

決水シテ前二條以外ノ自己ノ所有物ヲ侵害シテ公共ノ危險ヲ生セシメタル者ハ二年以下ノ有期徒刑ニ處ス

過失ニ因リ決水シテ前二條以外ノ物ヲ侵害シテ公共ノ危險ヲ生セシメタル者ハ拘役又ハ三百元以下ノ罰金ニ處ス

(原文)

決水浸害前二條以外之他人所有物致生公共危險者處五年以下有期徒刑。

決水浸害前二條以外之自己所有物致生公共危險者處二年以下有期徒刑。

因過失決水浸害前二條以外之物致生公共危險者處拘役或三百元以下罰金。

第九十五條

堤防ヲ決潰シ水閘ヲ破壞シ又ハ水道用池ヲ損壞シテ公共ノ危險ヲ生セシメタル者ハ三年以下ノ有期徒刑ニ處ス

過失ニ因リ前項ノ罪ヲ犯シタル者ハ拘役又ハ三百元以下ノ罰金ニ處ス
第一項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

(原文)

決潰堤防破壞水閘或損壞自來水池致生公共危險者處三年以下有期徒刑。

因過失犯前項之罪者處拘役或三百元以下罰金。

第一項之未遂罪罰之。

第九十六條

火災又ハ水災ニ際シ防禦ノ器械ヲ隱匿又ハ損壞シ若クハ他ノ手段ヲ以テ消火又ハ防水ヲ妨害シタル者ハ三年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ三百元以下ノ罰金ニ處ス

(原文)

於火災水災之際隱匿或損壞防禦之器械或以他法妨害救火防水者處三年以下有期徒刑或拘役或三百元以下罰金。

第九十七條 人ノ現在スル汽車、電車、其他水、陸、空ヲ行走スル舟車ヲ顛覆又ハ破壊シタル者ハ無期徒刑又ハ五年以上ノ有期徒刑ニ處ス
 因テ人ヲ死ニ致シタル者ハ死刑又ハ無期徒刑ニ處シ因テ重傷ニ致シタル者ハ無期徒刑又ハ七年以上ノ有期徒刑ニ處ス
 過失ニ因リテ第一項ノ罪ヲ犯シタル者ハ一年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ三百元以下ノ罰金ニ處ス
 業務ニ従事スル者カ業務上ノ過失ニ因リテ第一項ノ罪ヲ犯シタルトキハ二年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ五百元以下ノ罰金ニ處ス
 第一項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

(原文) 傾覆或破壞現有人所在之火車電車或其他行駛水陸空之舟車者處無期徒刑或五年以上有期徒刑。

因而致人於死者處死刑或無期徒刑因而致重傷者處無期徒刑或七年以上有期徒刑。

因過失犯第一項之罪者處一年以下有期徒刑拘役或三百元以下罰金。

從事業務之人因業務上之過失犯第一項之罪者處二年以下有期徒刑拘役或五百元以下罰金。

第一項之未遂罪罰之。

第九十八條 軌道、燈塔、標識ヲ損壞シ又ハ其他ノ手段ヲ以テ汽車、電車其他水、陸、空ヲ行走スル舟車ノ往來ニ危險ヲ生セシメタル者ハ三年以上十年以下ノ有期徒刑ニ處ス
 因テ汽車、電車其他水、陸、空ヲ行走スル舟車ヲ顛覆又ハ破壊セシメタル者ハ前條ノ規定ニ依リテ處斷ス
 過失ニ因リテ第一項ノ罪ヲ犯シタル者ハ六月以下ノ有期徒刑、拘役又ハ三百元以下ノ罰金ニ處ス
 業務ニ従事スル者カ業務上ノ過失ニ因リテ第一項ノ罪ヲ犯シタルトキハ一年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ五百元以下ノ罰金ニ處ス

第一項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

三六〇

(原文) 損壞軌道燈塔標識或以他法致生火車電車或其他行駛水陸空之舟車往來之危險者處三年以上十年以下有期徒刑。

因而致火車電車或其他行駛水陸空之舟車傾覆或破壞者依前條之規定處斷。

因而失犯第一項之罪者處六月以下有期徒刑拘役或三百元以下罰金。

從事業務之人因業務上之過失犯第一項之罪者處一年以下有期徒刑拘役或五百元以下罰金。

第一項之未遂罪罰之。

第九十九條

陸路、水路、橋梁其他公眾往來ノ設備ヲ損壞又ハ壅塞シテ往

來ニ危險ヲ生セシメタル者ハ三年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ三百元以下ノ

罰金ニ處ス

因テ人ヲ死又ハ重傷ニ致シタル者ハ故意傷害ノ罪ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第一項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

(原文)

損壞或壅塞陸路水路橋梁或其他公眾往來之設備致生往來之危險者處三年以下有期徒刑拘役或三百元以下罰金。

因而致人於死或重傷者比較故意傷害罪從重處斷。

第一項之未遂罪罰之。

第二百條

犯罪ノ用ニ供センコトヲ意圖シテ爆發藥、綿花藥、雷汞其他類似

ノ爆發物ヲ製造又ハ所持シ若クハ外國ヨリ輸入シタル者ハ六月以上五年以

下ノ有期徒刑ニ處ス

本條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

(原文)

意圖供犯罪之用而製造或持有炸藥棉花藥雷汞及其他種類之爆發物或自外國輸入者處六月

以上五年以下有期徒刑。

本條之未遂罪罰之。

第二百一條

許可ナクシテ前條第一項ノ物ヲ製造又ハ所持シ若クハ外國ヨリ

輸入シタル者ハ三年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ五百元以下ノ罰金ニ處ス

本條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

(原文)

未受允准而製造或持有前條第一項之物或自外國輸入者處三年以下有期徒刑拘役或五百元

三六一

以下罰金。
本條之未遂罪罰之。

第二百二條 鐵道、郵便、電信、電話其他公衆ノ用ニ供スル用水、電氣又ハ瓦斯ノ事業ヲ妨害シタル者ハ五年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ五百元以下ノ罰金ニ處ス

(原文) 妨害鐵路郵務電報電話或供公衆之用水電氣煤氣事業者處五年以下有期徒刑拘役或五百元以下罰金。

第二百三條 鑛坑、工場其他之ニ類スル場所内ニ於ケル生命ノ保護ニ關スル設備ヲ損壞シテ他人ノ生命ニ危險ヲ生セシメタル者ハ一年以上七年以下ノ有期徒刑ニ處ス
過失ニ因リテ前項ノ罪ヲ犯シタル者ハ六月以下ノ有期徒刑、拘役又ハ三百元以下ノ罰金ニ處ス
業務ニ從事スル者カ業務上ノ過失ニ因リテ第一項ノ罪ヲ犯シタルトキハ一

年以上ノ有期徒刑、拘役又ハ五百元以下ノ罰金ニ處ス
第一項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

(原文) 損壞鑛坑工廠或其他相類之場所内關於保護生命之設備致生危險於他人生命者處一年以上七年以下有期徒刑。
因過失犯前項之罪者處六月以下有期徒刑拘役或三百元以下罰金。
從事業務之人因業務上之過失犯第一項之罪者處一年以下有期徒刑拘役或五百元以下罰金。
第一項之未遂罪罰之。

第二百四條 公衆ノ飲用ニ供セル水源、水道又ハ水道用池ニ毒物ヲ投放シ若クハ衛生ヲ妨害スヘキ物品ヲ混入シタル者ハ一年以上七年以下ノ有期徒刑ニ處ス
因テ人ヲ死又ハ重傷ニ致シタル者ハ故意傷害ノ罪ニ照シ重キニ從テ處斷ス
過失ニ因リテ第一項ノ罪ヲ犯シタル者ハ六月以下ノ有期徒刑、拘役又ハ三百元以下ノ罰金ニ處ス

第一項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

三六四

(原文) 投放毒物或混入妨害衛生物品於供公眾所飲之水源水道或自來水池者處一年以上七年以下
有期徒刑。

因而致人於死或重傷者比較故意傷害罪從重處斷。

因過失犯第一項之罪者處六月以下有期徒刑拘役或三百元以下罰金。

第一項之未遂罪罰之。

第二百五條 衛生ヲ妨害スヘキ物品ヲ製造販賣シ又ハ販賣センコトヲ意圖シ
テ陳列シタル者ハ六月以下ノ有期徒刑又ハ拘役ニ處シ千元以下ノ罰金ヲ併
科若クハ易科スルコトヲ得

(原文) 製造販賣或意圖販賣而陳列妨害衛生之物品者處六月以下有期徒刑拘役併科或易科一千
元以下罰金。

第二百六條 傳染病豫防ノ爲メニ公布セラレタル検査又ハ入港ニ關スル法令
ニ違背シタル者ハ二年以下ノ有期徒刑、拘役又ハ千元以下ノ罰金ニ處ス

(原文) 違背關於預防傳染病所公布之檢査或進口之法令者處二年以下有期徒刑拘役或一千元以下

罰金。

第二百七條 工事請負人又ハ工事監督人カ建築物ノ營造又ハ取毀シニ際シ建
築術ノ成規ニ違背シテ公共ノ危險ヲ生セシメタルトキハ二年以下ノ有期徒
刑、拘役又ハ三千元以下ノ罰金ニ處ス

(原文) 承攬工程人或監工人於營造或拆卸建築物時違背建築術成規致生公共危險者處二年以下有
期徒刑拘役或三千元以下罰金。

第二百八條 災害ニ際シ公務員ト締結シタル糧食其他日用必需品ノ供給ニ關
スル契約ヲ履行セス又ハ契約ニ照シテ履行セスシテ公共ノ危險ヲ生セシメ
タル者ハ六月以上五年以下ノ有期徒刑ニ處シ且三千元以下ノ罰金ヲ併科ス
ルコトヲ得

(原文) 於災害之際關於與公務員締結供給糧食或其他日用必需品之契約而不履行或不照契約履行。
致生公共危險者處六月以上五年以下有期徒刑併科三千元以下罰金。

第二百九條 自己ノ所有物カ既ニ差押ヲ受ケ物權ヲ負擔シ又ハ賃貸セラレ若

三六五

クハ保險ニ付セラレタルトキハ本章ノ罪ニ關シテハ他人ノ所有物ヲ以テ論ス

(原文) 自己所有物已受查封或擔負物權或已質貸或保險者關於本章之罪以他人所有物論。

第二百十條 本章ノ罪ヲ犯シタル者ハ第五十七條及ヒ第五十八條ノ規定ニ依リテ公權ヲ褫奪スルコトヲ得

(原文) 犯本章之罪者得依第五十七條及第五十八條之規定褫奪公權。

第十二章 貨幣偽造ノ罪 (偽造貨幣罪)

第二百十一條 行使ノ用ニ供センコトヲ意圖シテ通用ノ貨幣、紙幣又ハ銀行券ヲ偽造又ハ變造シタル者ハ無期徒刑又ハ五年以上ノ有期徒刑ニ處シ且三千元以下ノ罰金ヲ併科スルコトヲ得
行使ノ用ニ供センコトヲ意圖シテ偽造又ハ變造シタル通用ノ貨幣紙幣又ハ

銀行券ヲ收集シタル者亦同シ

本條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

(原文)

意圖供行使之用而偽造變造通用之貨幣紙幣銀行券者處無期徒刑或五年以上有期徒刑併科三千元以下罰金。

科三千元以下罰金。

意圖供行使之用而收集偽造變造之通用貨幣紙幣銀行券者亦同

本條之未遂罪罰之。

第二百十二條 偽造又ハ變造シタル通用ノ貨幣、紙幣又ハ銀行券ヲ行使シ若クハ行使ノ用ニ供センコトヲ意圖シテ人ニ交付シタル者ハ無期徒刑又ハ五年以上ノ有期徒刑ニ處シ且三千元以下ノ罰金ヲ併科スルコトヲ得
收受ノ後偽造又ハ變造シタル通用ノ貨幣、紙幣又ハ銀行券ナルコトヲ知りテ仍ホ之ヲ行使シ又ハ行使ノ用ニ供センコトヲ意圖シテ人ニ交付シタル者ハ二千元以下ノ罰金ニ處ス
第一項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

(原文) 行使偽造變造之通用貨幣紙幣銀行券或意圖供行使之用而交付於人者處無期徒刑或五年以上有期徒刑得併科三千元以下罰金。

收受後方知爲偽造變造之通用貨幣紙幣銀行券而仍行使或意圖供行使之用而交付於人者處二千元以下罰金。

第一項之未遂罪罰之。

第二百十三條 行使ノ用ニ供センコトヲ意圖シテ通用貨幣ノ分量ヲ減損シタル者ハ五年以下ノ有期徒刑ニ處シ且千元以下ノ罰金ヲ併科スルコトヲ得
行使ノ用ニ供センコトヲ意圖シテ分量ヲ減損シタル通用貨幣ヲ收集シタル者亦同シ
本條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

(原文)

意圖供行使之用而減損通用貨幣之分量者處五年以下有期徒刑得併科一千元以下罰金。

意圖供行使之用而收集減損分量之通用貨幣者亦同。

本條之未遂罪罰之。

第二百十四條 分量ヲ減損シタル通用貨幣ヲ行使シ又ハ行使ノ用ニ供センコトヲ意圖シテ人ニ交付シタル者ハ五年以下ノ有期徒刑ニ處シ且千元以下ノ罰金ヲ併科スルコトヲ得
收受ノ後分量ヲ減損シタル通用貨幣ナルコトヲ知リテ仍ホ之ヲ行使シ又ハ行使ノ用ニ供センコトヲ意圖シテ人ニ交付シタル者ハ千元以下ノ罰金ニ處ス

第一項ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

(原文)

行使減損分量之通用貨幣或意圖供行使之用而交付於人者處五年以下有期徒刑得併科一千元以下罰金。

收受後方知爲減損分量之通用貨幣而仍行使或意圖供行使之用而交付於人者處一千元以下罰金。

第一項之未遂罪罰之。

第二百十五條 通用ノ貨幣、紙幣又ハ銀行券ノ偽造又ハ變造ノ用ニ供センコ

トチ意圖シ又ハ通用貨幣ノ分量ヲ減損スヘキ用ニ供センコトヲ意圖シテ各種ノ器械又ハ原料ヲ製造、交付若クハ收得シタル者ハ五年以下ノ有期徒刑ニ處シ且千元以下ノ罰金ヲ併科スルコトヲ得

(原文)

意圖供偽造變造通用之貨幣紙幣銀行券或意圖供減損通用貨幣分量之用而製造交付或收受各項器械原料者處五年以下有期徒刑併科一千以下罰金。

第二百十六條 偽造又ハ變造シタル通用ノ貨幣、紙幣、銀行券又ハ分量ヲ減損シタル通用貨幣若クハ第二百十五條ノ器械並ニ原料ハ犯人ニ屬スルト否トヲ問ハス之ヲ沒收ス

(原文)

偽造變造之通用貨幣紙幣銀行券減損分量之通用貨幣及第二百一十五條之器械原料不問屬於犯人與否沒收之。

第二百十七條 本章ノ罪ヲ犯シタル者ハ第五十七條及ヒ第五十八條ノ規定ニ依リテ公權ヲ褫奪スルコトヲ得

(原文)

犯本章之罪者得依第五十七條及第五十八條之規定褫奪公權。

第十三章 度量衡偽造ノ罪 (偽造度量衡罪)

第二百十八條 行使ノ用ニ供センコトヲ意圖シテ定程ニ違背シタル度量衡ヲ製造シ又ハ度量衡ノ定程ヲ變更シタル者ハ一年以下ノ有期徒刑又ハ拘役ニ處シ三百元以下ノ罰金ヲ併科又ハ易科スルコトヲ得
本條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

(原文)

意圖供行使之用而製造違背定程之度量衡或變更度量衡之定程者處一年以下有期徒刑拘役併科或易科三百元以下罰金。

本條之未遂罪罰之。

第二百十九條 行使ノ用ニ供センコトヲ意圖シテ定程ニ違背シタル度量衡ヲ販賣シタル者ハ一年以下ノ有期徒刑又ハ拘役ニ處シ三百元以下ノ罰金ヲ併科又ハ易科スルコトヲ得

本條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

(原文) 意圖供行使之用而販賣違背定程之度量衡者處一年以下有期徒刑拘役併科或易科三百元以下罰金。

本條之未遂罪罰之。

三七二

第二百二十條 定程ニ違背シタル度量衡ヲ行使シタル者ハ二年以下ノ有期徒刑又ハ拘役ニ處シ千元以下ノ罰金ヲ併科又ハ易科スルコトヲ得
本條ノ未遂罪ハ之ヲ罰ス

(原文)

行使違背定程之度量衡者處二年以下有期徒刑拘役併科或易科一千元以下罰金

本條之未遂罪罰之。

第二百二十一條 行使ノ用ニ供センコトヲ意圖シテ定程ニ違背シタル度量衡ヲ所持スル者ハ百元以下ノ罰金ニ處ス

(原文)

意圖供行使之用而持有違背定程之度量衡者處一百元以下罰金。

第二百二十二條 前條ノ定程ニ違背シタル度量衡ハ犯人ニ屬スルト否トヲ問

ハス之ヲ沒收ス

(原文)

前條之違背定程度量衡不同屬於犯人與否沒收之。

第二百二十三條 本章ノ罪ヲ犯シタル者ハ第五十七條及ヒ第五十八條ノ規定ニ依リテ公權ヲ褫奪スルコトヲ得

(原文)

犯本章之罪者得依第五十七條及第五十八條之規定褫奪公權。

第十四章 文書及ヒ印章偽造ノ罪 (偽造文書印文罪)

第二百二十四條 文書ヲ偽造又ハ變造シテ其公衆又ハ他人ニ損害ヲ生セシムルニ足ルモノナルトキハ五年以下ノ有期徒刑ニ處ス

(原文)

偽造變造文書足以生損害於公衆或他人者處五年以下有期徒刑。

第二百二十五條 公文書ヲ偽造又ハ變造シテ其公衆又ハ他人ニ損害ヲ生セシムルニ足ルモノナルトキハ一年以上七年以下ノ有期徒刑ニ處ス

(原文)

偽造變造公文書足以生損害於公衆或他人者處一年以上七年以下有期徒刑。

三七三